UCHINONO

内野々遺跡

林業試験場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992.3

宮崎県教育委員会

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき、厚く御礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、林業試験場の建設に伴い、記録保存のため西郷村内野々遺跡の発掘調査を行いました。今回の調査では、縄文時代の集石遺構、弥生時代の竪穴住居址をはじめ、大量の土器や石器を発掘しました。それらの遺構・遺物によって、縄文時代の地域間交流や、弥生時代から古墳時代にかけての人々の生活の様子を垣間見ることができたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけではなく、社会教育や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成4年3月

宮崎県教育委員会

教育長　**髙　山　義　孝**

例　　言

1．　本書は、県林業試験場の移転建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した西郷村内野々遺跡の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、平成２年３月７日から３月30日、同４月16日から８月７日まで行った。

3．　本書に使用した位置図は、国土地理院発行の５万分の１図をもとに作成し、遺跡周辺地形図については、宮崎県土地開発公社作成の千分の１図をもとに製図、作成した。

4．　現地での図面作成は、調査員の他に、文化課埋蔵文化財係職員の応援を得、また一部は測量会社に委託した。

5．　遺物・図面の整理は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測・拓本・製図等は、東憲章のほか小野信彦氏（北方町教育委員会）、整理補助員の協力を得た。

6．　２号住居址出土の長頸壷内部に見られた炭化物について、東京大学総合研究資料館松谷暁子氏に識別を依頼し、玉稿を賜った。

7．　石器の石材については、宍戸章氏（元文化課職員）に御教示いただいた。

8．　本書に使用した写真は、東が撮影した。

9．　本書に使用した方位は、位置図・周辺地形図については真北、他は全て磁北である。レベルは、海抜絶対高である。また、本書で使用した記号は、ＳＡが竪穴住居址、ＳＣが土坑、ＳＩが集石遺構を示している。土器の色調については、「新版標準土色帖」に拠った。

10.　本書の執筆・編集は、東が行った。

11.　遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　遺跡の環境 …… 2
第Ⅱ章　調査の概要
第１節　調査の経過 …… 4
第２節　層　序 …… 7
第Ⅲ章　調査の記録
第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 8
第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 33
第３節　時期不明確な遺構と遺物 …… 57
第Ⅳ章　まとめ …… 65

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　周辺地形図 …… 4
第３図　遺構分布図 …… 5～6
第４図　土層断面図 …… 7
第５図　集石遺構実測図(1) …… 9
第６図　集石遺構実測図(2) …… 10
第７図　集石遺構実測図(3) …… 11
第８図　土坑実測図(1) …… 12
第９図　縄文土器実測図(1) …… 14
第10図　縄文土器実測図(2) …… 15
第11図　縄文土器実測図(3) …… 16
第12図　縄文土器実測図(4) …… 17
第13図　縄文土器実測図(5) …… 19
第14図　縄文土器実測図(6) …… 20
第15図　縄文土器実測図(7) …… 21
第16図　縄文土器実測図(8) …… 22
第17図　縄文土器実測図(9) …… 23
第18図　縄文土器実測図(10) …… 25
第19図　縄文土器実測図(11) …… 26
第20図　ＳＡ１・ＳＡ２実測図 …… 34
第21図　ＳＡ１・ＳＡ２出土土器実測図 …… 35

第22図　ＳＡ２出土土器実測図 …… 36
第23図　ＳＡ２出土石器実測図 …… 37
第24図　ＳＡ２・ＳＡ３出土土器実測図 …… 38
第25図　ＳＡ３実測図 …… 39
第26図　ＳＡ４・ＳＡ５・ＳＡ８・ＳＡ10実測図 …… 40
第27図　ＳＡ４・ＳＡ８出土土器実測図 …… 41
第28図　ＳＡ８出土土器実測図 …… 42
第29図　ＳＡ８出土石器実測図 …… 43
第30図　ＳＡ６実測図 …… 44
第31図　ＳＡ６出土土器実測図 …… 45
第32図　ＳＡ６・ＳＡ７出土土器実測図 …… 46
第33図　ＳＡ６出土石器実測図 …… 46
第34図　ＳＡ９実測図 …… 47
第35図　ＳＡ９出土土器実測図 …… 48
第36図　遺構外出土弥生土器実測図(1) …… 49
第37図　遺構外出土弥生土器実測図(2) …… 50
第38図　遺構外出土弥生土器実測図(3) …… 51
第39図　Ｂ区出土弥生土器実測図 …… 52
第40図　遺構外出土石器実測図 …… 53
第41図　土坑実測図(2) …… 57
第42図　石器実測図(1) …… 59
第43図　石器実測図(2) …… 60
第44図　石器実測図(3) …… 61
第45図　石器実測図(4) …… 62
第46図　石器実測図(5) …… 63
第47図　石鏃分類図 …… 64

表　目　次

集石遺構一覧表 …… 11
縄文土器観察表 …… 27～32
住居址一覧表 …… 47
弥生土器観察表 …… 54～56

付論
　内野々遺跡出土炭化物の識別（松谷暁子） …… 82

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

内野々遺跡は、宮崎県東臼杵郡西郷村大字内野々に所在する。

この地は、以前より縄文時代から古墳時代にかけての遺物の散布が知られていた。平成元年７月、県林業試験場の建設計画に伴い、県林業振興課長より県文化課に埋蔵文化財の有無の照会があった。同年８月、現地踏査を行った結果、建設予定地内に縄文時代及び弥生時代から古墳時代の遺跡の所在が確認され、建設により遺跡に影響が及ぶことが予想された。そこで、文化課と林業振興課、宮崎県土地開発公社による協議を行い、施工上現状保存が困難な部分について記録保存のため発掘調査を行うことになった。

調査は、宮崎県土地開発公社の依頼により、宮崎県教育委員会が主体となり、平成２年３月７日より同年８月７日までの間実施した。

第２節　調査の組織

内野々遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体　宮崎県教育委員会

教育長	児玉郁夫
文化課長	久徳菊雄（平成元年度）
	梨岡　孝（平成２年度）
課長補佐	片野坂次彦
埋蔵文化財係長	岩永哲夫
庶務係長	小倉　茂
調査担当	宍戸　章（平成元年度）
	東　憲章（平成２年度）

調査協力　河瀬正利（広島大学文学部助教授）

松谷暁子（東京大学総合研究資料館）　面高哲郎

菅付和樹　谷口武範　長友郁子（文化課埋蔵文化財係）

小野信彦（北方町教育委員会）　黒木　進　野田和美　杉尾肇子

杉尾愛恵　永峰まり子　金子悦子　藤崎順子　杉尾直子　稲元光恵

清水由紀子　芝元泰子

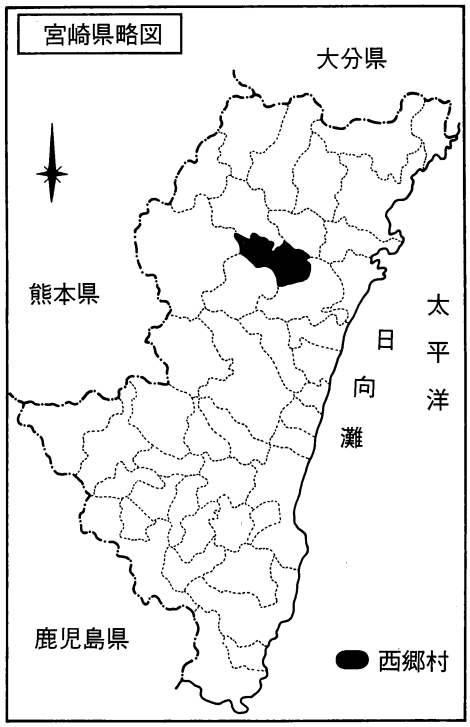
西郷村教育委員会　宮崎県土地開発公社

第３節　遺跡の環境

西郷村は宮崎県の北部、日向市から耳川沿いを遡る椎葉街道の中間点に位置し、周囲を珍神山、加子山、日陰山などの九州山地に属する標高700～900ｍの山々に囲まれている。山々の間を蛇行しながら東流する耳川と、その支流によって形成された河岸段丘と小規模な沖積地には、多くの遺跡の存在が知られている。

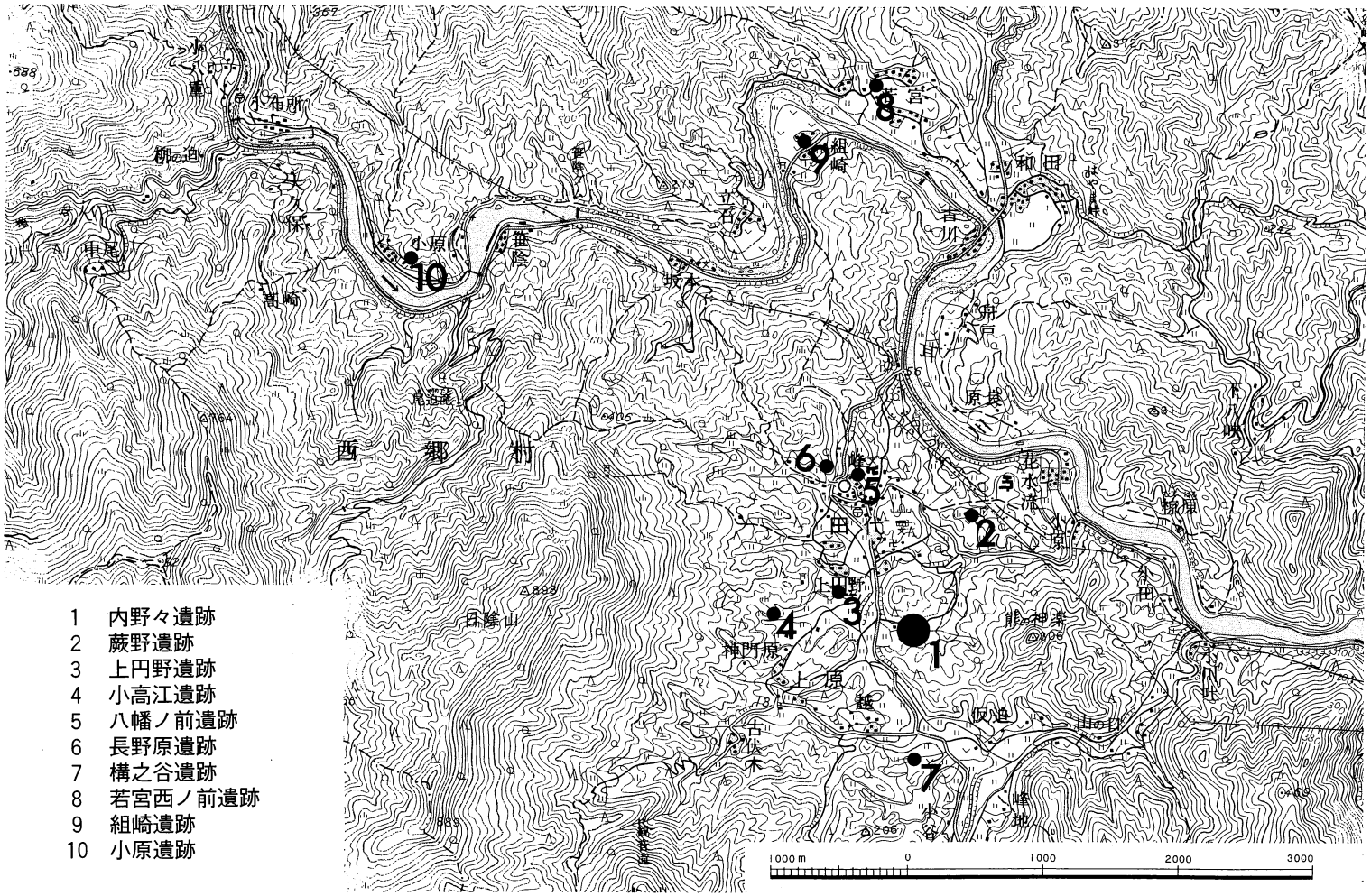
内野々遺跡は、耳川の支流である田代川の左岸、標高約116ｍの東向き緩斜面に位置する。遺跡と川との比高差は約15ｍである。遺跡周辺は、昭和30年代に栗園に造成されており、表土の移動にはかなりのものがあると思われるが、基本的地形は大きく変わらないものと考えられる。

西郷村内には30余りの遺跡が確認されている。内野々遺跡と田代川を挟んで向き合う丘陵上には、上円野遺跡と小高江遺跡が所在する。上円野遺跡からは、吉田式・塞ノ神式・轟Ａ式といった縄文時代早期の土器群や須恵器が、小高江遺跡では、須恵器が表採されている。内野々遺跡の北約１㎞の丘陵上には、蕨野遺跡が所在する。この遺跡は、内野々遺跡と同じ縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡で、繊維痕を有する押型文土器や格子目押型文土器、弥生時代後期の甕型土器や磨製石鏃など内野々遺跡に共通する遺物が見られる。そのほか縄文時代では、草創期の隆帯文土器・前期の曽畑式土器・後晩期浅鉢・尖頭器・石匙等が見られる長野原遺跡、押型文土器・塞ノ神式土器・轟Ｂ式土器が見られる八幡ノ前遺跡、後晩期の浅鉢や組織痕土器・孔列文土器が見られる組崎遺跡、早期の貝殻条痕土器・後期の鐘崎式土器が見られる小原遺跡が知られる。弥生時代では、組崎遺跡・西ノ八峡遺跡・峰ノ前遺跡から石包丁が出土している。このうち峰ノ前遺跡のものは、擦り切り技法による穿孔が見られ注目される。古墳時代では、通称「鳥の巣塚」と呼ばれる県指定の西郷古墳がある。この古墳は径10ｍの円墳で、発掘された箱式石棺には鉄剣、直刀、鉄鏃等が副葬されていた。現状では一基のみ見られるが、付近から箱式石棺が発見されており数基が群をなすものと思われる。そのほか村内各地で土師器・須恵器等も表採されている。歴史時代では、上月野城（今城）・鳥の巣城・上野原城といった中世の山城が知られているほか、板碑が各地に点在している。



《参考文献》

『西郷村の文化財』２　1986　西郷村教育委員会


1 内野々遺跡
2 蕨野遺跡
3 上円野遺跡
4 小高江遺跡
5 八幡ノ前遺跡
6 長野原遺跡
7 構之谷遺跡
8 若宮西ノ前遺跡
9 組崎遺跡
10 小原遺跡
西郷村
田代
和田
吉川
原長
上円野
上原
日隈山
1000m
0
1000
2000
3000

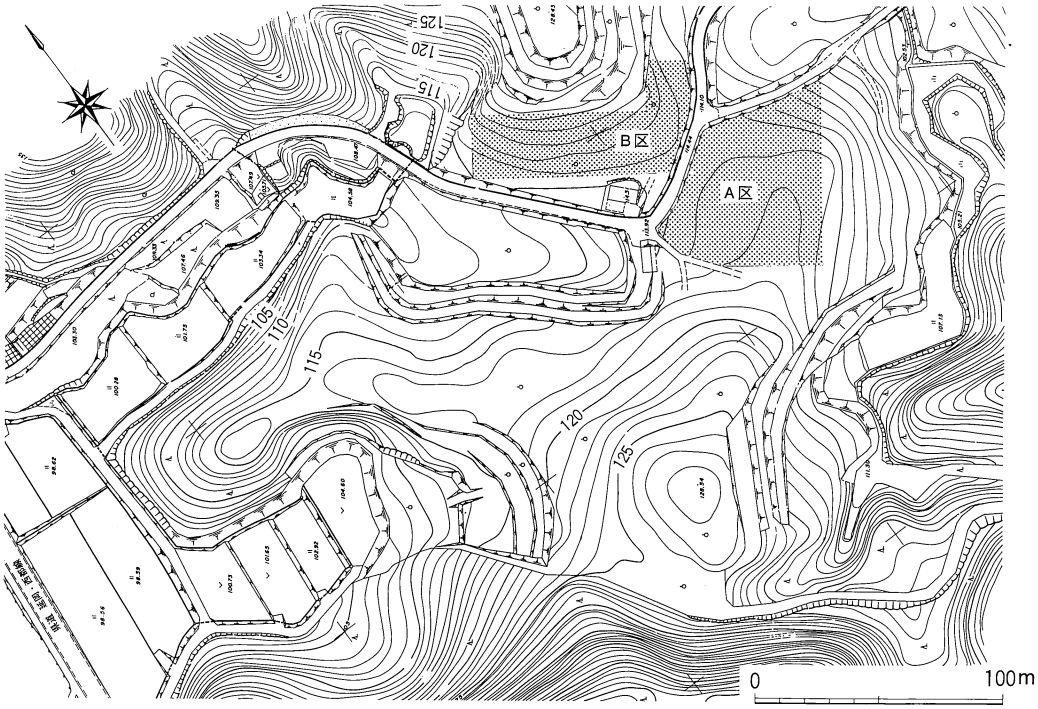
第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の経過

本調査は、事前の踏査で遺物の散布が見られたＡ区から開始した（第２図）。調査に先立ち、地形に沿って10ｍグリッドを設定し、アルファベットと整数で表示した。重機による表土の除去作業を行うと、比較的浅い部分から遺物の混入が見られたため極力浅く剝ぐに留めた。丘陵の尾根部付近は、表土下に灰白色粘土（地山）が現れ、調査範囲から除外した。表土の一部及び第Ⅱ層（包含層）を掘り進めると、当初の予想どおり縄文時代前期からの各時期の土器や弥生土器、石鏃や石錘等の石器が出土した。縄文前期の轟Ｃ・Ｄ式土器、中期の船元式土器、晩期の孔列文土器、石包丁、磨製石鏃等の出土は注目される。遺構の検出はアカホヤ上面で行い、アカホヤ層が見られず下層中の礫群が表出している部分については、並行して整査を行った。その結果、アカホヤ層上で弥生時代後期後半から終末期の竪穴住居址10軒、時期不明の土坑７基、僅かなピットを検出した。検出遺構の多くは、標高約115ｍ～116ｍの比較的平坦な部分に集中している。

アカホヤ層上の調査が終了した時点で、Ｂ区及びＣ区（Ａ区の南西側緩斜面・トレンチ調査）の表土剝ぎを行ったが、両区ともにアカホヤ層下まで攪乱を受けており遺構は確認されなかった。栗園造成の際に攪乱されたものと思われる。遺物は、Ｂ区で磨製石斧、石錘、磨石、櫛描波状文のある複合口縁壷などが見られたが、Ｃ区では僅かな土器小片が見られただけであった。



第２図　**周辺地形図（１／3,000）**

第３図　**遺構分布図（１／300）**

以後、調査はＡ区のみに絞り、アカホヤ層を除去し礫群の検出をおこなった。表土剝ぎの時点から一部表出していた礫群は、掘り下げと伴に範囲を広げ、1,000㎡以上にも及んだ。礫群内に集石遺構23基（うち１基はＡ・Ｂ区間道路法面で確認）を、礫を除去した下層に土坑７基を検出した。礫群内には押型文土器や貝殻文円筒形土器、チャートや黒耀石の石鏃・チップ等が散見された。

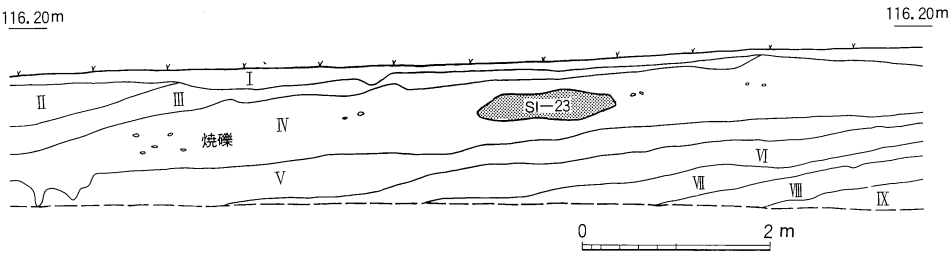
Ａ区表土中よりナイフ型石器１点が出土している（第42図１）。チャート製で、横長剝片の一側縁を加工し孤状の刃部に対し直線的な背部をなす。延岡市赤木遺跡第１文化層出土のナイフ型石器に類似するものが見られる。

礫群除去後、土層及び旧石器の確認のためトレンチを設定した。傾斜に沿って安定した土層堆積が見られたが、遺物の出土はなかった（第３図）。

第２節　層　序

内野々遺跡の基本層序は、Ａ・Ｂ区間道路法面で確認した（第４図）。

第Ⅱ層は、縄文時代前期から晩期、弥生時代後期から終末期の包含層であり、その厚みには位置的な偏りが見られたが、遺物の出土状況に明確なレベル差は認められない。第Ⅲ層のアカホヤ及び第Ⅶ層の姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）は、場所によって堆積が見られない部分もあり、傾斜地での堆積・二次的移動の様子を示している。第Ⅳ層で検出した礫群は、レベル幅約10㎝で層の中程に見られ、集石遺構はその同レベル及び下位で検出されている。



Ⅰ　表土

Ⅱ　黒褐色砂質土
　縄文前期～晩期・弥生後期～古墳時代初頭の包含層

ナイフ型石器
縄文土器（前期～晩期）
弥生土器
石器（縄文・弥生）

Ⅲ　アカホヤ火山灰
　遺構検出面　住居址10軒（弥生後期～古墳時代初頭）・土坑７基

Ⅳ　黒褐色土
　縄文早期の包含層　集石遺構23基・礫群・土坑７基

縄文土器（早期）
石器
剝片

Ⅴ　褐色シルト質土
　粘性が強い

Ⅵ　明褐色シルト質土

Ⅶ　姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）
　丘陵尾根部付近には堆積せず

Ⅷ　淡褐色粘土
Ⅸ　灰白色粘土

本来凝灰岩である阿蘇４火砕流の風化したものと思われる

第４図　**土層断面図（１／80）**

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、アカホヤ層下で集石遺構23基、土坑７基を検出した。時間的制約の中で、可能な限り実測を行ったが、ＳＩ10・11は平面図のみ、ＳＩ22は写真撮影のみ、ＳＩ23は断面観察のみを行った。

遺物は、第Ⅱ層（包含層）より前期から晩期に至る各時期の土器、第Ⅳ層礫群内から早期の土器が出土し、石器は、石鏃・石錘・磨石・石皿・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・スクレイパー・石核等がある。なお、石器については、遺構に伴うものが少なく時期を決定する要素に乏しいため、第３節の時期不明確な遺構と遺物の中でまとめてふれる。

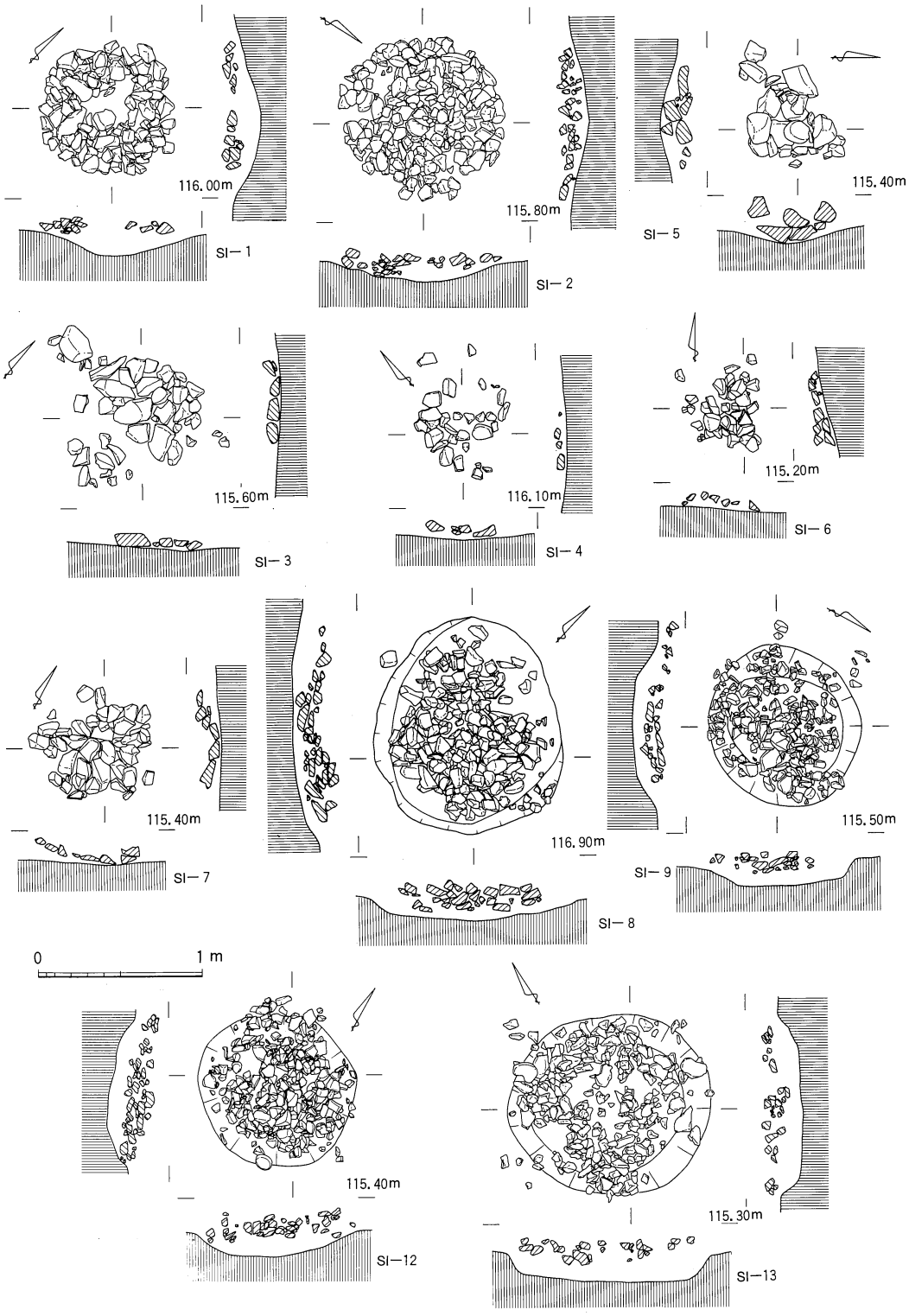
礫群及び集石遺構

表土剝ぎの時点から一部表出していた礫群は、第Ⅳ層を掘り下げるにしたがって範囲を広げ、1,000㎡以上に及んだ。礫は、砂岩（河原石）・頁岩・チャート等が見られ、そのほとんどが焼けて赤変し脆くひび割れるものも多かった。礫群内からは、押型文・貝殻文・無文の土器類や石鏃・磨石・スクレイパー・剝片等の石器が出土した。

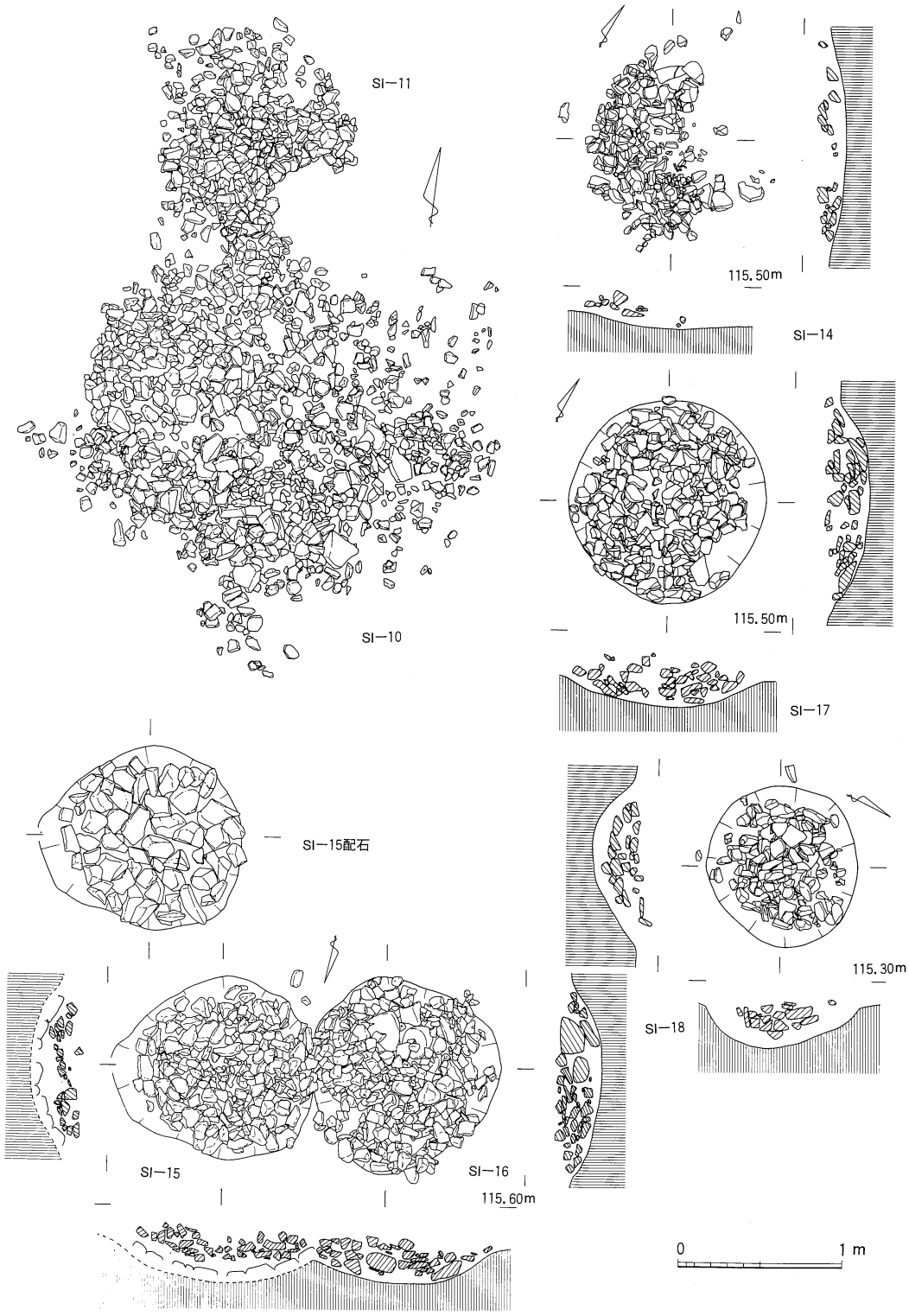
集石遺構は、礫群検出中に同レベルで検出されるものと、礫群を除去した後にその下層より検出されるものとが見られた。また、掘り込みと配石の有無で次のような形態的分類が可能である。掘り込み無し（Ⅰ類）、掘り込み有り（Ⅱ類）、配石無し（ａ類）、配石有り（ｂ類）、部分的に配石有り（ｃ類）。これらの組合せで、Ⅰａ類・Ⅱｂ類の様に分類した。

SI１～９・12・13（第５図）

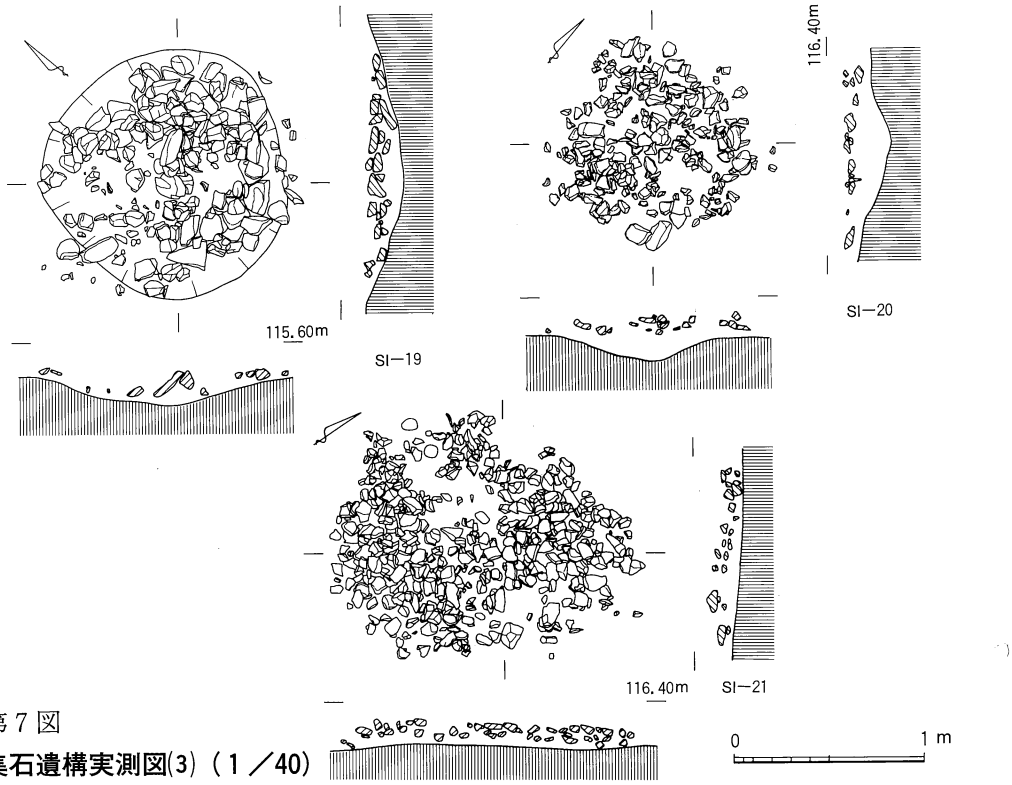
ＳＩ１は、河原石を用い径80㎝の正円形である。石は赤変し割れたものが多い。石間に炭化物が見られた。Ⅰａ類であるが、石を取り除くと皿状のくぼみとなった。ＳＩ２は、赤変したものが多い石に、タール状の黒色付着物が見られるものがあった。Ⅰａ類。ＳＩ３・４は、共にⅠａ類であるが、大きめの石が平らに並んでおり遺構の配石のみが崩されずに残った可能性もある。ＳＩ５は、殆どが大型の石でチャートの原石も見られた。Ⅰａ類。ＳＩ６は、Ⅰａ類で黒色付着物が見られた。ＳＩ７は、Ⅰａ類であるが、ＳＩ３・４と同じく大きめの河原石が面を揃えるように置かれており、それ自体配石である可能性が高い。中央部の石ほど赤変し脆くひび割れていた。ＳＩ８は、集石遺構の中で最も尾根に近い位置に検出された。掘り込みを持ち、その底付近には多くの炭化物が見られた。赤変し角ばった石が多い。配石はない。Ⅱａ類。ＳＩ９は、５㎝以下の小さく角ばった石が多く、皿状の掘り込みの底付近には炭化物が多く見られた。Ⅱａ類。ＳＩ12は、掘り込みを持ち、その底付近では特に炭化物が多く土と混じり漆黒色となっていた。角ばった石が多く、黒色付着物も見られた。石間に貝殻腹縁刺突文を施す土器片が一点見られた。Ⅱａ類。ＳＩ13は、皿状の掘り込みをもつが石の密度は低く配石も見られない。石はかなり



第５図　**集石遺構実測図(1)（１／40）**



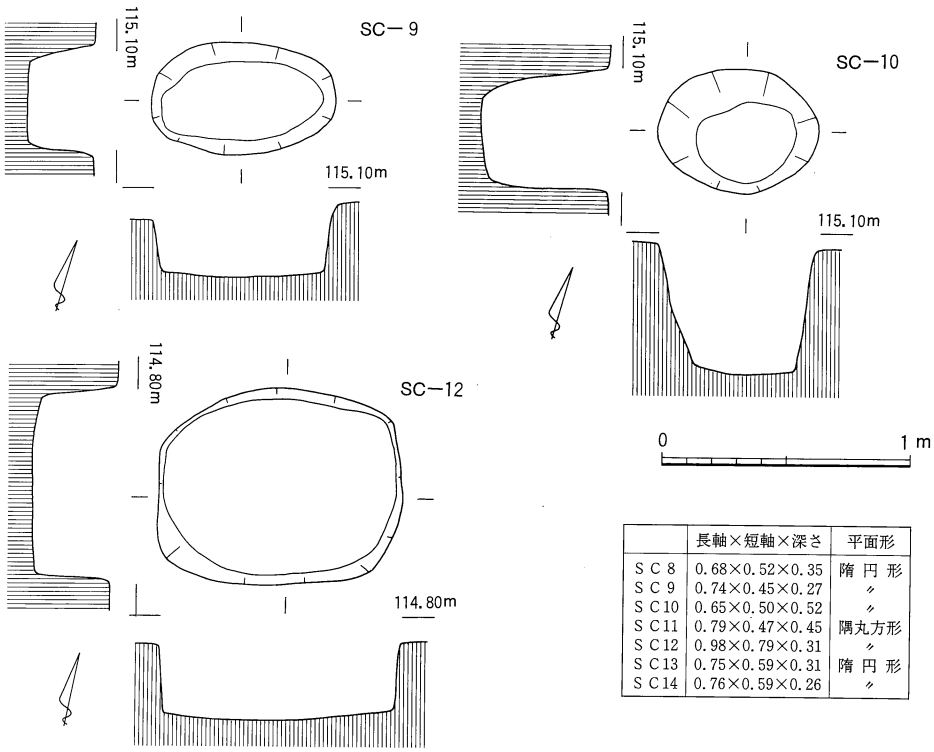
第６図　**集石遺構実測図(2)（１／40）**



第７図
集石遺構実測図(3)（１／40）

内野々遺跡集石遺構一覧表

遺構番号	検出地点	規模（cm）		礫の大きさ（cm）	掘込	掘込の規模（cm）			配石	配石の大きさ（cm）	分類	備考
		長径	短径			長径	短径	深さ				
ＳＩ－１	d－5	83	81	5～20	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	炭化物多
2	d－5	100	99	3～15	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	黒色付着物
3	c－5	94	80	5～25	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	配石か？
4	e－5	66	61	5～15	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	〃
5	c－6	62	60	10～25	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	
6	d－6	60	47	5～10	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	黒色付着物
7	c－6	76	68	10～20	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	配石か？
8	e－4	118	100	5～15	○	132	115	14	×	－	Ⅱa	炭化物多
9	b－5	105	86	3～15	○	101	90	15	×	－	Ⅱa	〃
10	c－4	260	233	5～20	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	〃
11	b－4	130	120	5～15	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	〃
12	b－5	100	93	3～10	○	96	91	16	×	－	Ⅱa	炭化物多・貝殻文土器
13	b－4	123	110	5～15	○	123	109	17	×	－	Ⅱa	炭化物多
14	d－5	124	110	3～15	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	黒色付着物
15	c－5	110	102	3～20	○	125	110	20	○	10～20	Ⅱb	〃
16	c－5	120	110	3～20	○	120	115	18	○	10～20	Ⅱc	〃
17	c－5	120	110	5～20	○	123	120	20	○	10～20	Ⅱb	黒色付着物・炭化物多
18	c－4	80	80	5～15	○	98	93	26	○	10～15	Ⅱb	〃
19	d－5	130	127	5～20	○	131	128	18	○	10～20	Ⅱc	〃
20	d－4	112	105	3～15	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	〃
21	d－4	166	128	5～10	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	炭化物多
22	d－4	200	190	5～15	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	写真のみ
23	Ｂ区	147	－	5～15	×	－	－	－	×	－	Ⅰa	断面観察のみ



	長軸×短軸×深さ	平面形
ＳＣ８	0.68×0.52×0.35	隋円形
ＳＣ９	0.74×0.45×0.27	〃
ＳＣ10	0.65×0.50×0.52	〃
ＳＣ11	0.79×0.47×0.45	隅丸方形
ＳＣ12	0.98×0.79×0.31	〃
ＳＣ13	0.75×0.59×0.31	隋円形
ＳＣ14	0.76×0.59×0.26	〃

第８図　**土坑実測図(1)（１／30）**

赤変しており、炭化物のまとまりも見られた。Ⅱａ類。ＳＩ１～９・12・13は、礫群と同レベルで検出された。

SI10・11・14～18（第６図）

ＳＩ10・11は、つながるように隣接して検出された。ＳＩ10は、長径260㎝・短径233㎝で最も規模が大きい。石は平面的に広がっているが、赤変したものが多く炭化物や黒色付着物も見られた。石間に、貝殻文土器や石鏃が見られた。石を除去すると浅いくぼみ状になったが、明確な掘り込みとは言いがたくⅠａ類と思われる。ＳＩ11は、10㎝前後の大きさのほぼそろった河原石を用いている。赤変した石は見られるが、割れたものは少ない。掘り込み・配石はない。Ⅰａ類。ＳＩ14は、割れて角ばった石が多く黒色付着物も見られる。Ⅰａ類。ＳＩ10・11・14は礫群と同レベルで検出している。ＳＩ15・16は、つながるように隣接して検出された。ＳＩ15は石の密度が高く、10～20㎝大の石の間に５㎝以下のものが入り込んでいる。掘り込みを持ち、比較的大きめの石で整然とした配石を持つ。（遺構は、配石を検出した状態で切り取り発砲ウレタンで梱包し埋蔵文化財センターに持ち帰った。）Ⅱｂ類。ＳＩ16は、掘り込みを持ちＳＩ15とほぼ同様なあり方を見せたが、中にひときわ大きな石（砂岩・チャート原石）を配していた。また、配石は中央部には無く遺構を囲むような形で円状に見られた。Ⅱｃ類。ＳＩ17は、皿状の掘り込みを持

ち配石も有する。石間には炭化物が多く、黒色付着物も見られた。Ⅱｂ類。ＳＩ18は、径80cmでやや小さめの遺構であるが、すり鉢状の掘り込みを持ち配石も見られる。Ⅱｂ類。ＳＩ15～18は、礫群を除去した下層から検出された。

SI19～21（第７図）

ＳＩ19は、礫群を除去した下層から検出された。比較的大きめの河原石を用いており、赤変したものや黒色付着物のついた石が多い。炭化物も多く見られた。浅いⅢ状の掘り込みには、「コ」字形の配石も見られた。Ⅱｃ類。ＳＩ20は、小さめの石が多く密度は低い。炭化物は多く見られた。平面的に広がる石を除去するとくぼみが見られたが、明確な掘り込みとは言いがたく配石も見られなかった。Ⅰａ類。ＳＩ21は、小さめの石が平面的に広がる。赤変は見られるが黒色付着物は見られない。掘り込み・配石はない。ＳＩ20・21は礫群と同レベルで検出された。

ＳＩ22は、礫群と同レベルで検出された。栗の木根により多少崩されているが、ＳＩ10同様２ｍ前後の大きな規模を持つ。赤変した石が平面的に広がる。Ⅰａ類。ＳＩ23は、土層確認のためＡ・Ｂ区間の道路法面を削った際に検出された（第４図）。断面観察のみのため詳細は不明であるが、掘り込みを持ち配石を持たないⅡａ類である。

土坑（第８図）

礫群を除去した第Ⅳ層最下部で７基の土坑を検出した。楕円形又は隅丸方形で、遺物を持たず埋土は明褐色粒（ＡＴ）を若干含む黒褐色土の単純層であった。性格は不明である。

土器（第９～19図）

第Ⅳ層から早期、第Ⅱ層から前期～晩期と各時期の土器が出土している。それらは全て小片での出土であり、また、出土レベルに大きな差違は認められなかったが、文様、形態などから分類が可能である。各時期、各類の特徴的なものを図化した。なお、個別の出土地、観察所見については観察表を作成した。参照されたい。

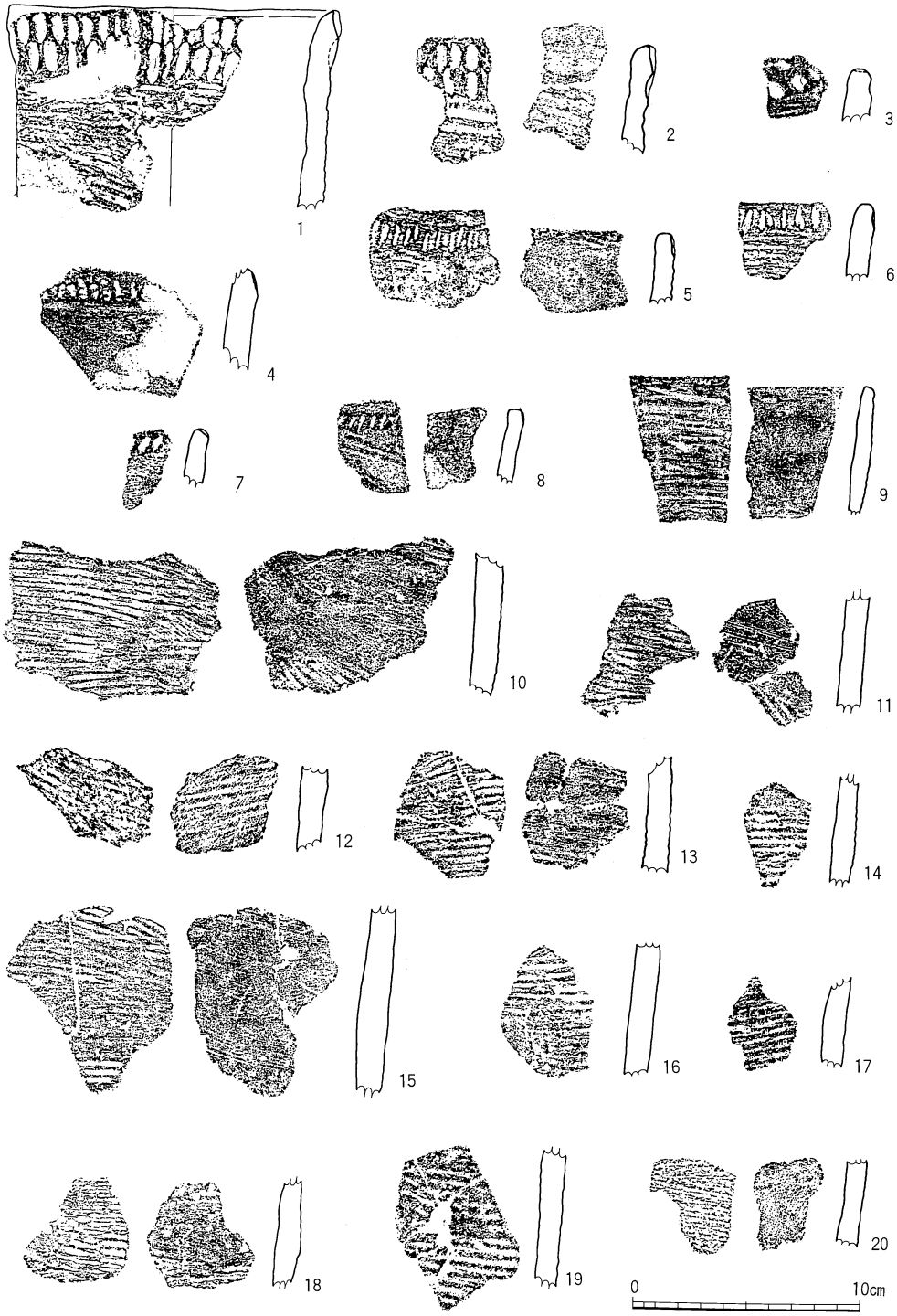
早期の土器

Ⅰ類（１～29）

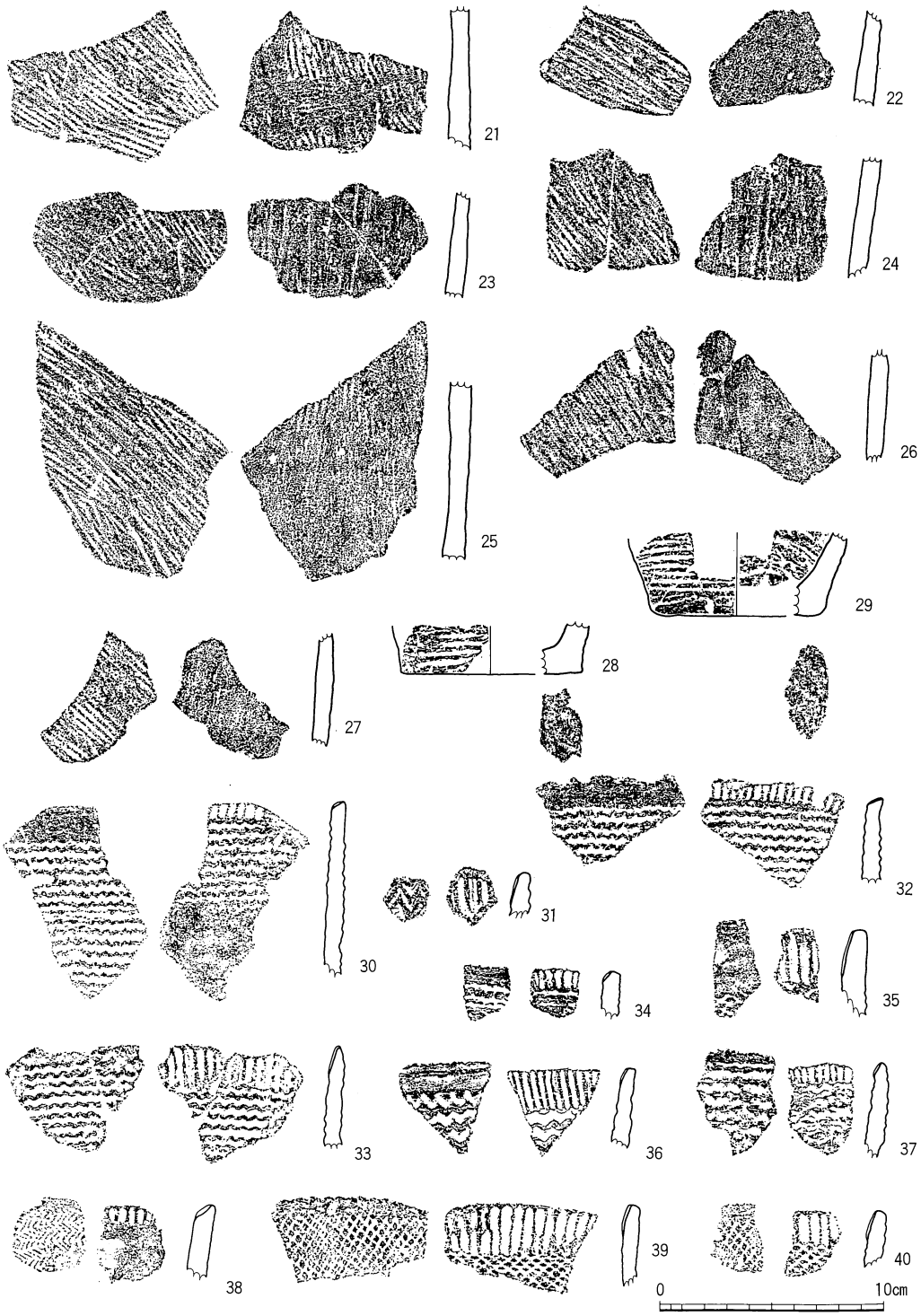
バケツ状の円筒形をなし、貝殻腹縁による条痕文を横あるいは斜め方向に施すものである。口縁部には一段あるいは二段の連続押圧文を施す。いわゆる「前平式土器」と思われる。内器面はナデまたは削りで、条痕文を残すものもある。

Ⅱ類（30～96）

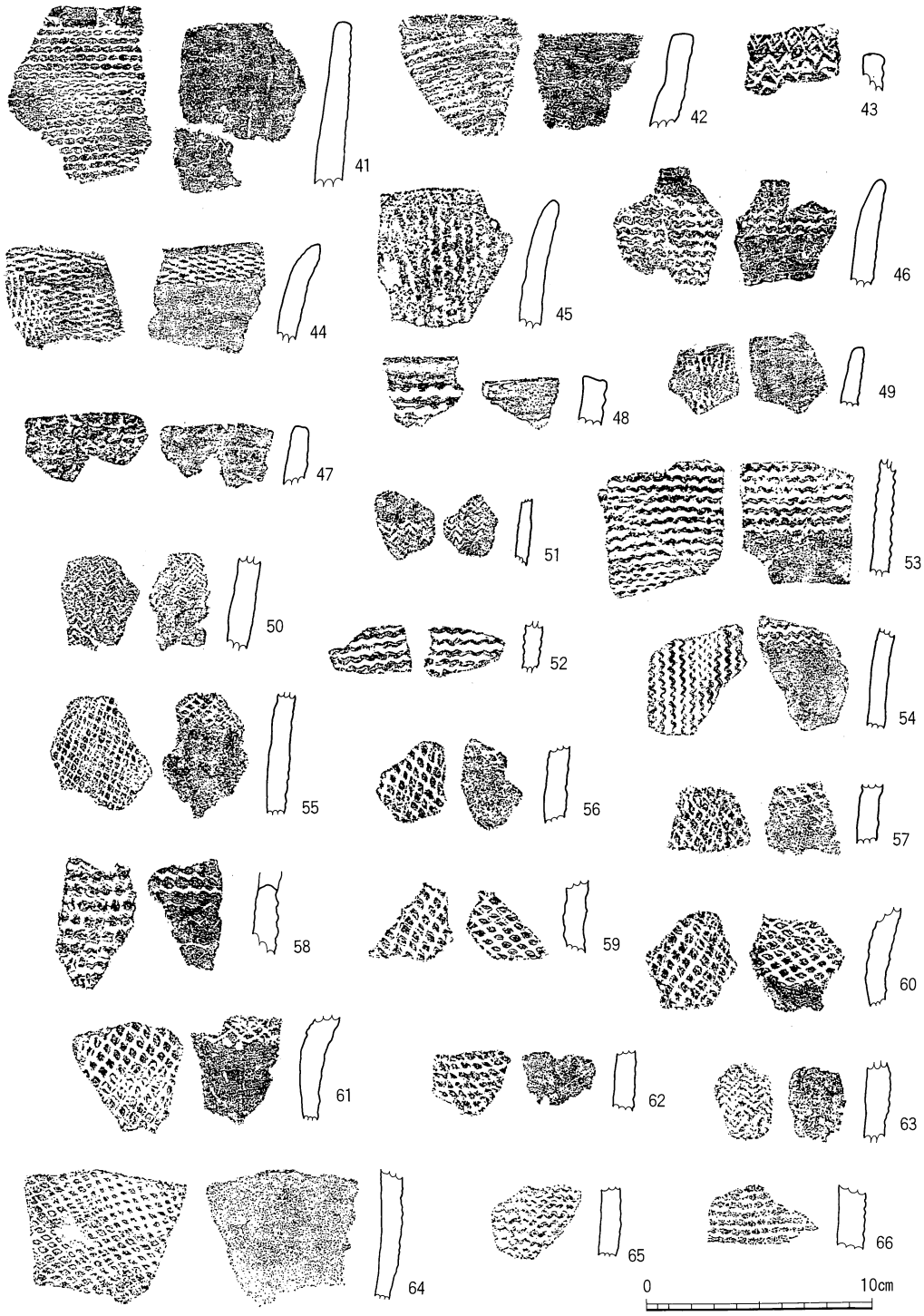
押型文を施すものである。山形、楕円、格子目が見られる。口縁部内面は原体条痕を施し、その下に押型文を持つもの（30～40）、ナデ調整だけのもの（41～43・47～49）、押型文だけのもの（44～46）が見られる。また、口唇部に押型文をもつもの（43）もある。一般に押型文土器は施文方向が横位から縦位へ、文様が細かいものから粗大なものへ変化し、口縁部は直立に近いものから外反するものへ変化するが、やや外反する口縁部に横位、縦位の押型文が混在するものが見



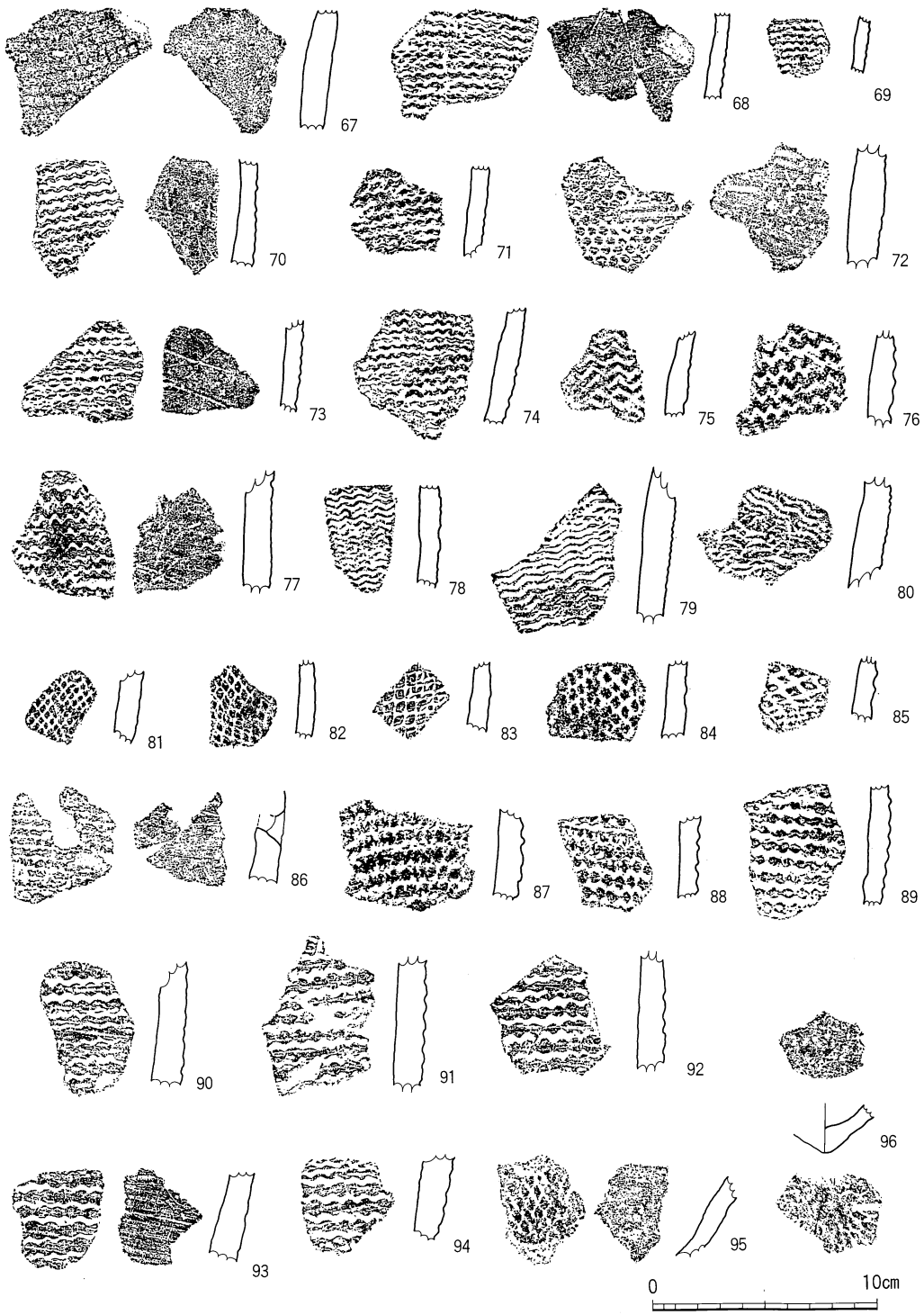
第９図　**縄文土器実測図(1)（１／３）**



第10図　**縄文土器実測図(2)（1／3）**



第11図　**縄文土器実測図(3)（1／3）**



第12図　**縄文土器実測図(4)（1／3）**

られた（44）。格子目押型文は１点のみ見られた（67）。底部は尖底である（95・96）。また、この類の土器には繊維痕を有するものが多く見られ注目される。

Ⅲ類（97～102）

無文土器で、押型文土器に共伴するものである。穿孔が見られるものもある（97）。底部は尖底になると思われる（100・101）。102は一部に沈線と爪による刻みが見られるがとりあえずこの類に入れておく。Ⅱ類同様繊維痕を有するものが見られた。

Ⅳ類（103～134）

貝殻文系の土器群である。器形は円筒形をなす。いわゆる「吉田式土器」の影響を持つ押し引き文を持つもの（103～105・109～112・114）が見られる。また、ロッキングの見られるもの（115～117）や、貝殻腹縁刺突により綾杉文を施すもの（118～127）、貝殻腹縁刺突文とヘラ状工具による綾杉文を施すもの（128～130）も見られ、これらはいわゆる「下剝峰式土器」と思われる。

前期の土器

Ⅴ類（135～188）

地文にクシ状工具または貝殻状の工具による縦位の細線文を持ち、その上に２本単位の沈線を横位あるいは波状に施すもので、いわゆる「轟Ｃ・Ｄ式土器」と呼ばれるものである。直口あるいはやや外反する口縁部には、その内面にも沈線を施すものもある。口唇部に刻みあるいは刺突文を持つ（135～146）。また、口縁部内側や胴部に刺突文を持つものも見られる（144～146・157～160）。底部は丸底になる（187・188）。

中期の土器

Ⅵ類（189～197）

地文に縄文を持ち、刻目突帯を貼り付けるもので、器形は口縁部が内湾するキャリパー状をなす。口縁部内面にも縄文が施される。「船元Ⅱ式土器」にあたると思われる。口唇部に刺突を施すもの（189）、若干肥厚した口唇部に爪形状の刻みを施すもの（192～195）が見られる。

後・晩期の土器

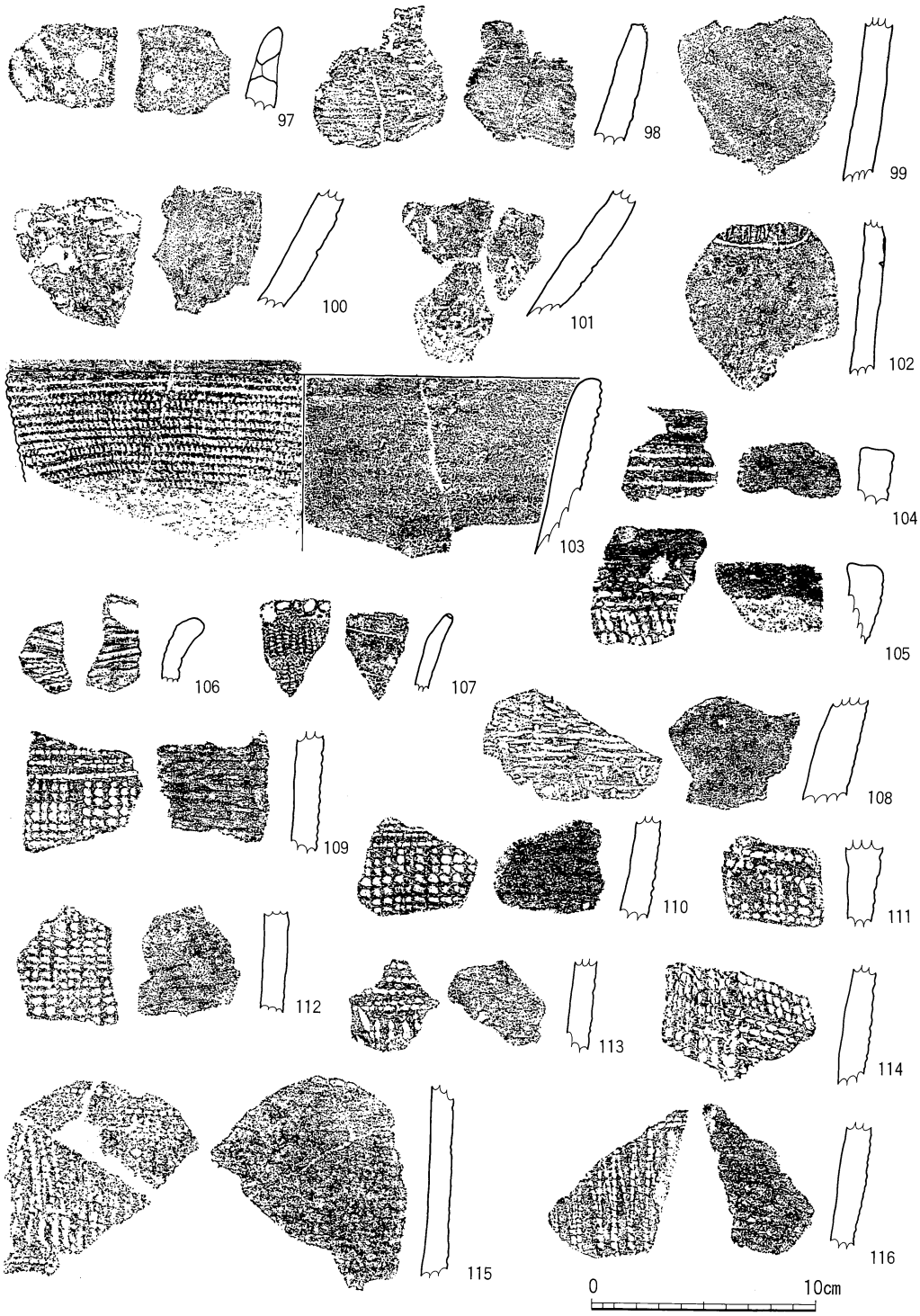
後期・晩期の土器については、一部の特徴的なものを除いては明確な時期区分が困難であり、形式についても確立されているとは言いがたい。ここでは後・晩期としてまとめて取り扱う。

Ⅶ類（198）

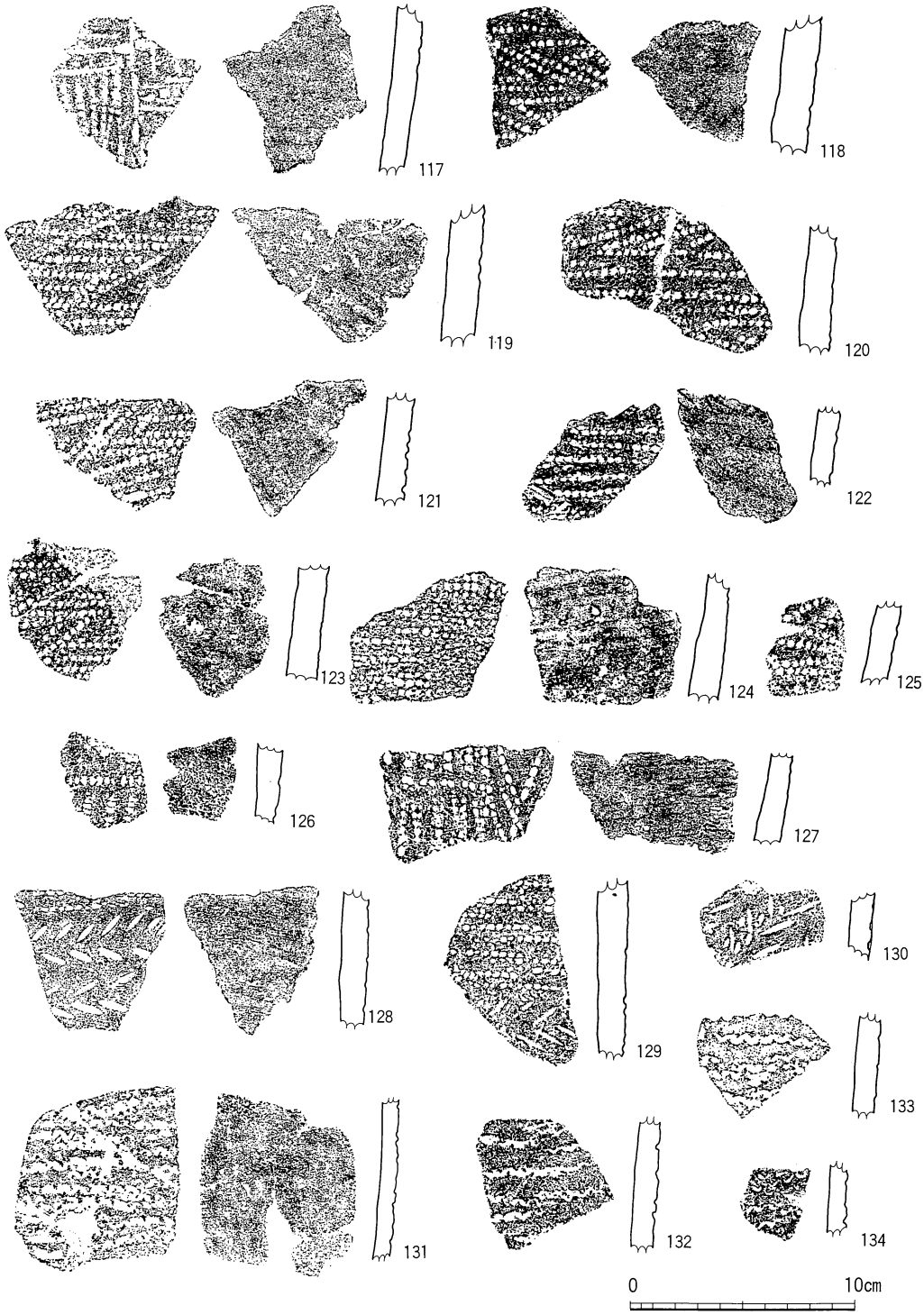
一点のみの出土であるが、屈曲した頸部に連続刺突文が見られ、その下に３本の横沈線が走り線間には磨消縄文が地文として施されている。いわゆる「西平式土器」と思われ、器形は球形の胴部と明瞭に屈曲した頸部、口縁部は幅広の波状口縁が多く見られる。

Ⅷ類（199～201）

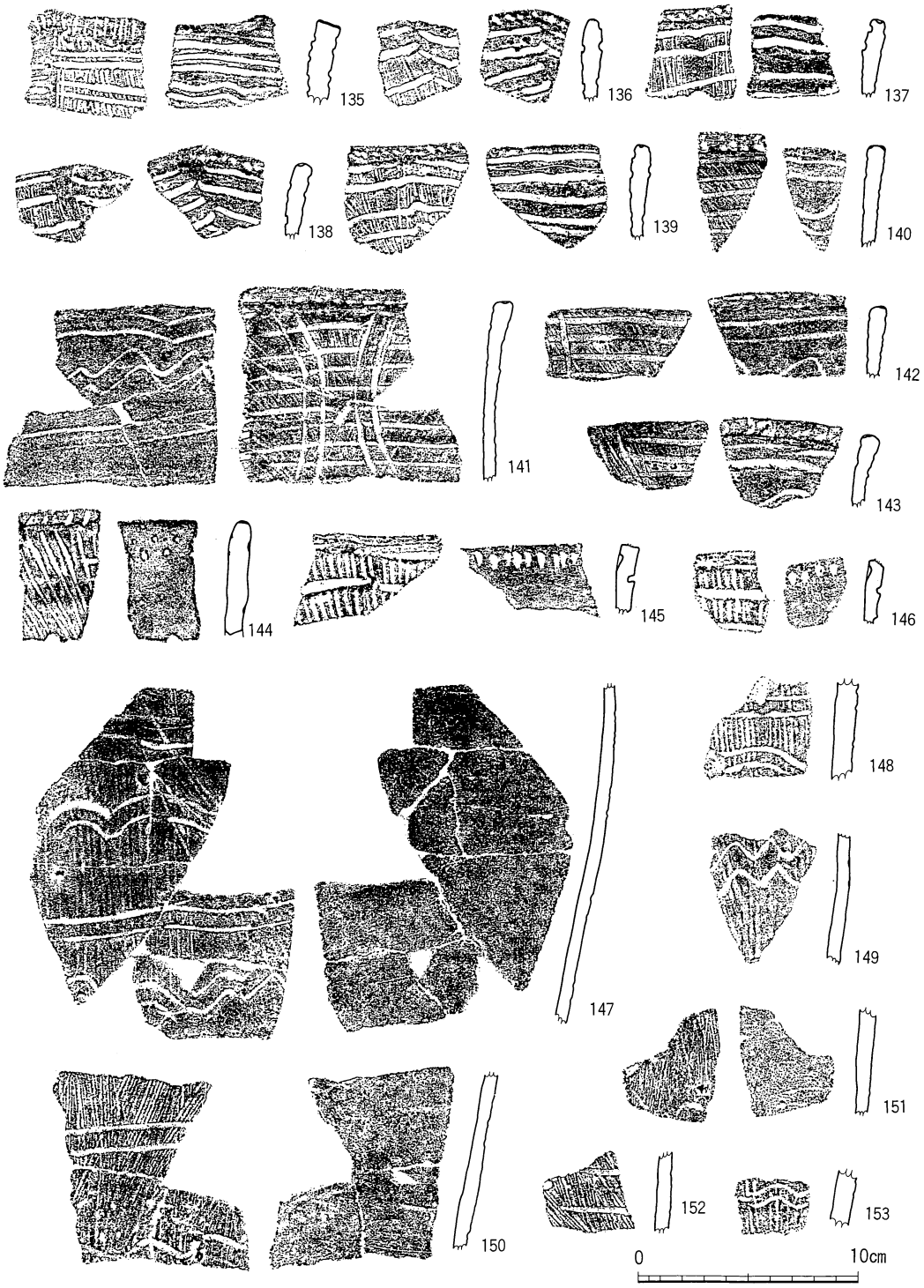
口縁部内面の横沈線以外は無文で、外傾する素口縁はナデ調整である。いわゆる「三万田式土器」と思われる。



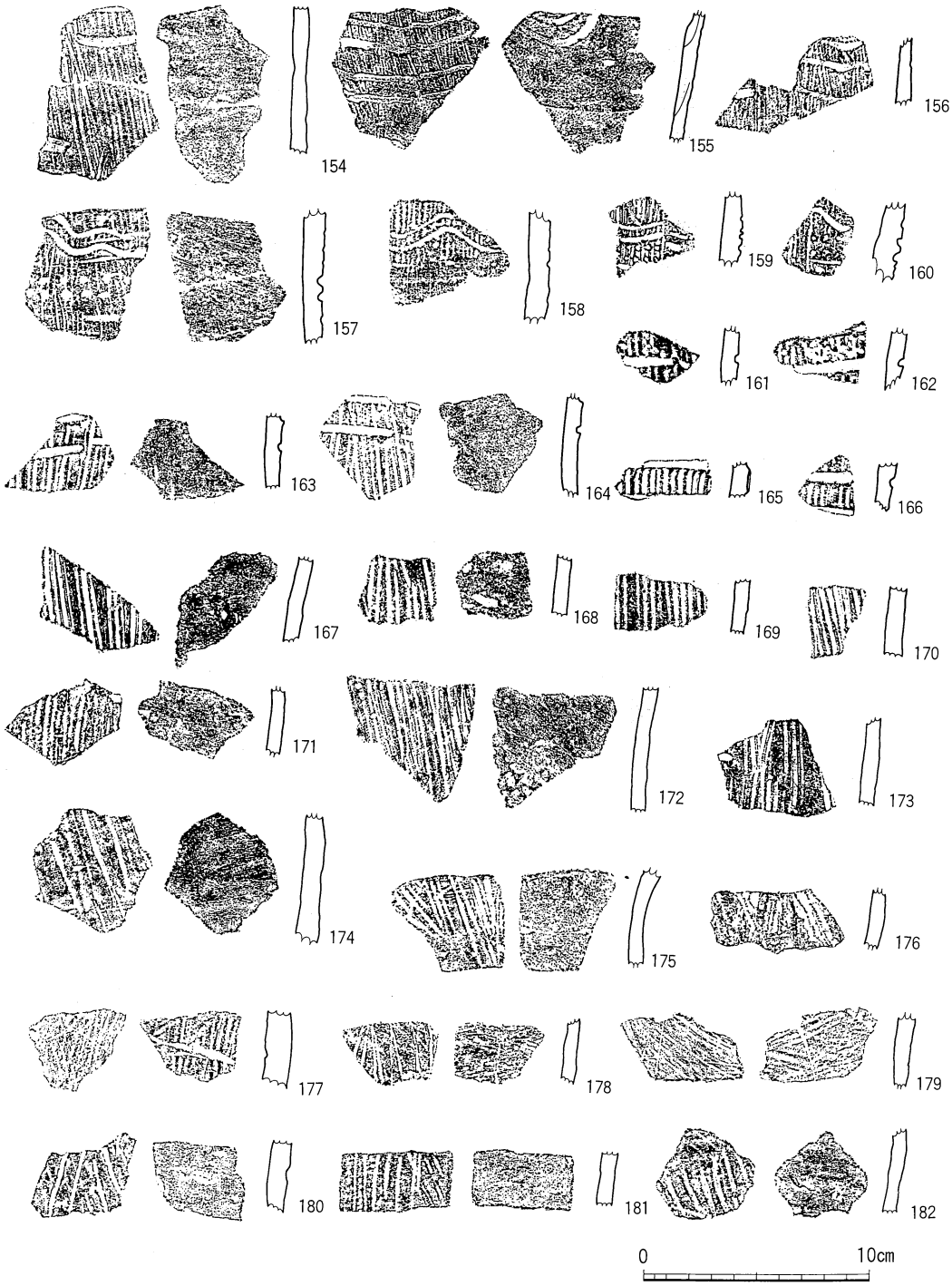
第13図　**縄文土器実測図(5)（1／3）**



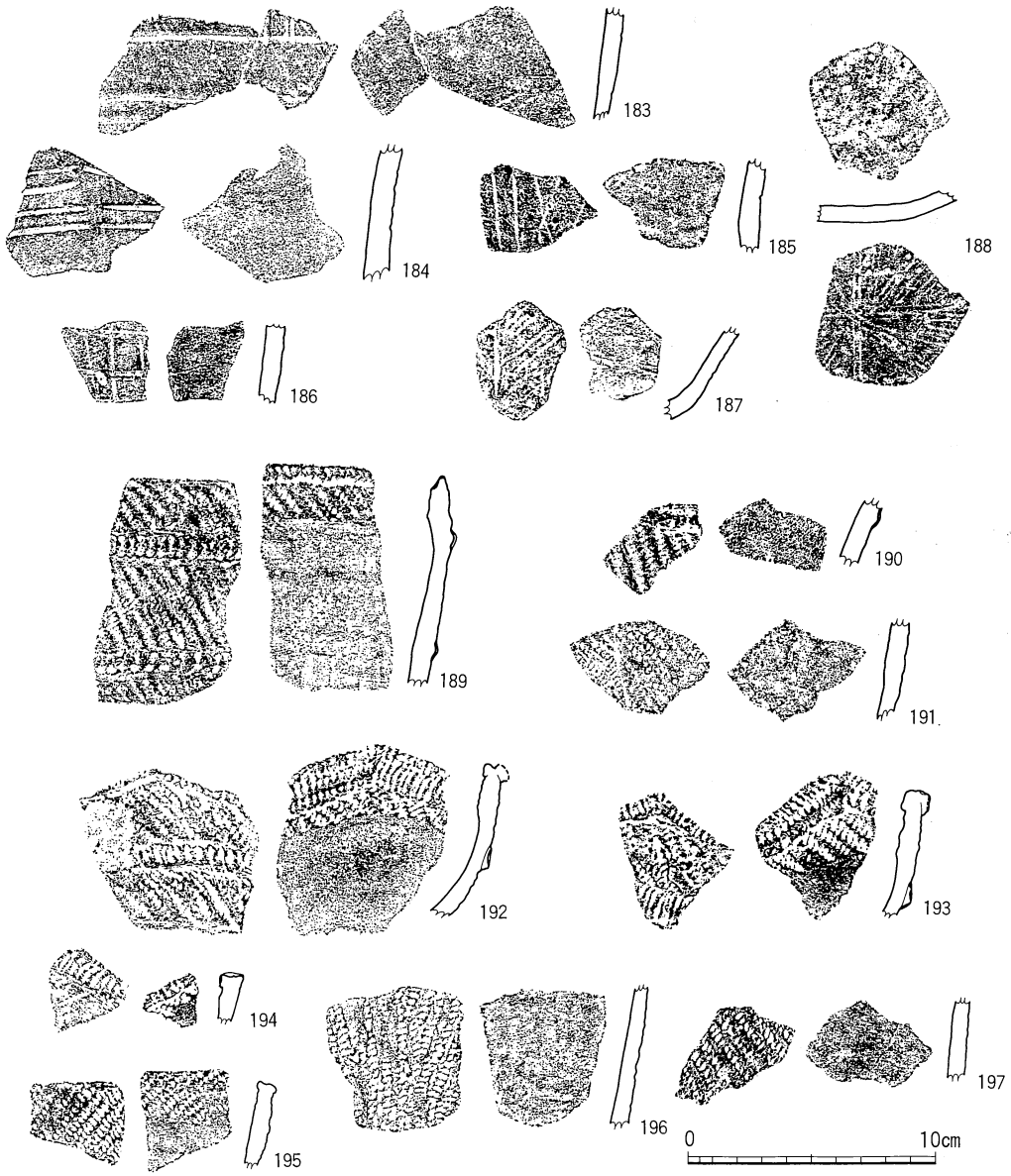
第14図　**縄文土器実測図(6)（1／3）**



第15図　**縄文土器実測図(7)（1／3）**



第16図　**縄文土器実測図(8)（1／3）**



第17図　**縄文土器実測図(9)（1／3）**

Ⅸ類（202～218）

粗製深鉢形土器の中で口縁部を一括した。形態・手法によって細分した。

a 類　口唇部に棒状工具による押圧刻みがあるもの（202）。

b 類　素口縁で無文のもの（203・204）。

c 類　貝殻条痕と沈線が施されるもの（205）。

d類　口縁外部を肥厚させた口縁帯を持つもの（206～209）。

e類　突帯を持つもの（210～218）。刻目をもつものは見られず、刻目突帯出現の前段階であろうと思われる。この中には突帯下に孔列文が見られるもの（212～214）もあり、さらに分類も可能である。

Ⅹ類（219～221）

組織痕を有するもので、型造り成形されたものである。外器面に縦あるいは横方向に連なる組織痕が認められ、内器面は丁寧なナデ調整である。

ⅩⅠ類（222～226・230）

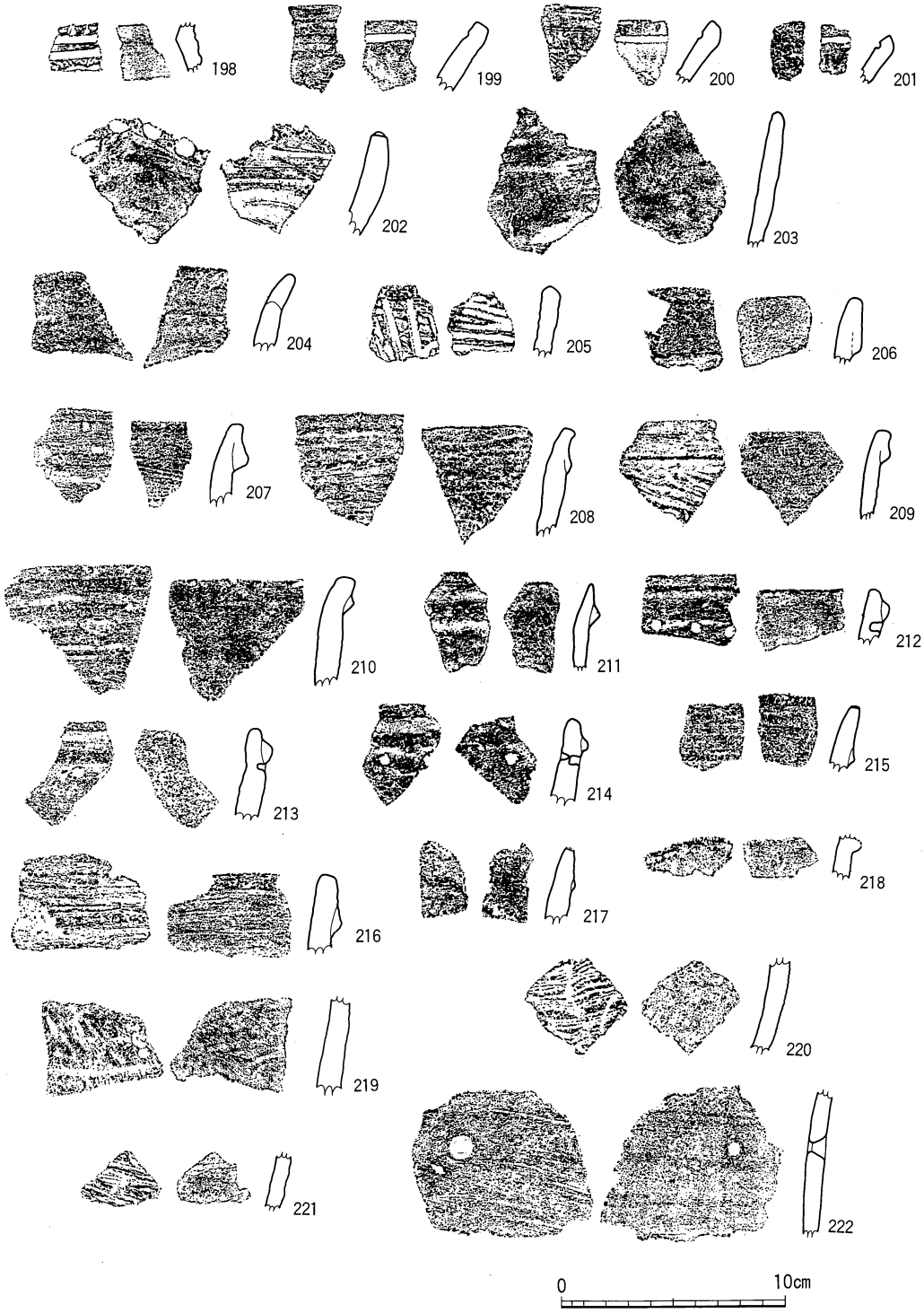
口縁部以外の粗製土器を一括した。222には外面からの穿孔がみられる。

ⅩⅡ類（231・232）

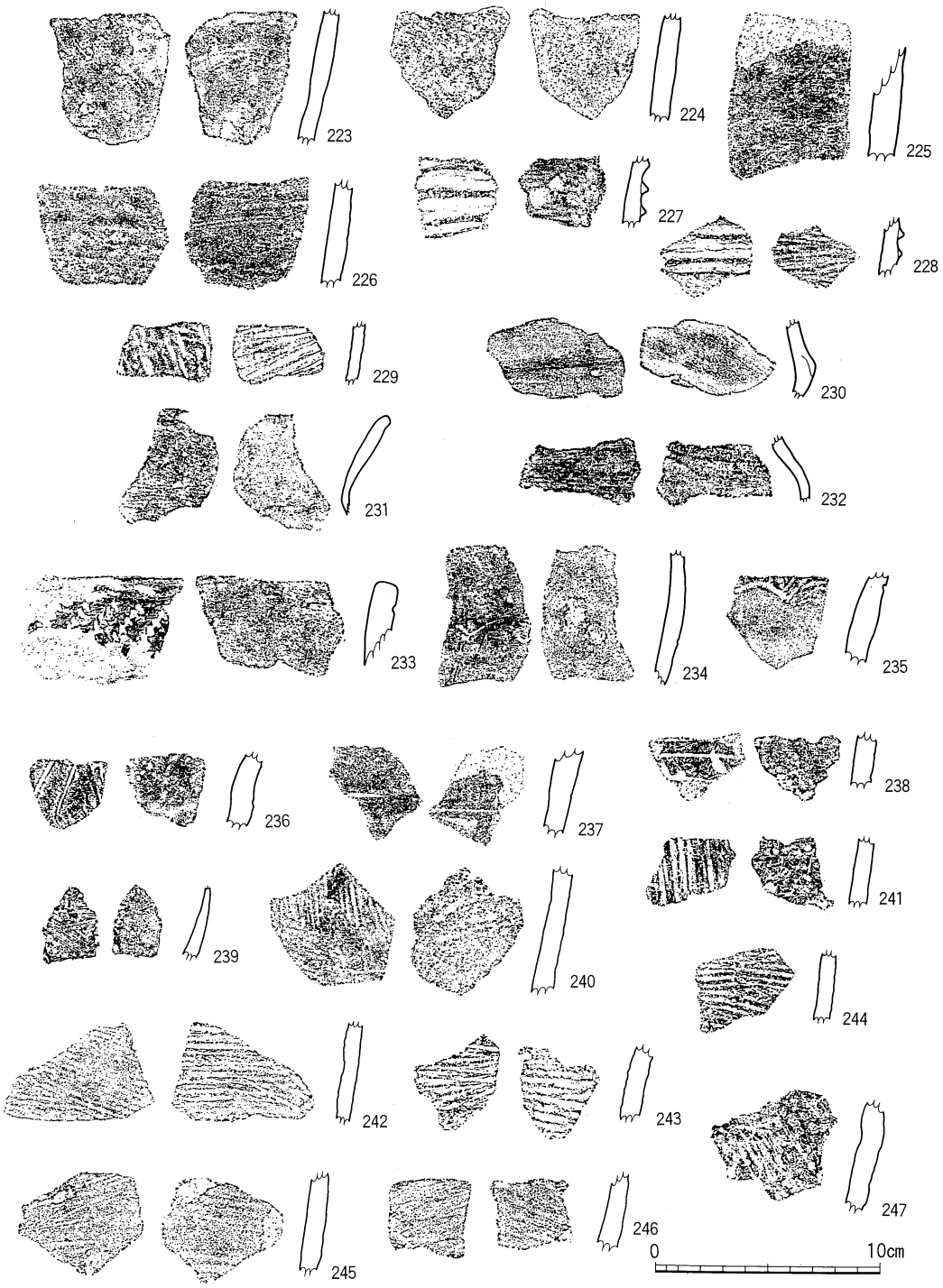
精製磨研土器である。いずれも浅鉢形と思われる。器壁を薄く仕上げている。

時期不明の土器

これまでに分類したもの以外に時期の判別が困難なものが数点見られた。227・228は2条あるいは3条の突帯を持つ。器面は粗いナデ調整である。233は比較的厚手の口縁部外面に巻き貝による押圧文がみられる。器面はナデ調整で、胎土に黒く光る長方形の粒を多く含む。234・235はミガキ、ナデ調整の器面に波状の沈線文が施される。236は放射状の沈線が見られる。239は薄手の作りでハケ目調整、ススが厚く付着する。240～247は比較的薄手の作りで貝殻条痕が施される。



第18図　**縄文土器実測図(10)（1／3）**



第19図　**縄文土器実測図(11)（1／3）**

縄文土器観察表(1)

図番号	出土地区	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
1	b－3 b－4	連続押圧文，貝殻条痕文（横）	横ナデ，貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙 浅黄橙	0.5㎜の黒色で光る砂粒 3～5㎜の小礫	
2	b－4 e－5	連続押圧文，貝殻条痕文（横）	横ナデ，貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい橙	0.5～2㎜の砂粒	
3	b－4	押圧文，連続刺突文，貝殻条痕文（横）	貝殻条痕文	灰褐 灰白	橙	0.5～3㎜の砂粒多	
4	e－6	貝殻腹縁刺突文，貝殻条痕文（横）	横ナデ	明赤褐	明赤褐	0.5～4㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
5	c－4	横ナデ，貝殻条痕文（横），貝殻腹縁刺突文，スス付着	ナデ	灰褐	にぶい橙	1㎜の黒色で光る砂粒 2～7㎜の砂粒	
6	a－4	横ナデ，刺突文（縦），貝殻条痕文（横）	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2㎜の黒色で光る砂粒 3～4㎜の砂粒	
7	b－5	ナデ，連続刺突文，横ナデ	貝殻条痕のあとナデ	暗赤褐	黒褐	0.2～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
8	d－5	横ナデ，連続刺突文，貝殻条痕文（斜）	横ナデ	にぶい褐	明褐	0.2～1㎜の砂粒	
9	b－3	ナデ，貝殻条痕文（横）	ナデ	赤	明黄褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
10	b－4	貝殻条痕文（横，斜）	貝殻条痕文のあとナデ	橙	橙	1㎜の黒色で光る砂粒，2～6㎜の砂粒	繊維痕
11		貝殻条痕文（横）	貝殻条痕文のあとナデ	橙	橙	1～5㎜の砂粒	
12	b－4	貝殻条痕文（横）	貝殻条痕文	明赤褐	明褐	1～6㎜の砂粒	
13		貝殻条痕文（横）	貝殻条痕文	橙	橙	1㎜以下の黒色で光る砂粒 2～5㎜の砂粒	
14	b－4	貝殻条痕文（横）	横ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	0.3～1㎜の砂粒	
15	b－4 b－5	貝殻条痕文（横）	貝殻条痕文のあとナデ	橙	橙	1㎜の黒色で光る砂粒 2～6㎜の砂粒	繊維痕
16	b－4	貝殻条痕文（横）	貝殻条痕文のあとナデ，炭化物付着	橙	暗明褐	0.5～2㎜の砂粒	繊維痕
17	a－3	貝殻条痕文（横）	ナデ	明赤褐	暗赤褐	0.5～3㎜の砂粒	繊維痕
18	b－3 d－3	貝殻条痕文（横）	貝殻条痕文のあとナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐 灰褐	2㎜の砂粒	
19	a－4	貝殻条痕文（斜）	ナデ	橙	にぶい橙	0.3～1.5㎜の砂粒	
20	b－4	貝殻条痕文（横）	ナデ	橙	にぶい赤褐	0.3～1.5㎜の砂粒	
21	c－5	貝殻条痕文（斜）スス付着	貝殻条痕文のあとナデ	にぶい黄橙	橙	0.5～4㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
22	b－3	貝殻条痕文（斜）	ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	0.3～1.5㎜の砂粒	
23	b－3	貝殻条痕文（斜）	条痕文のあとナデ	にぶい橙	にぶい橙	0.3～1㎜の砂粒	
24	b－3	貝殻条痕文（斜）	条痕文のあとナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	0.2～1㎜の砂粒	
25	b－3	貝殻条痕文（斜）スス付着		明黄褐 橙	にぶい赤褐	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
26	b－3	貝殻条痕文（斜）	貝殻条痕文のあとナデ	にぶい橙	黒褐	1㎜以下の砂粒	
27	b－3	貝殻条痕文（斜）	ナデ	にぶい橙	黒褐	2㎜以下の砂粒	
28	b－3	貝殻条痕文（横）ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい橙	1.5㎜以下の砂粒	
29	b－5	貝殻条痕文（横）ナデ	貝殻条痕文	明赤褐	褐	1㎜以下の砂粒	
30	d－6	刻み，ナデ，山形押型文	山形押型文，ナデ	にぶい赤褐 明赤褐	黄褐	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
31	SA6	ナデ，山形押型文	原体条痕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1～2㎜の砂粒	
32	c－5	刻み，ナデ，山形押型文	山形押型文	にぶい赤褐	橙	0.5～4㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
33	d－3 d－4	ナデ，山形押型文	原体条痕，山形押型文	橙	橙	0.3～1㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
34	b－3	ナデ，楕円押型文	原体条痕，楕円押型文	にぶい赤褐	橙	0.5～4㎜の砂粒	
35		ナデ，楕円押型文	原体条痕，楕円押型文	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の砂粒	
36		横ナデ，山形押型文	原体条痕，山形押型文	にぶい赤褐	明赤褐	1㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
37	a－4	楕円押型文	原体条痕，楕円押型文	灰赤	暗赤褐	0.5～5㎜の砂粒多	
38	b－5	山形押型文	原体条痕，ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	1㎜以下の砂粒	
39	a－4	楕円押型文	原体条痕，楕円押型文	にぶい橙	黒褐	0.5～2.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
40		ナデ，楕円押型文	原体条痕，楕円押型文	にぶい橙	にぶい赤褐	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
41	c－4	ナデ，楕円押型文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	0.5～8㎜の砂粒多	繊維痕
42	b－4	ナデ，山形押型文	ナデ	橙 灰褐	灰褐	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	

縄文土器観察表(2)

図番号	出土地区	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
43	b－5	山形押型文，スス付着	ナデ	にぶい赤褐 橙	明赤褐	0.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
44	a－3	楕円押型文	ナデ，楕円押型文，黒斑	にぶい 褐	浅黄橙	1～4㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
45		ナデ，楕円押型文	風化	にぶい 黄 橙	明黄褐	0.5～2.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
46	a－4	ナデ，山形押型文	山形押型文，ナデ	灰 褐	にぶい 赤 褐	1～2.5㎜の砂粒	
47	b－5	楕円押型文	ナデ	明赤褐 暗赤灰	極 暗 赤 褐	0.5～6㎜の砂粒	
48	c－4 SⅠ10	ナデ，楕円押型文，黒斑	条痕のあとナデ	橙 灰 褐	にぶい 褐	2㎜以下の砂粒	
49		ナデ，楕円押型文	ナデ	灰黄褐	にぶい 橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
50	b－3	山形押型文	山形押型文，横ナデ	にぶい 赤 褐	にぶい 赤 褐	3㎜以下の砂粒	
51	b－4	ナデ，山形押型文	ナデ，山形押型文	明赤褐	明赤褐	1～4㎜の砂粒	繊維痕
52	b－4	山形押型文	山形押型文	にぶい 橙	橙	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
53	d－3	山形押型文	山形押型文，ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 橙	0.3～1.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
54	b－4	山形押型文	山形押型文，横ナデ	にぶい 褐	橙	0.3～1.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
55	c－5	楕円押型文	楕円押型文，ナデ	にぶい 褐	黒 褐	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
56	d－5	楕円押型文	楕円押型文，ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	0.2～1.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
57	c－5	楕円押型文	楕円押型文，ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 褐	0.3～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
58		楕円押型文，穿孔	楕円押型文	にぶい 赤 褐	にぶい 赤 褐	0.5～3㎜の砂粒	
59	b－5	楕円押型文	楕円押型文	橙	にぶい 褐	0.3～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
60		楕円押型文	楕円押型文，ナデ	褐	にぶい 黄 褐	1㎜の砂粒	
61	c－5	楕円押型文	楕円押型文，ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	0.5～5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
62	b－4	楕円押型文	ナデ	明黄褐	にぶい 黄 橙	0.3～1㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
63	b－5	山形押型文	ナデ	明赤褐	にぶい 赤 褐	1.5㎜以下の砂粒	
64	b－4	楕円押型文	ナデ	浅 黄 浅黄橙	にぶい 褐	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
65		山形押型文	ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
66		楕円押型文	横ナデ	明赤褐	にぶい 橙	0.5～3㎜の砂粒	
67	b－5	格子目文，黒斑	ナデ，黒斑	橙	にぶい 橙	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
68	c－3	山形押型文	横ナデ	橙	橙	0.2～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
69	c－4	山形押型文	ナデ	橙	橙	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
70	b－5	山形押型文	横ナデ	にぶい 橙	にぶい 褐	0.3～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
71	d－4	山形押型文	ナデ	明赤褐	灰 褐	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
72	b－5	楕円押型文	横ナデ	橙 にぶい赤褐	橙 にぶい褐	0.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
73	b－5	楕円押型文	ナデ，炭化物付着	明赤褐	黒 褐	0.5～5㎜の砂粒	
74	c－4	山形押型文	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐 明赤褐	0.5～5㎜の砂粒	繊維痕
75	d－5	山形押型文	ナデ	明赤褐	橙 にぶい赤褐	1～6㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
76	c－6	山形押型文	ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	1～3㎜の砂粒	
77	b－4	山形押型文	ナデ，条痕のあとナデ	橙	にぶい 赤 褐	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
78	d－3	山形押型文	ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	1～3㎜の砂粒	
79	d－4	山形押型文	ナデ	にぶい 褐	橙	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
80	e－4	山形押型文	横ナデ	にぶい 黄 橙	橙	1～6㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
81		楕円押型文	ナデ	にぶい 褐	褐	1～3㎜の砂粒	
82	b－5	楕円押型文	ナデ	にぶい 黄 橙	にぶい 褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
83		楕円押型文	ナデ	褐 灰	橙	1～2.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
84	b－6	楕円押型文	ナデ	橙	明赤褐	0.5～7㎜の砂粒	繊維痕

縄文土器観察表(3)

図番号	出土地区	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
85	c－5	楕円押型文	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	0.5～3㎜の砂粒	
86	c－4 SⅠ10	楕円押型文，穿孔	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	0.5～3.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
87	e－4	楕円押型文	ナデ	にぶい橙	灰褐	3～6㎜の砂粒	繊維痕
88	b－4	楕円押型文	ナデ	橙	明赤褐	0.5～3㎜の砂粒	繊維痕
89	b－5	楕円押型文	ナデ	橙	にぶい赤褐	0.5～1.5㎜の砂粒	
90	b－4	楕円押型文	ナデ	明褐	明褐 黒褐	3㎜以下の砂粒	繊維痕
91	b－4	山形押型文	条痕のあと横ナデ	橙 にぶい赤褐	橙	1㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
92	c－3	楕円押型文	横ナデ	橙	にぶい赤褐	0.3～1㎜の砂粒	
93	b－2	楕円押型文	貝殻条痕のあと横ナデ	明赤褐	にぶい褐	0.2～1㎜の砂粒	
94	c－4 SⅠ10	楕円押型文	貝殻条痕	明黄褐	明黄褐	0.3～3.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	繊維痕
95	b－5	楕円押型文	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
96	b－4	楕円押型文，ナデ	ナデ	橙	橙	0.5～5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
97	b－4	ナデ，穿孔	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～1.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
98	b－5	条痕（横）のあとナデ	条痕のあとナデ	橙	橙	2㎜以下の砂粒	繊維痕
99	b－4	ナデ	ナデ	橙	橙 にぶい橙	5㎜以下の砂粒	
100	c－6	ナデ，スス付着	ナデ	にぶい橙	灰褐	5㎜以下の砂粒	繊維痕
101	c－5	ナデ，スス付着	ナデ	にぶい橙	灰褐	2㎜以下の砂粒	繊維痕
102	b－3	ナデ，沈線，連続刺突文，横ナデ	ナデ	灰黄	にぶい黄橙	0.5～1.5㎜の砂粒 雲母	
103	c－4	横ナデ，貝殻腹縁による押し引き文	横ナデ	にぶい褐 褐	にぶい橙 にぶい黄橙	1～6㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
104	b－4	横ナデ，貝殻腹縁刺突文	横ナデ	にぶい橙	橙	0.3～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
105	d－3	横ナデ，貝殻腹縁刺突文（横，縦）押し引き文	横ナデ	橙 にぶい褐	橙	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
106	b－5	貝殻腹縁刺突文（斜），スス付着	貝殻条痕のあとナデ	橙	橙	0.3～4㎜砂粒，黒色で光る砂粒	
107		刻み（斜），貝殻腹縁刺突文（縦）スス付着	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
108	b－5	貝殻条痕，刺突文	横ナデ	灰褐	灰褐	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
109	SA2	貝殻腹縁刺突文（横）貝殻腹縁押し引き文（縦）	ヘラミガキ	にぶい褐	にぶい橙	0.5～3㎜の砂粒，雲母	
110	c－5	貝殻腹縁刺突文（横）貝殻腹縁押し引き文（縦）	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の砂粒	
111	c－4 d－3	貝殻腹縁刺突文（横），押し引き文	ナデ	灰褐	にぶい黄褐	1～2㎜の砂粒，雲母	
112		貝殻腹縁刺突文（縦）押し引き文	ナデ	にぶい橙	明褐	0.5～3㎜の砂粒	
113	b－4	貝殻腹縁刺突文（横，縦）	横ナデ	灰褐	灰褐	1～2㎜の砂粒，雲母	
114	b－5	貝殻腹縁刺突文（斜，横）ナデ，押し引き文	ナデ	にぶい橙	灰褐 にぶい橙	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
115	b－5	貝殻腹縁刺突文（ロッキング）連続短沈線文，スス付着	横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
116	b－3	貝殻腹縁刺突文（ロッキング）	横ナデ	灰褐	にぶい黄橙	2㎜以下の砂粒	
117	b－5	貝殻腹縁刺突文（ロッキング）連続短沈線文（縦）	ナデ，炭化物付着	にぶい橙	にぶい黄橙	0.5～2.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
118	b－5	貝殻腹縁刺突による綾杉文	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	1～2㎜の砂粒，雲母	
119	c－5	貝殻腹縁刺突による綾杉文	横ナデ	にぶい褐	にぶい橙	1～2㎜の砂粒，雲母	
120	b－5 d－3	貝殻腹縁刺突による綾杉文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1～2㎜の砂粒，雲母	
121	b－4	貝殻腹縁刺突文（横，斜），綾杉文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1㎜の砂粒，雲母	
122	b－5	綾杉文，貝殻腹縁刺突文（横）綾杉文	ナデ	灰褐	にぶい赤褐	0.5～3㎜の砂粒，雲母	
123		貝殻腹縁刺突文（横）綾杉文	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	0.5～2㎜の砂粒，雲母	
124	c－5	貝殻腹縁刺突文（横），綾杉文	ミガキ	橙 灰褐	橙 灰褐	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
125	b－5	貝殻腹縁刺突文（横），綾杉文	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	1～2㎜の砂粒	
126		ナデ，貝殻腹縁刺突文（横，縦）	ナデ	橙	橙	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	

縄文土器観察表(4)

図番号	出土地区	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
127	b－5 SI12	貝殻腹縁刺突文（斜）短沈線文（斜）綾杉文	横ナデ	にぶい橙 にぶい褐	にぶい褐	0.5～5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
128	b－3	貝殻腹縁刺突文（横）綾杉文	ナデ	橙	灰黄褐	1㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
129	b－5	貝殻腹縁刺突文（横）綾杉文	横ナデ，ナデ	橙	にぶい褐	0.5～1.5㎜の砂粒，雲母	
130		ナデ，短沈線文（横）刺突文	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	0.5～3㎜の砂粒	
131		貝殻腹縁刺突文（横）	ナデ	橙	にぶい黄橙	1㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
132	d－4	貝殻腹縁刺突文（横）	ナデ	明赤褐	灰黄褐	0.5～3.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
133		貝殻腹縁刺突文（横）	風化	にぶい橙	にぶい橙	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
134	b－3	貝殻腹縁刺突文（横）	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
135		刻み（縦），クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横），スス付着	二本単位の沈線文	黒	にぶい褐	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
136		連続刺突文，クシ状工具による条痕（縦，斜）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	二本単位の沈線文	にぶい橙	にぶい黄褐	0.2～1.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
137	a－2	連続刺突文，クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）	二本単位の沈線文	にぶい黄褐	にぶい橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
138		連続刺突文，クシ状工具による条痕（斜）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	二本単位の沈線文	にぶい橙	にぶい黄橙	0.2～1.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
139		連続刺突文，クシ状工具による条痕（縦，斜）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	二本単位の沈線文	にぶい橙	にぶい黄橙	0.2～1.5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
140	a－2	刺突文，クシ状工具による条痕（斜）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	二本単位の沈線文	橙	にぶい黄橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
141	a－2	押圧文，クシ状工具による条痕（斜，横）のあと二本単位の沈線文（横，縦）スス付着	二本単位の沈線文，条痕	にぶい橙	灰黄褐	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
142		クシ状工具による条痕（斜）のあと二本単位の沈線文（縦，横），スス付着	二本単位の沈線文	灰黄褐	にぶい黄橙	2.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
143		押圧文，クシ状工具による条痕（斜）のあと二本単位の沈線文（横，斜），スス付着	二本単位の沈線文	暗灰黄	暗灰黄	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
144		刻み（斜）沈線文（斜）穿孔，スス付着	連続刺突文	灰黄褐	にぶい黄	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
145	b－4	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	連続刺突文，炭化物付着	にぶい褐	褐	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
146		クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）	連続刺突文	にぶい褐	にぶい褐	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
147	a－2	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	横ナデ，炭化物付着	にぶい黄橙	にぶい黄褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
148	c－4 SC7	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	横ナデ，炭化物付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2～5㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
149	a－3	ナデ，条痕（縦），二本単位の沈線文	ナデ，黒斑	灰褐	にぶい赤褐	2㎜以下の砂粒	
150	b－3	クシ状工具による条痕（縦，斜）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	ナデ，横ナデ，炭化物付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.3～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
151		クシ状工具による条痕（縦）のあと沈線文（横）	ナデ	暗褐	暗赤褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
152		クシ状工具による条痕（斜）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	ナデ	黒褐	にぶい褐	1㎜以下の砂粒	
153		条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）	ナデ	黒褐	褐灰	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
154	a－2	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	風化	にぶい赤褐	にぶい赤褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
155		クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）	沈線，沈線のあとナデ	明赤褐 暗赤褐	明赤褐	0.5～2㎜の砂粒，雲母多	
156		クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（斜）	ナデ	灰褐 にぶい橙	明褐	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
157	SA6	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）連続刺突文(二段)，スス付着	ナデ	褐灰	にぶい黄褐	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
158	a－1	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横），連続刺突文（二段）	横ナデ，炭化物付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
159		クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横），連続刺突文（二段）	ナデ	褐灰	にぶい橙	1～6㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
160	c－4 SC7	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）連続刺突文（二段）スス付着	風化	灰黄褐	にぶい黄橙	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
161		クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	2㎜以下の砂粒	
162	b－4	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）	ナデ	明褐	橙	1㎜以下の砂粒	
163	b－4	クシ状工具による条痕（斜）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
164	b－4	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	横ナデ	にぶい褐	橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
165		クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	ナデ	灰褐	明褐	0.5～1㎜の砂粒	
166	b－4	クシ状工具による条痕（縦）のあと二本単位の沈線文（横）スス付着	ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	0.5㎜の砂粒	
167		クシ状工具による条痕（縦）	横ナデ	橙	にぶい橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
168	a－4	クシ状工具による条痕（縦）	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	

縄文土器観察表(5)

図番号	出土地区	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
169		クシ状工具による条痕（縦），スス付着	ナデ	灰　褐	明　褐	0.5～2㎜の砂粒	
170	ＳＡ２	クシ状工具による条痕（縦）	ナデ	灰　褐	灰　褐	0.5～2㎜の砂粒	
171	ＳＡ４	クシ状工具による条痕（斜），スス付着	横ナデ	にぶい黄　褐	にぶい黄　褐	2.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
172		クシ状工具による条痕（縦），スス付着	ナデ，炭化物付着	にぶい橙	にぶい橙	2.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
173		クシ状工具による条痕（縦），沈線文（横）スス付着	ナデ	灰　褐	明　褐	0.5～1㎜の砂粒	
174		クシ状工具による条痕（縦）スス付着	ナデ，炭化物付着	にぶい黄　褐	にぶい黄　褐	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
175		クシ状工具による条痕（斜）スス付着	ナデ，炭化物付着	灰黄褐	にぶい黄　橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
176	ＳＡ２	クシ状工具による条痕（斜）スス付着	ナデ	灰黄褐	にぶい黄　褐	2㎜以下の砂粒	
177	ｂ－３	条痕（斜）沈線文（斜）	クシ状工具による条痕のあと沈線文	にぶい褐	にぶい橙	3㎜以下の砂粒	
178		沈線文（縦，斜），スス付着	ナデ	黒　褐	明赤褐	1～3㎜の砂粒	
179		クシ状工具による条痕（斜）のあと沈線文（斜）スス付着	貝殻条痕（斜，横），沈線文（斜，縦）	にぶい橙	灰　褐	1.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
180	ａ－２	沈線文（斜），スス付着	ナデ	黒	明黄褐	1～2㎜の砂粒	
181		沈線文（縦，斜），スス付着	ナデ	灰　黄	にぶい黄　褐	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
182		沈線文（斜）	ナデ，黒斑	にぶい橙　橙	にぶい橙	2㎜以下の砂粒	
183	ａ－２	クシ状工具による条痕（斜）のあと沈線文（横）スス付着	横ナデ	黒　褐	にぶい黄　褐	1㎜程の砂粒，黒色で光る砂粒	
184	ｃ－３	条痕のあと二本単位の沈線文（横）	ナデ	にぶい赤　褐	橙	2㎜以下の砂粒	
185		沈線文（斜）	ナデ	にぶい黄　橙	にぶい黄　橙	2㎜以下の砂粒	
186		沈線文（斜）	横ナデ	灰　褐	灰黄褐	1㎜以下の砂粒	
187	ｂ－３	沈線文（縦，斜）	ナデ，黒斑	にぶい黄橙　にぶい橙	にぶい橙	3.5㎜以下の砂粒	
188	ｂ－４	条痕（放射状），スス付着	ナデ	にぶい黄　橙	にぶい黄　橙	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
189	ａ－２	刺突文，刻み，縄文（斜）刻目突帯，スス付着	縄文（斜），ナデ	にぶい赤　褐	赤　褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
190		刻目突帯，縄文（斜）スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
191		縄文（斜）	ナデ	橙	にぶい赤　褐	1㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
192	ａ－３	連続刺突文，縄文（斜）刻目突帯，スス付着	縄文（斜），ナデ	灰　白	灰　黄	1.5～4㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
193	ｂ－４	連続刺突文，縄文（斜）刻目突帯，スス付着	縄文（斜），ナデ	灰　白	灰　黄	1㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
194	ＳＡ２	連続刺突文，横ナデ，スス付着	連続刺突文，縄文（斜）ナデ	灰　黄	灰　黄	0.5㎜程の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
195	ａ－３	縄文（斜），スス付着	縄文（斜）ナデ，黒斑	灰　褐	にぶい橙	2㎜以下の砂粒	
196	ＳＡ２	縄文（縦，斜）	ナデ，炭化物付着	浅　黄	灰　黄	1㎜程の黒色で光る砂粒，雲母	
197		縄文（縦）	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
198		刺突文，沈線文（横），縄文	ナデ	褐　灰	にぶい橙	0.5～1㎜の砂粒	
199	ＳＡ３	横ナデ，条痕のあとナデ	沈線文，ナデ	橙	にぶい橙	1㎜以下の砂粒	
200		ナデ，スス付着	沈線文，ナデ	明赤褐	橙	2㎜以下の砂粒	
201		ナデ	沈線文，ナデ，炭化物付着	橙	灰　褐	1㎜程の砂粒	
202		押圧文，ナデ	貝殻条痕のあとナデ	黒	黒	3㎜以下の砂粒	
203		ナデ	ナデ	灰　褐	にぶい橙　黒　褐	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
204	ＳＡ９	ナデ，スス付着	条痕のあとナデ	にぶい黄　橙	明黄褐	1～3㎜の砂粒	
205		ナデ，貝殻腹縁による条痕（斜）のあと凹線文（斜），スス付着	貝殻条痕のあとナデ	橙	明赤褐	1㎜程の砂粒	
206	ｃ－３	ナデ，沈線（横）	ナデ	にぶい赤　褐	にぶい褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
207	ＳＡ９	横ナデ，貼付突帯	横ナデ，貝殻条痕	褐　灰	褐	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
208		横ナデ，貼付突帯	横ナデ	黒　褐	褐	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
209		横ナデ，貼付突帯，貝殻条痕（斜）	横ナデ	にぶい褐	にぶい橙	2㎜以下の砂粒	
210	ｅ－４	ナデ，貼付突帯，貝殻条痕（横）	ナデ	黒	褐　灰	5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	

縄文土器観察表(6)

図番号	出土地区	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
211	c－3	横ナデ，貼付突帯，スス付着	横ナデ，条痕	にぶい橙	にぶい橙	2～4㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
212		ナデ，貼付突帯，孔列文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
213		ナデ，貼付突帯，孔列文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
214		ナデ，貼付突帯，孔列文，スス付着	ナデ（穿孔？）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
215		刻み（縦）横ナデ，スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
216	SA9	横ナデ，条痕（横），貼付突帯，スス付着	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
217		横ナデ，貼付突帯	横ナデ	にぶい黄橙	褐灰	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
218		刺突文，貼付突帯，ナデ	ナデ	褐灰	灰褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
219		組織痕	貝殻条痕のあとナデ	にぶい橙	黒褐	1㎜以下の砂粒，黒く光る砂粒	
220	SA6	組織痕	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1㎜以下の砂粒	
221	b－3	組織痕	貝殻条痕，ナデ	橙	明赤褐	0.5～2㎜の砂粒	
222	d－3	ナデ，穿孔	条痕のあとナデ	黒褐	褐	3㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
223	b－4	条痕（斜）のあとナデ，スス付着	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	1～6㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
224		ナデ	ナデ	にぶい黄褐	褐	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
225	c－4 SI10	ナデ，スス付着	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	0.5～5㎜の砂粒	
226	a－2	ナデ	ナデ，スス付着	褐	にぶい橙	0.5～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
227	SA1	横ナデ，貼付突帯	横ナデ	橙	橙	2㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
228	SA2	横ナデ，貼付突帯，スス付着	貝殻条痕	灰褐	にぶい褐	1.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
229		貝殻条痕（縦）のあとナデ	貝殻条痕	褐	褐	2.5㎜以下の砂粒，黒色で光る砂粒	
230		ナデ，貼付突帯	ナデ	にぶい橙	黒褐	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒，雲母	
231		ナデ，条痕（横）のあとナデ，スス付着	ナデ	褐	にぶい褐	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
232		条痕（横）のあとナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	1～3㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
233		横ナデ，貝殻腹縁刺突文（斜），スス付着	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
234	c－3	沈線文（波状）のあとナデ，スス付着	ナデ，炭化物付着	にぶい橙	橙	2㎜以下の砂粒	
235	c－3	沈線文（波状），スス付着	ナデ	橙	橙	2㎜以下の砂粒	
236		条痕（縦）のあとナデ，沈線文（斜），スス付着	ナデ	にぶい黄橙	淡黄	3㎜以下の砂粒	
237		沈線文（横），ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	3㎜以下の砂粒	
238		沈線文（格子状），スス付着	横ナデ	にぶい赤褐	橙	2.5㎜以下の砂粒，雲母	
239	SA2	条痕（斜），スス付着	ナデ，炭化物付着	黒褐	黒褐	2㎜以下の砂粒	
240		条痕（縦），ナデ	ナデ	明赤褐	橙	0.5～4㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
241		貝殻条痕（縦）	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	0.5～2㎜の砂粒	
242		貝殻条痕（斜）のあとナデ，スス付着	貝殻条痕，炭化物付着	にぶい橙	にぶい橙	1～2㎜の砂粒	
243		貝殻条痕（横）のあとナデ	貝殻条痕	灰褐	にぶい橙	1～2㎜の砂粒	
244		貝殻条痕（横），スス付着	条痕	橙	赤褐	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
245		条痕（横）のあとナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1㎜程の砂粒	
246	b－4	貝殻条痕（横）	貝殻条痕	明褐	にぶい橙	0.5～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒	
247	b－3	条痕（斜）	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	1～2㎜の砂粒	

第２節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居址10軒が検出された。全て方形を基調としたプランであるが、張り出し部を持つものが３軒あり、４軒が切り合う形で見られた。遺物は、住居址内及び第Ⅱ層（包含層）より土器・石器が出土しているが、中でもＳＡ２の石包丁１、磨石２、石皿２、ＳＡ６の石包丁３などが注目される。そのほか、磨製石鏃・杓子状土製品なども出土している。土器の詳細については、観察表を作成した。参照されたい。

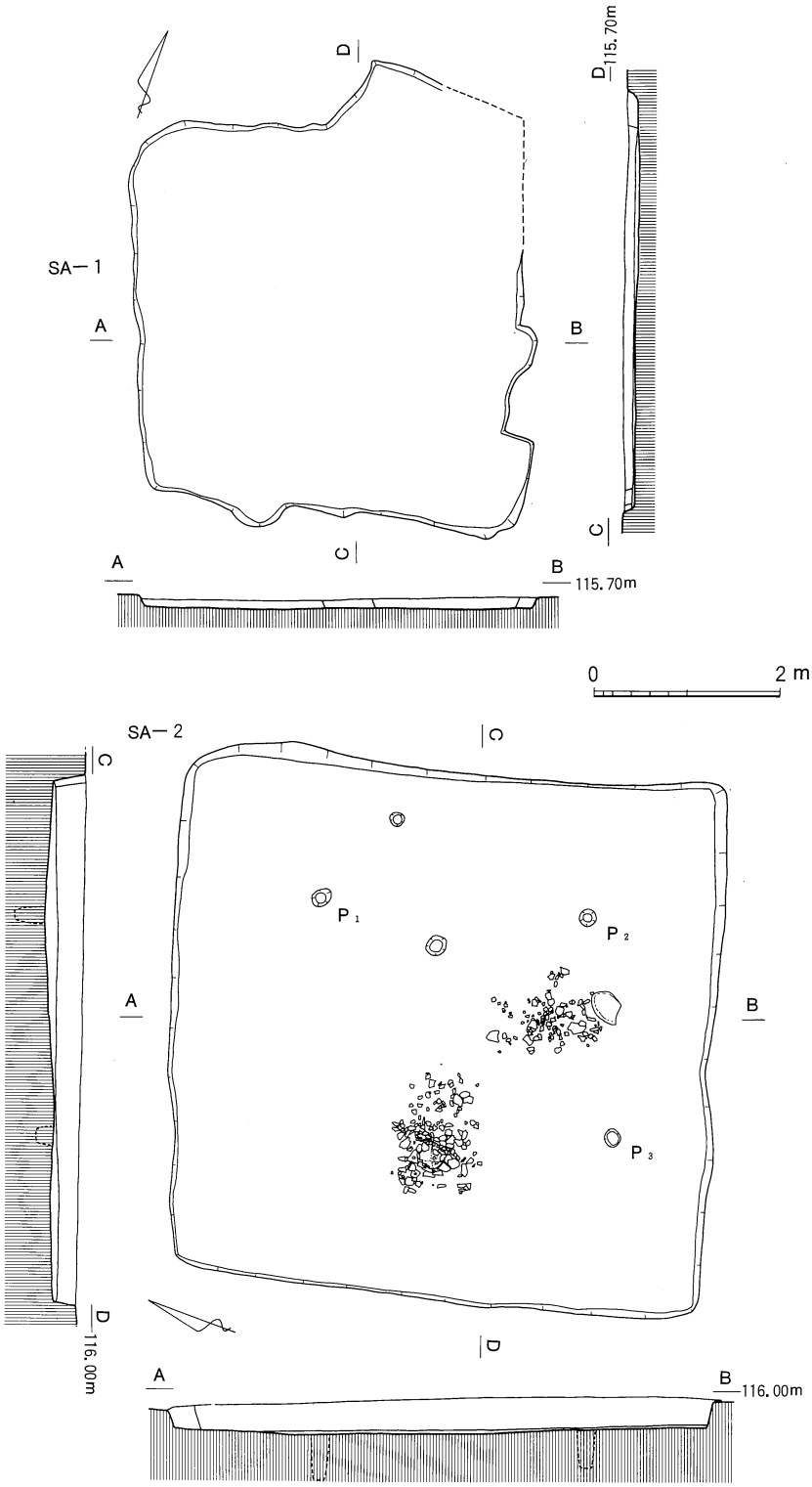
SA１（第20図）

ｂ－４区に検出された。長軸4.89ｍ、短軸4.3ｍの方形プランであるが、北東及び南東隅に張り出しを持つ（北東隅は一部攪乱を受けている）。柱穴は検出されなかった。検出面から床までの深さは14㎝で遺物も少ない（第21図）。１は複合口縁壷である。内傾した拡張部には８条の櫛描波状文が施される。流れ込む形で石錐が出土している（第42図６）。

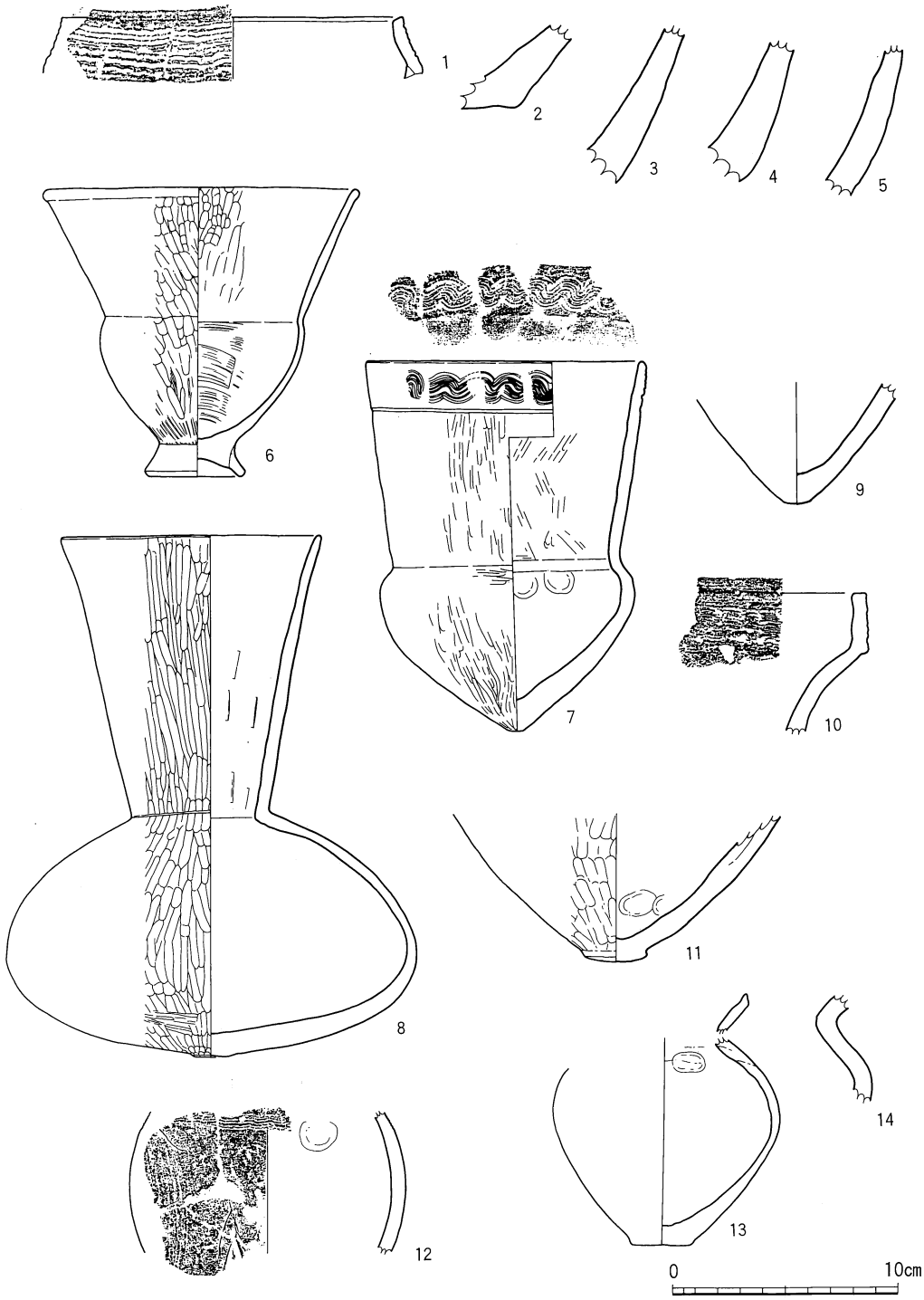
SA２（第20図）

ａ－３・４・ｂ－３・４区にかけて検出された。長軸5.85ｍ、短軸5.72ｍの方形プランであり、深さは34㎝を計る。４本柱であるが、北西のものは木根による攪乱で検出されなかった。上屋に関連すると思われる炭化材が数ケ所に見られた。床上には、砂岩の剝片が二カ所にまとまって見られ、一方では母材である砂岩から剝がれる状態が見られる。これらの剝片には使用痕等は見られず、何らかの石器の作成途中であろうと思われる。

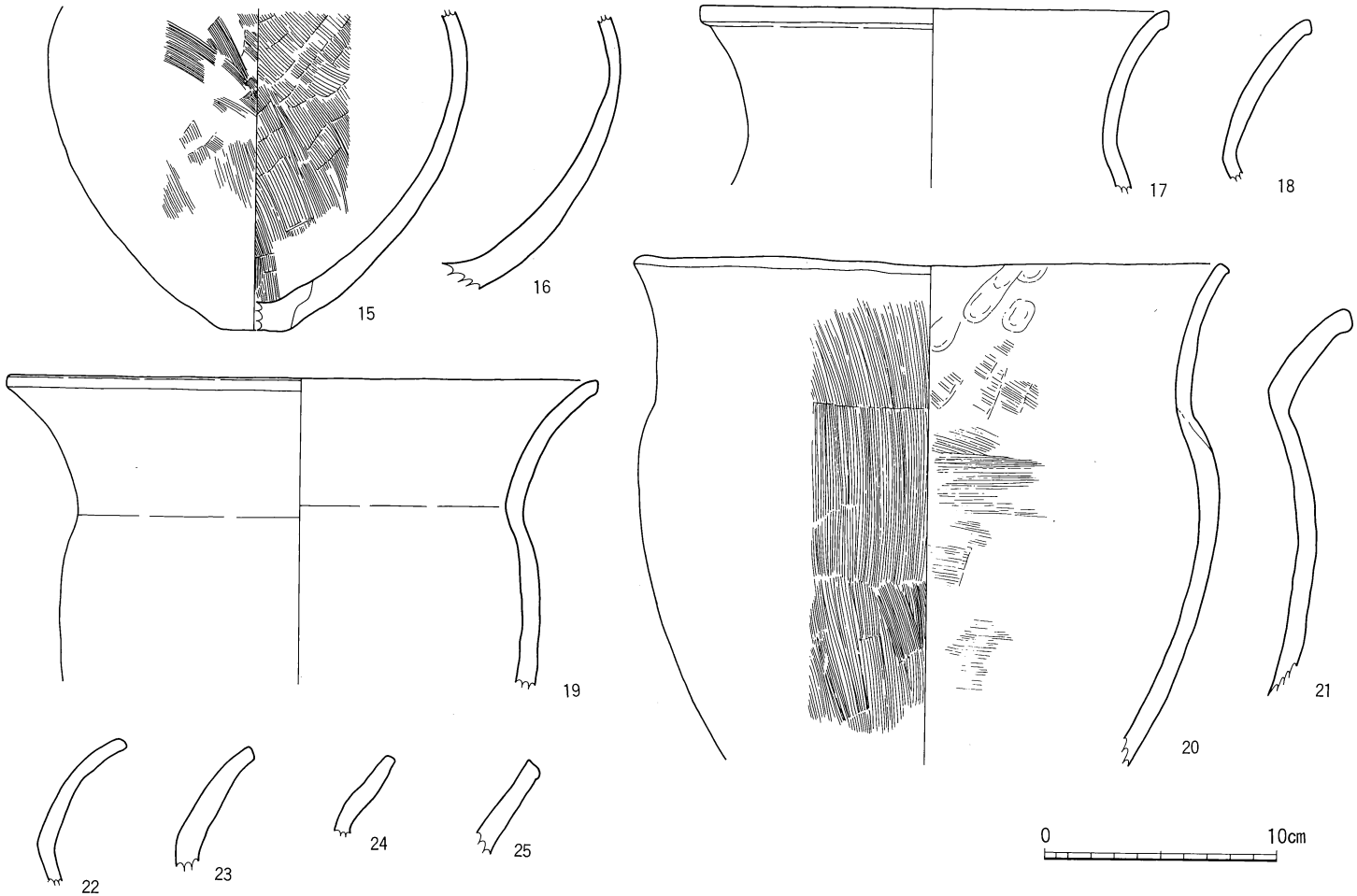
遺物は、埋土の下層から上層まで見られた（第21～24図）。６は脚付壷でほぼ完形である。球形で小ぶりの胴部と直線的に立ち上がる頸部から口縁部には丁寧なミガキ調整がなされる。薄手の作りである。７は長頸壷で、口縁部に櫛描波状文が施される。頸部と胴部はミガキ調整で、底部は尖底に近い平底である。８は床直上で出土した完形の長頸壷で、内部の底付近に炭化物の塊が見られた。タマネギ形の胴部に乳房状の底部が付く。12は無頸壷で、口縁部下に櫛描波状文と胴部に弧状櫛描きが見られる。13は短頸壷で丁寧にナデ調整された内外の器面には、光沢を持つ黒塗り様のものが見られる。16の胴上部には、ススの付着と風化のためはっきりしないが線刻状のものが見られる。甕型土器には口縁部が外反しながら長く延びるものと、く字形に短く外反するものとがある。頸部は明瞭な稜があるものとないものとがある。胴上部が最大径となるが、19は口径が最大径となる。底部は平底と若干上げ底気味のものが見られる。器面はナデあるいはハケ調整である。30は手づくねの杓子状土製品である。石器は石包丁、磨石、石皿が出土している（第23図）。１は凝灰質頁岩製の石包丁で両側に切り込んだ抉りを持つ。丁寧な研磨が見られるが、長期間使用のためか両面ともに剝離が著しい。２は砂岩の磨石である。二カ所に敲打痕を持つ。３は尾鈴山酸性岩である。５・６は砂岩の石皿である。他に石匙が流れ込む形で出土している（第42図11）。



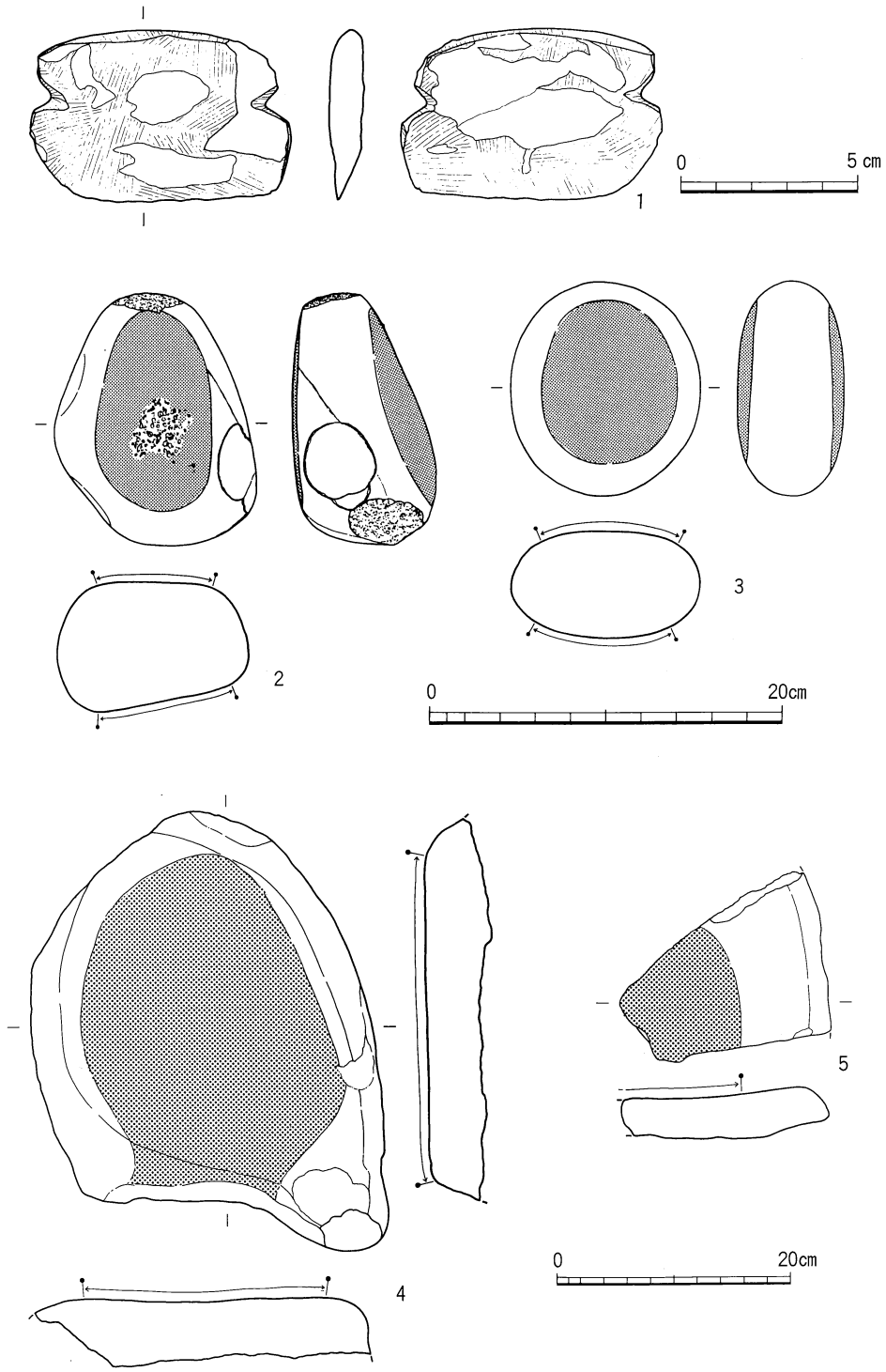
第20図　SA－1・SA－2　実測図（1／80）



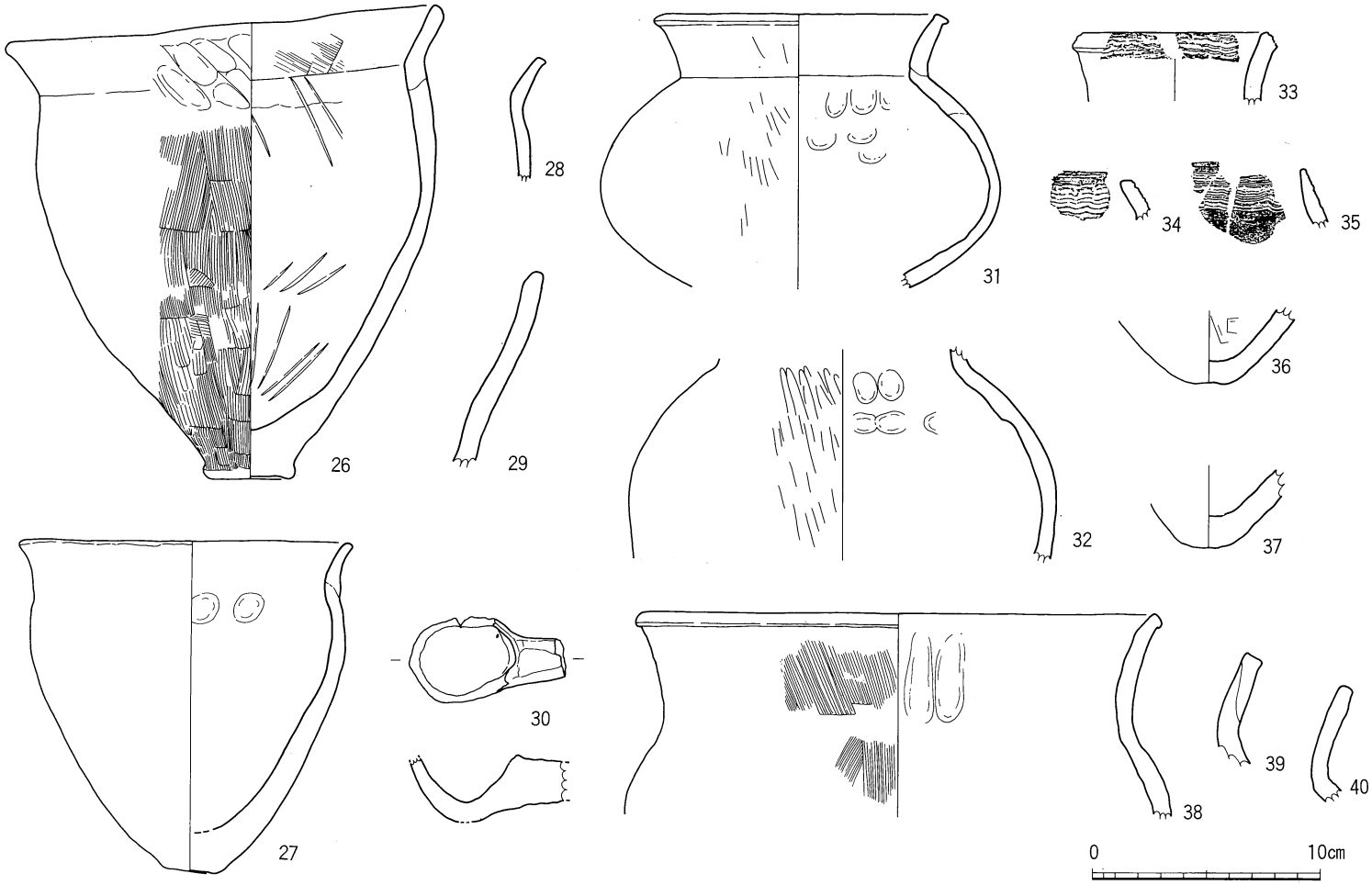
第21図　SA－1・SA－2　出土土器実測図（1／3）　（1～5→SA－1　6～14→SA－2）



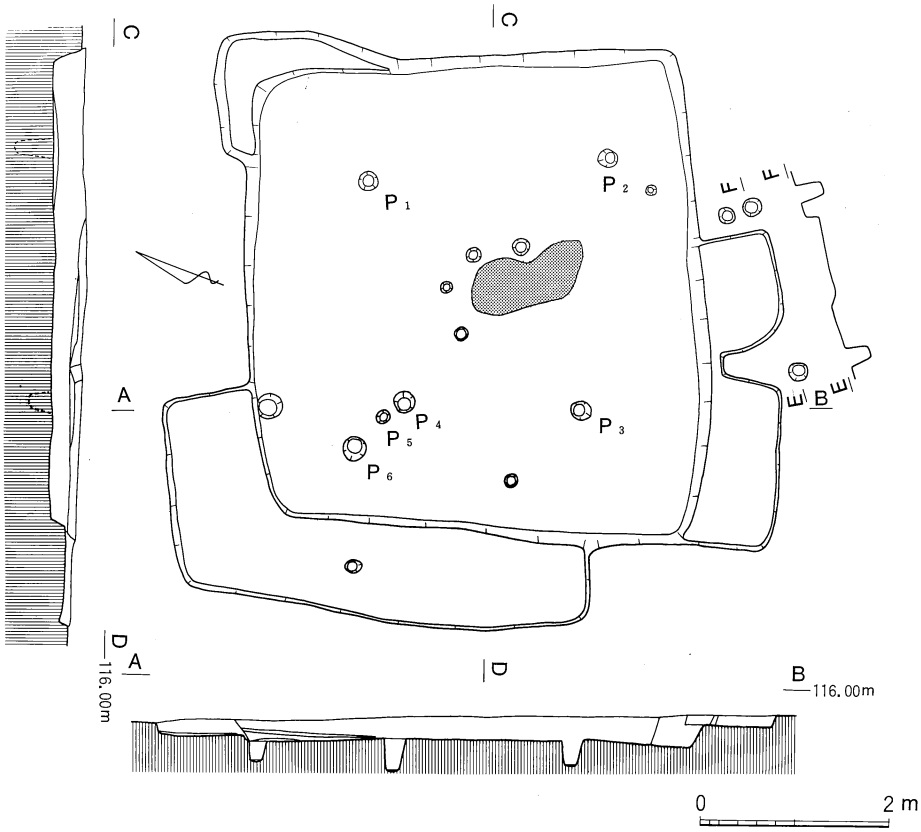
第22図　SA－2　出土土器実測図（1／3）



第23図　SA－2　出土石器実測図（1→1／2，2・3→1／4，4・5→1／6）



第24図　SA－2・SA－3　出土土器実測図（1／3）　（26～30→SA－2，31～40→SA－3）



第25図　SA－3　実測図（1／80）

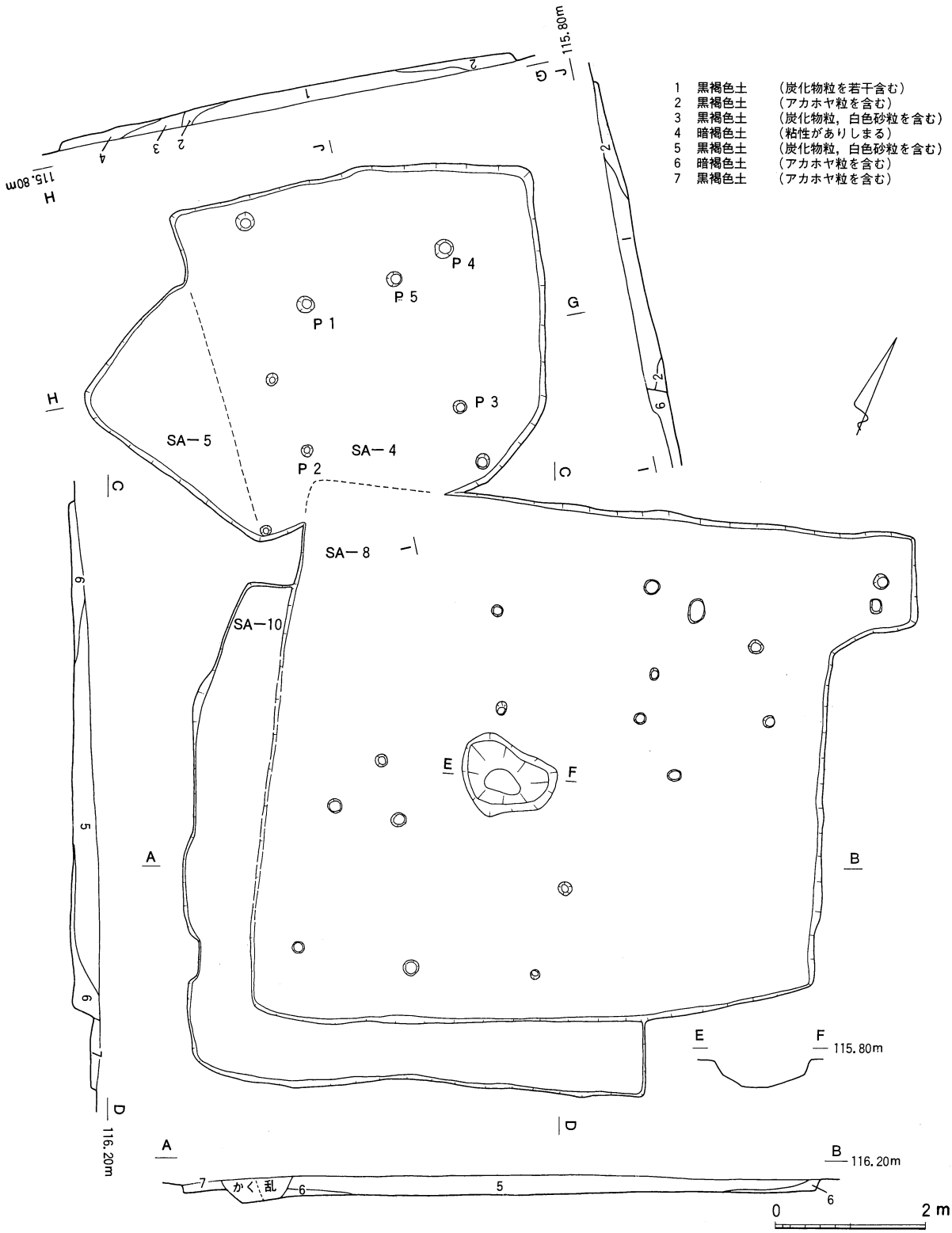
SA 3（第25図）

b－3区で検出された。方形基調の張り出し部をもつ竪穴住居址である。主空間の長軸4.88m、短軸4.64mで深さ37cmを計り、張り出し部を含めると長軸6.55m、短軸6.30mとなる。主柱はP1～4で、他の柱穴は後世のものと思われるが、埋土に明瞭な差は見られず、住居に伴う補助的な柱が含まれる可能性もある。中央部やや南寄りに床の焼けた痕跡が見られた。南壁中央の張り出し部は、その両側にピットが見られ、入口であった可能性がある。主空間は第Ⅳ層を床とするが、張り出し部はアカホヤ層中で床となる。

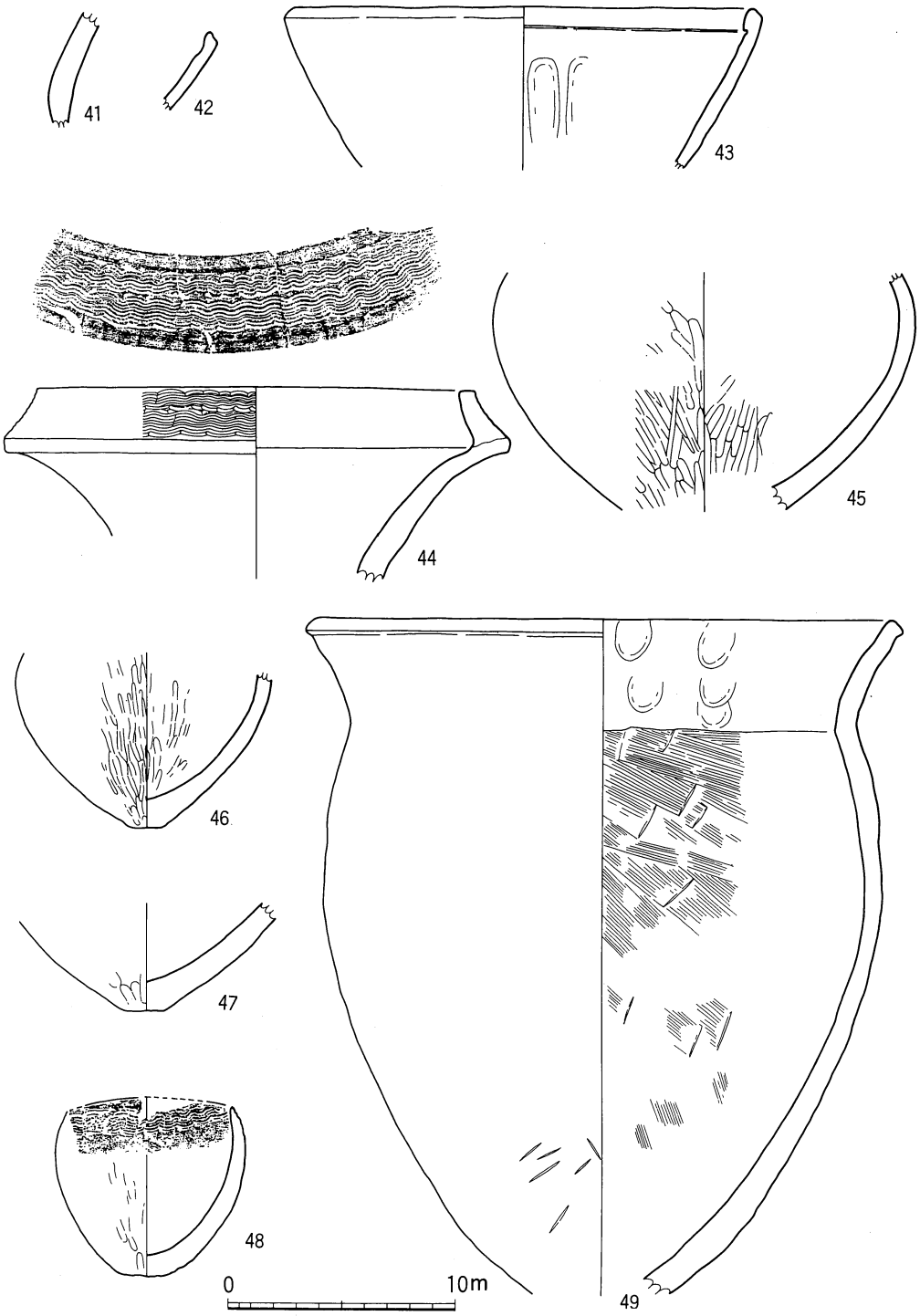
土器は少なく、小片での出土であった（第24図）。32は頸部がく字形に屈曲する短頸壷で、ミガキ調整と内器面に指頭痕が見られる。33～35の壷には櫛描波状文が施される。38は滑らかに外反しながら延びる甕の口縁部で、内器面に指でなで上げた痕が残る。

SA 4・5・8・10（第26図）

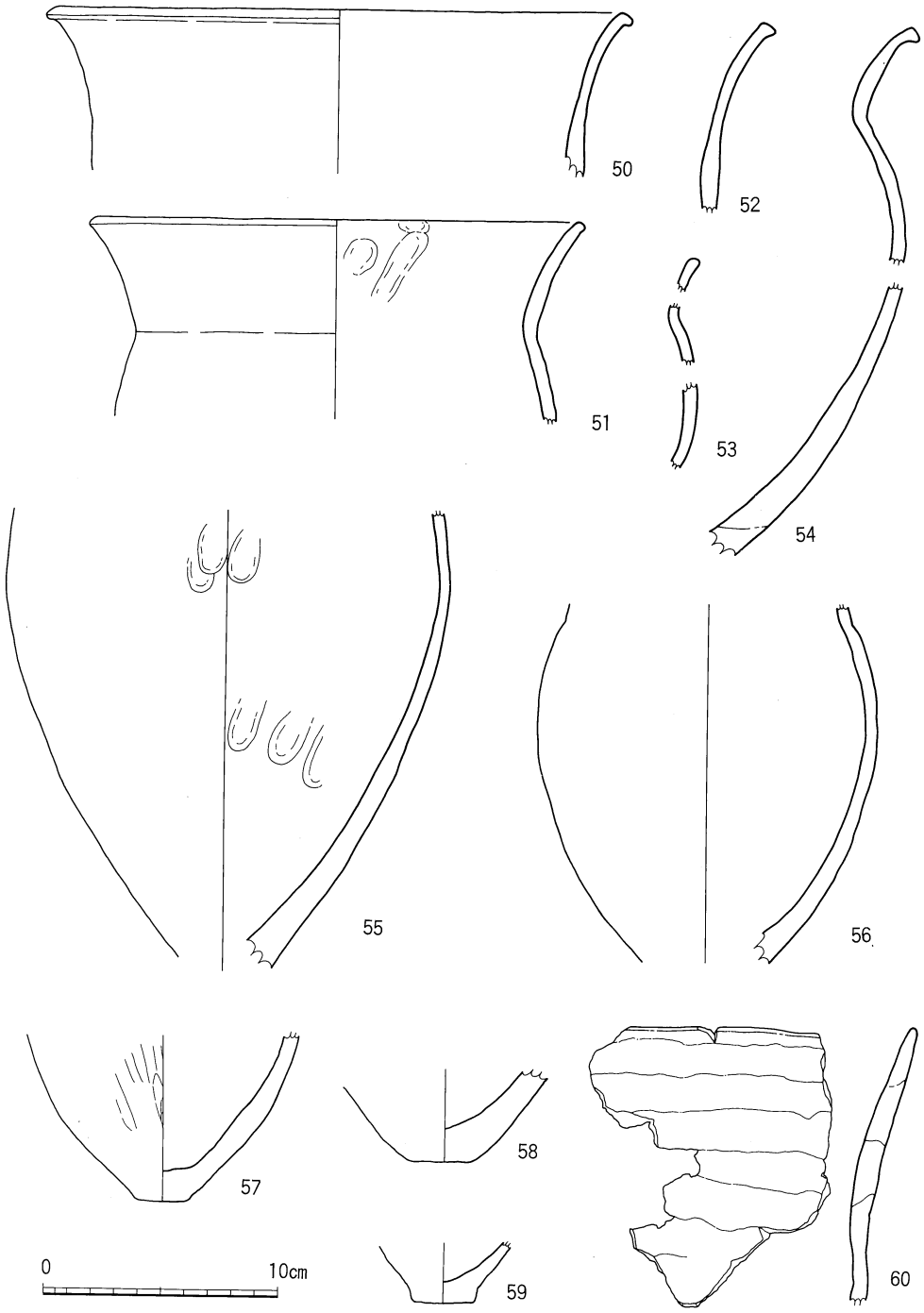
4軒が切り合う形でb－3・4、c－3・4区に検出された。SA4は推定で4.5m前後の方形住居址で、4本柱と思われるがP4・5の関係がはっきりしない。SA5・SA8は、土層断面の観察でSA5→SA4→SA8の切り合い関係が確認されたが、床面には明瞭な差がなく



第26図　SA－4・SA－5・SA－8・SA－10　実測図（1／80）



第27図　SA－4・SA－8　出土土器実測図（1／3）　(41～43→SA－4 44～49→SA－8)



第28図　SA－8　出土土器実測図（1／3）

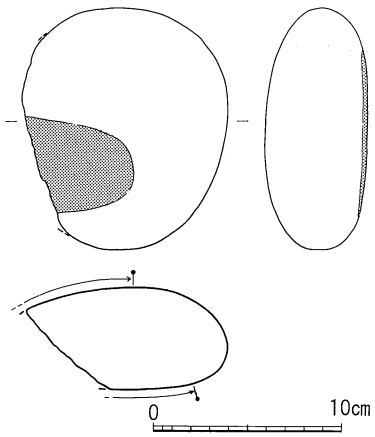
それらの境界はいま一つはっきりしない。ＳＡ８は長軸7.40ｍ、短軸6.95ｍとかなり大規模の住居址で、北東隅に張り出し部を持つ。中央部に土坑を持ち、その埋土は炭化物粒を多少含む黒褐色土の単純層であった。ピット18を検出したが、主柱穴は判別できなかった。ＳＡ10は推定で長軸6.60ｍ、短軸6.05ｍの方形住居址である。ＳＡ８との切り合い関係は、西壁側では木根による攪乱のためはっきりしなかったが、南壁側でＳＡ８が新しいことを確認した。

遺物はＳＡ４とＳＡ８から出土している（第27～29図）。43はやや内湾しつつ口縁部内面に段を持つ鉢で、内器面に指でなで上げた痕が残る。44は複合口縁壷で、内傾した拡張部に櫛描波状文を施す。壷形土器はミガキ調整で平底である。甕形土器は全て口径あるいは胴上部が最大径となる。口縁部端は、丸みを帯びるもの（53）、とがるもの（49）、垂れ下がり気味のもの（50・54）が見られる。60は粘土の輪積み痕を残す粗雑な作りの甕で、他のものと様相を異にする。古墳時代前期のものと思われ、住居址外から流れ込んだものであろう。他に砂岩の磨石が出土している（第27図）。

SA６（第30図）

ａ－１・２、ｂ－１・２区にかけて検出された。長軸6.58ｍ、短軸6.18ｍで深さ50㎝を計る方形の住居址である。主柱穴はＰ１～４である。焼土等は見られない。

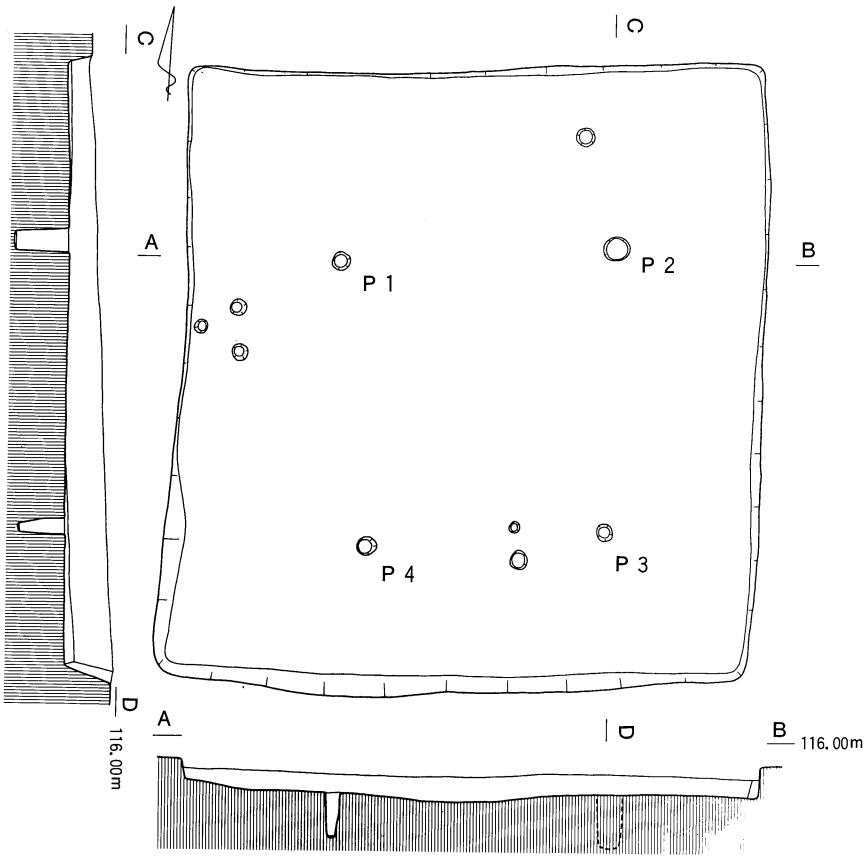
遺物は床直上のものは少なく、埋土の中程から上層にかけて小片で見られた（第31～33図）。63は壷の底部で、円盤状の大きめの平底である。65は床上に倒れ込む形で出土した。外反する口縁部にあまり張らない胴部を持つ甕で完形である。ナデおよびハケ調整である。70は上げ底、71は左右に張り出す平底の甕で共に底部から胴部にかけて指頭痕が残る。72は高坏の脚部で丁寧なナデとミガキが見られる。75は鉢でごく浅い櫛描波状文が施される。77は紐状の突帯でハ字形の刻みが施される。石器は石包丁、磨石、砥石（？）が出土している（第32図）。１はカマボコ形で両面からの二孔穿孔である。刃部は直線的で、片面には位置がずれ途中で止めた穿孔痕が見られる。２は長方形で湾曲した刃部を持つ。二孔穿孔と抉りの両者が見られる。３は欠損品であるが長方形で抉りを持つ。両面の剝離が著しい。石材は１・２が緑色凝灰岩で、３は頁岩である。４は摂理面で割れた欠損品であるが側面に磨痕と若干のくぼみが見られ、砥石の可能性がある。下端部の剝離状の痕は、砂岩特有の摂理と風化のためと思われる。５は砂岩の磨石である。



第29図
SA－８　出土石器実測図（１／４）

SA７

ａ－２区で検出された。Ａ・Ｂ区間の道路で切られており、調査区には一部がかかるのみである。柱穴１を検



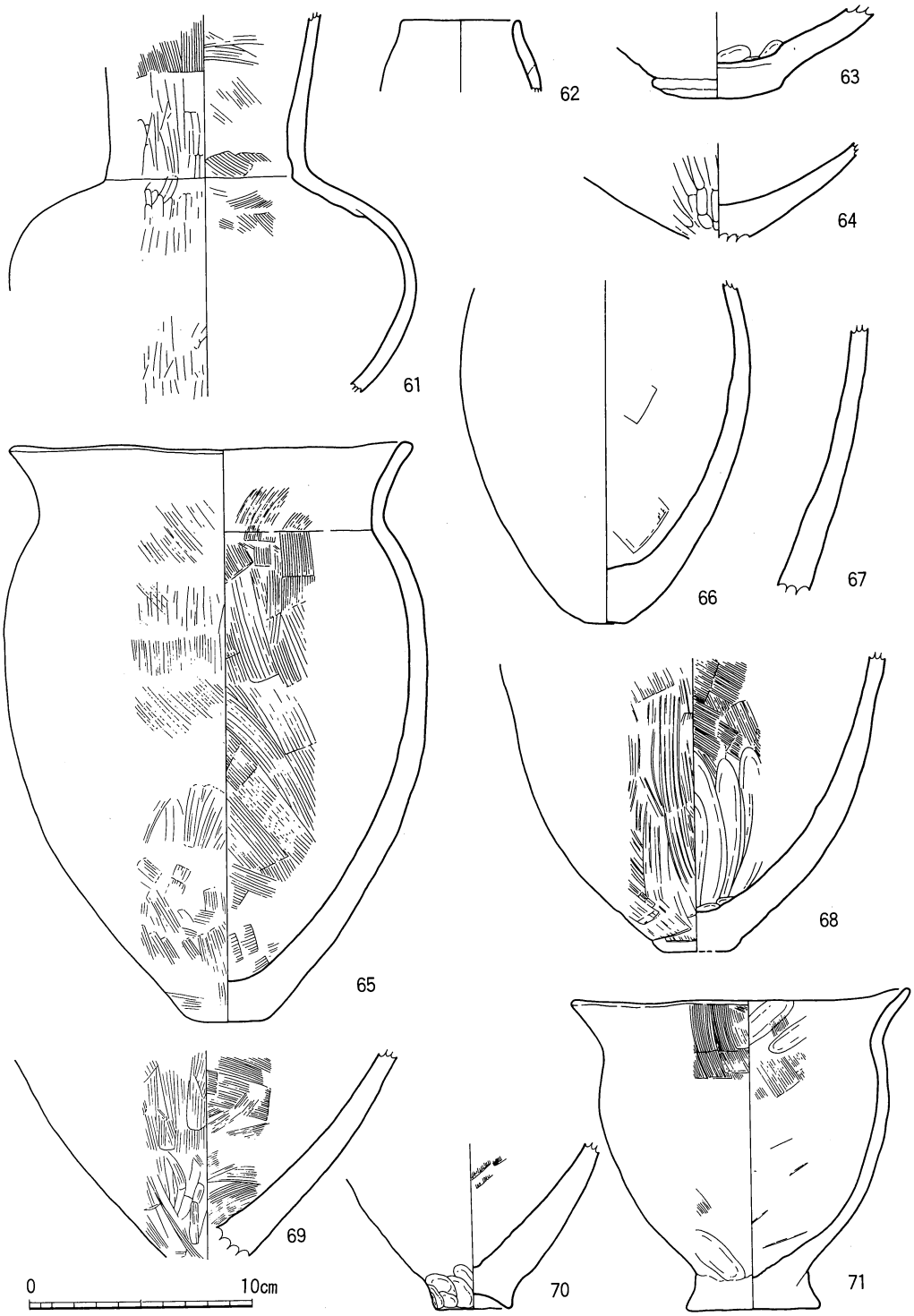
第30図　SA－6　実測図（1／80）　0　2 m

出したが検出面からの深さは数cmで、遺物は78の高坏の脚部が一点のみ出土した（第32図）。若干脹らみを持ち上下に坏部とさらに広がる脚下部が付くと思われる。

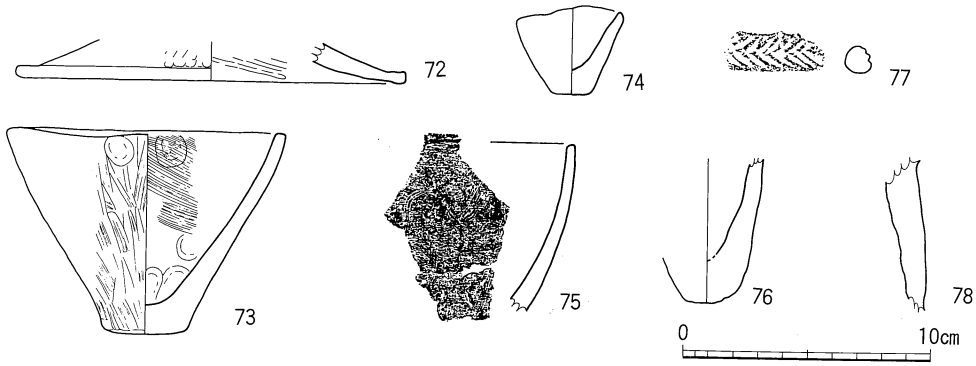
SA 9（第34図）

c－2・3、d－2・3区で検出された。付近にはアカホヤの堆積は見られず、表土下に第Ⅳ層が表れた。土色での確認検出が困難で、土器類の集中的出土と降雨後の乾き具合の違いで確認した。長軸6.12m、短軸5.72mで深さ36cmを計る。4本柱の方形住居址である。中央部西寄りの床面が焼けて赤く変色していた。検出した住居址のうち最も尾根に近い傾斜地に位置し、床面も約30cmのレベル差を以て傾斜していた。

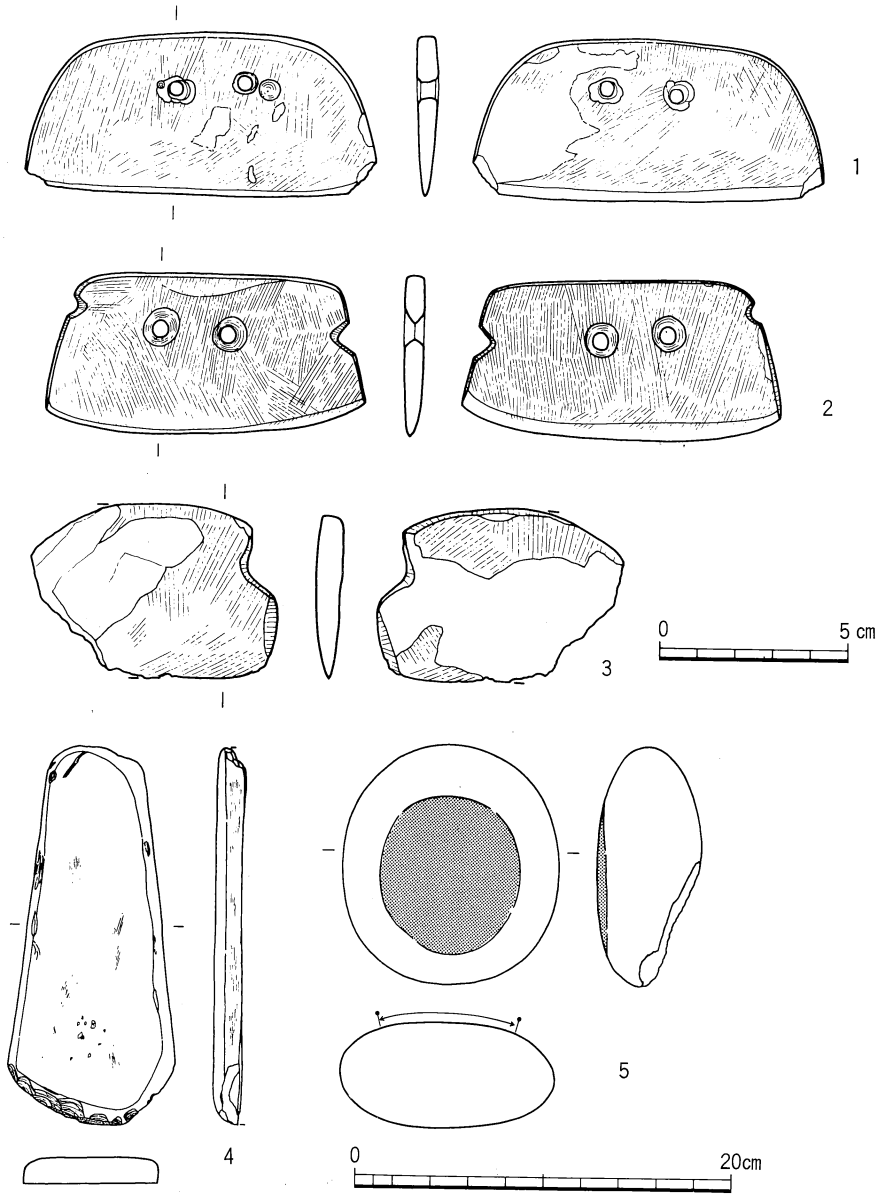
遺物は、埋土中程から上層で出土している（第35図）。甕は口径あるいは胴上部が最大径となるもので、頸部に稜をもつもの（80～82）と緩やかに延びるもの（83）がある。底部は平底あるいは若干上げ底気味の平底である。86は一度屈曲し外反しながら延びる高坏の坏部で、ナデ調整である。87は横方向のハケ目が見られる脚部でどの器種に付くのかは不明である。88は丁寧なミガキが見られる鉢で、円盤状の底部を持つ。



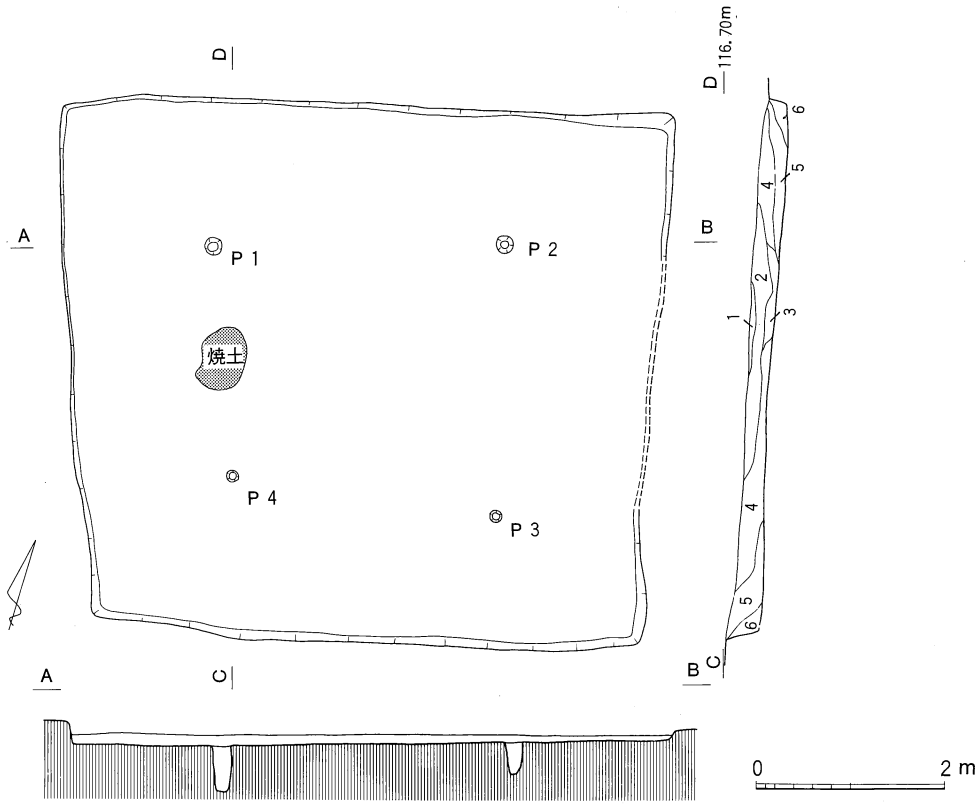
第31図　**SA－6　出土土器実測図（1／3）**



第32図　SA－6・SA－7　出土土器実測図（1／3）　（72～77→SA－6　78→SA－7）



第33図　SA－6　出土石器実測図（1～3→1／2，4・5→1／4）

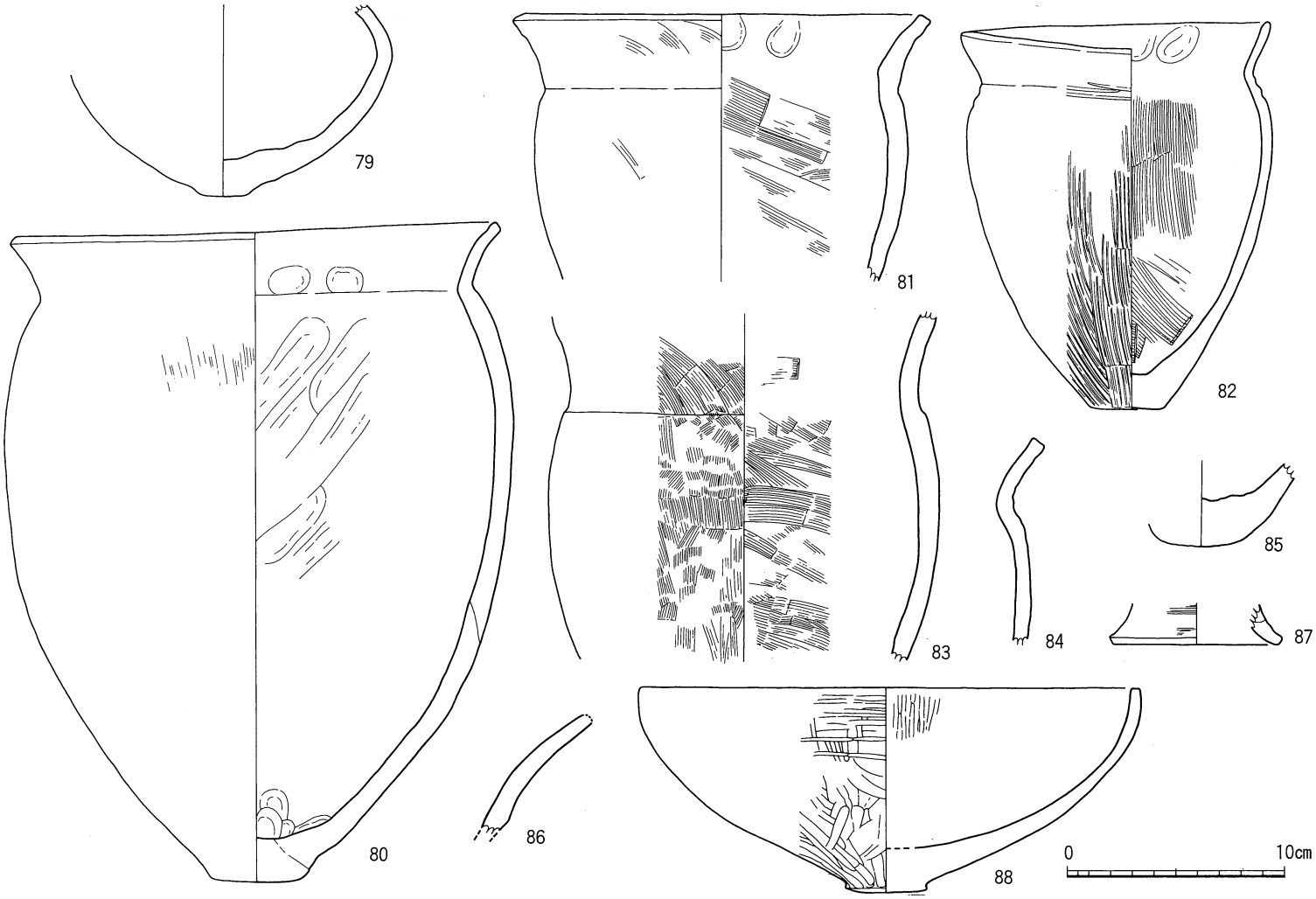


第34図　**SA－9　実測図（1／80）**

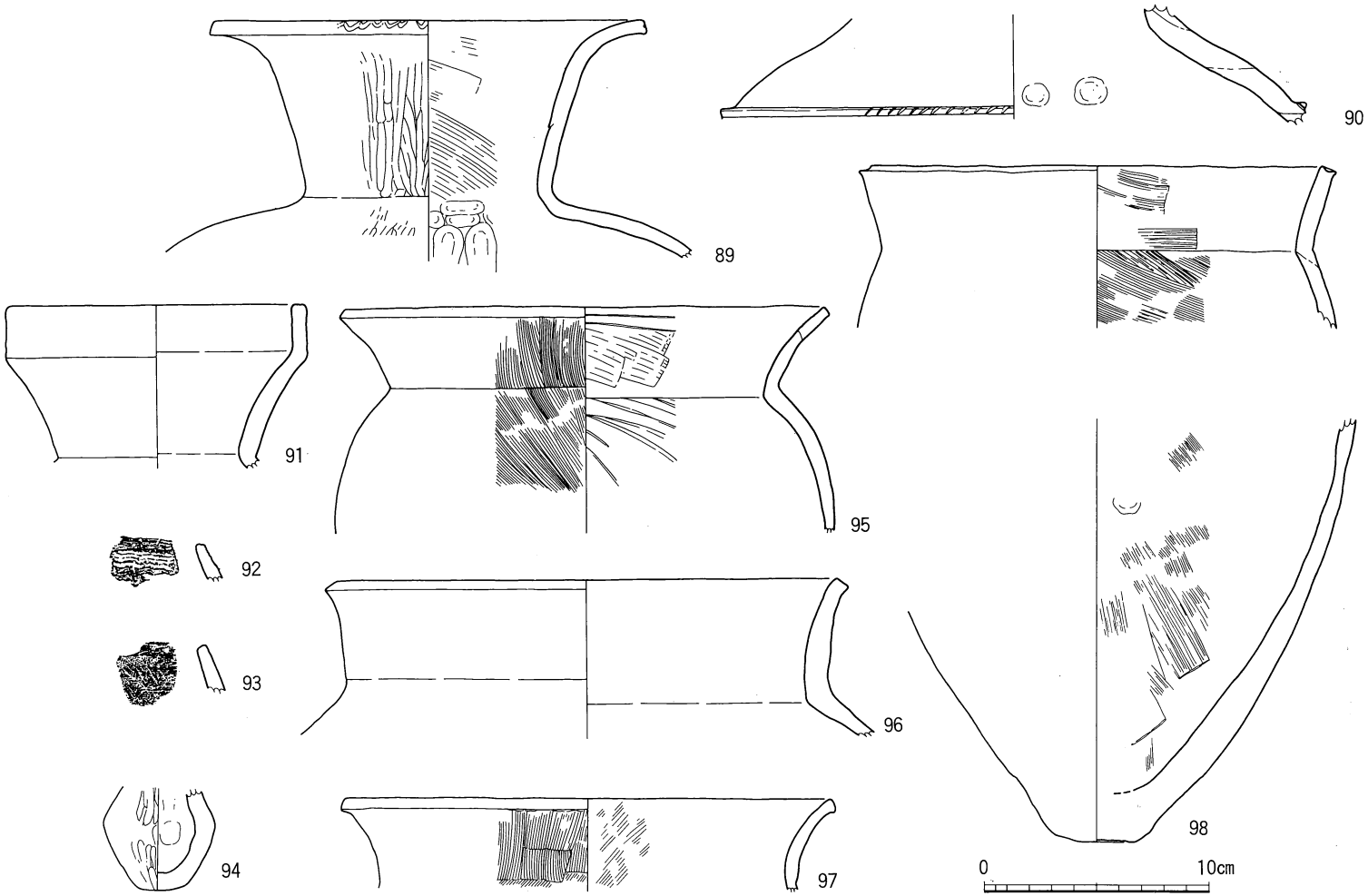
弥生時代住居址一覧表

（　）内数値は推定

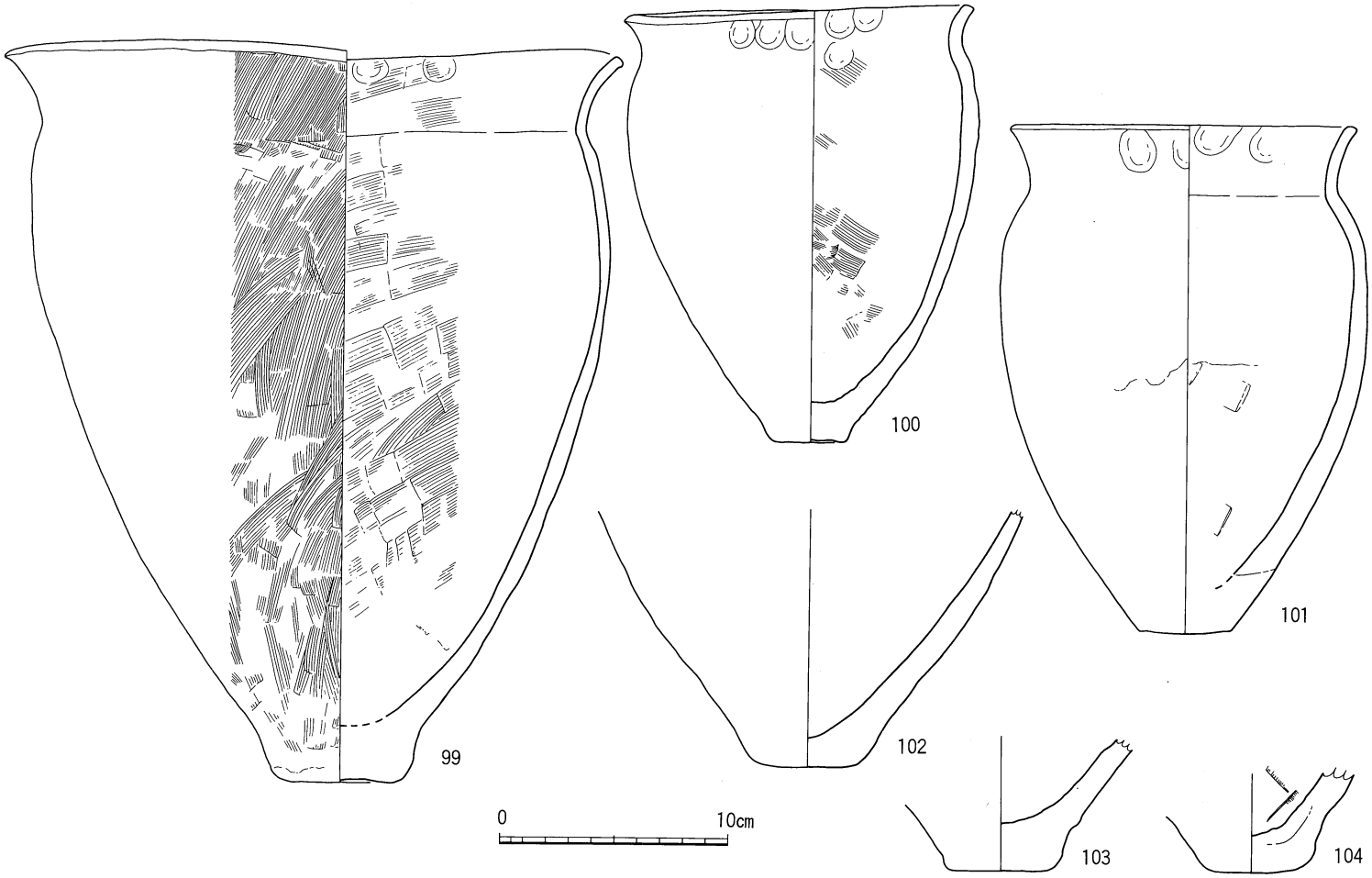
住居番号	平面形	主柱数	規模 長軸×短軸×深さ（m）	床面積（m²）	出土遺跡・備考
SA1	方形 張り出し有	－	4.89×4.30×0.14	(17.2)	
SA2	方形	4	5.85×5.72×0.34	32.1	杓子状土製品，石包丁 磨石2，石皿2
SA3	方形 張り出し有	4	6.55×6.30×0.37	30.9	焼土
			4.88×4.64×0.37	22.6	
SA4	方形	4	(4.50)×(4.45)×0.25	(19.1)	
SA5	方形	－	(3.40)×－×(0.13)	－	
SA6	方形	4	6.58×6.18×0.50	38.4	石包丁3，磨石，砥石
SA7	方形	－	－×－×－	－	
SA8	方形 張り出し有	－	7.40×6.95×0.35	51.0	土壙
SA9	方形	4	6.12×5.72×0.36	34.1	焼土
SA10	方形	－	(6.60)×(6.05)×(0.12)	(38.7)	



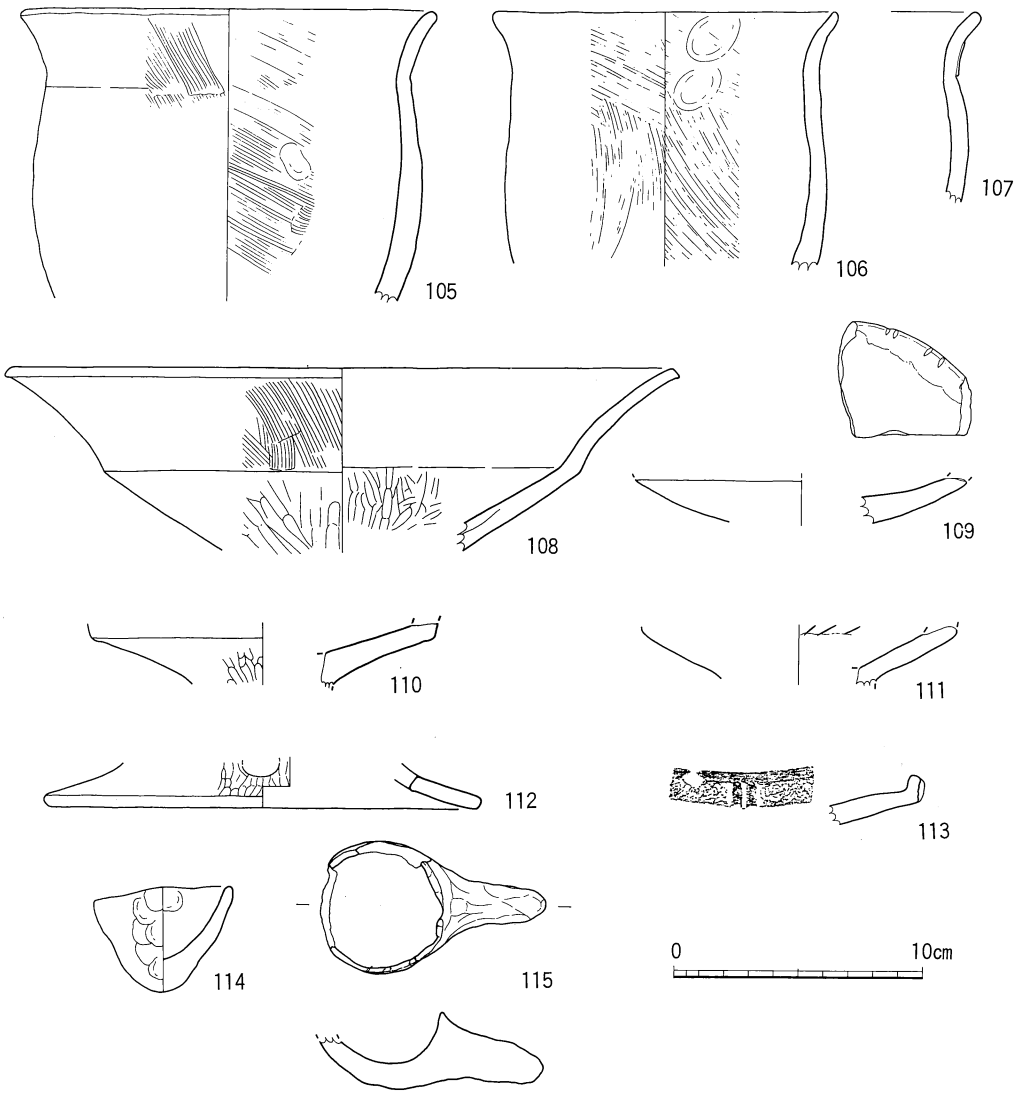
第35図　**SA－9　出土土器実測図（1／3）**



第36図　**遺構外出土弥生土器実測図(1)（1／3）**



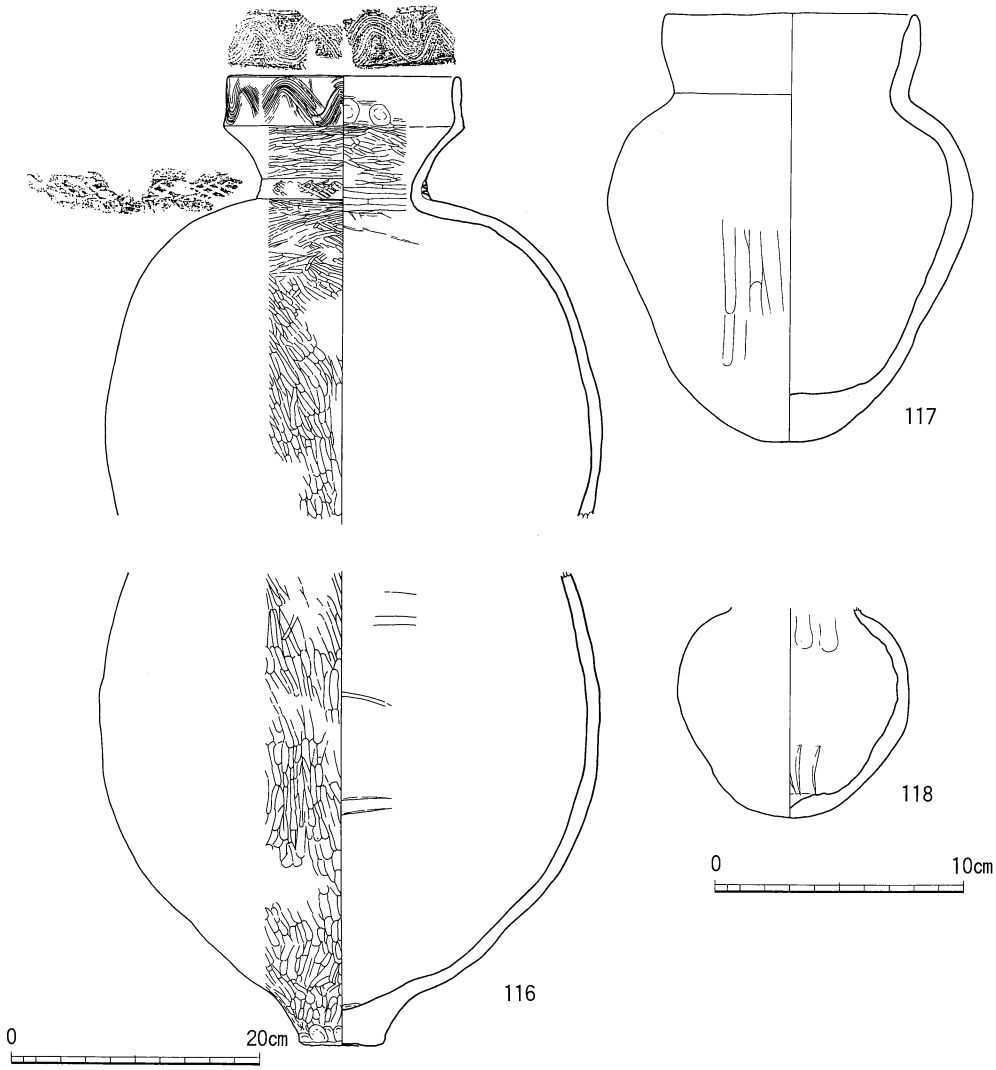
第37図　**遺構外出土弥生土器実測図(2)（1／3）**



第38図　**遺構外出土弥生土器実測図(3)（1／3）**

遺構外出土の遺物（第36～40図）

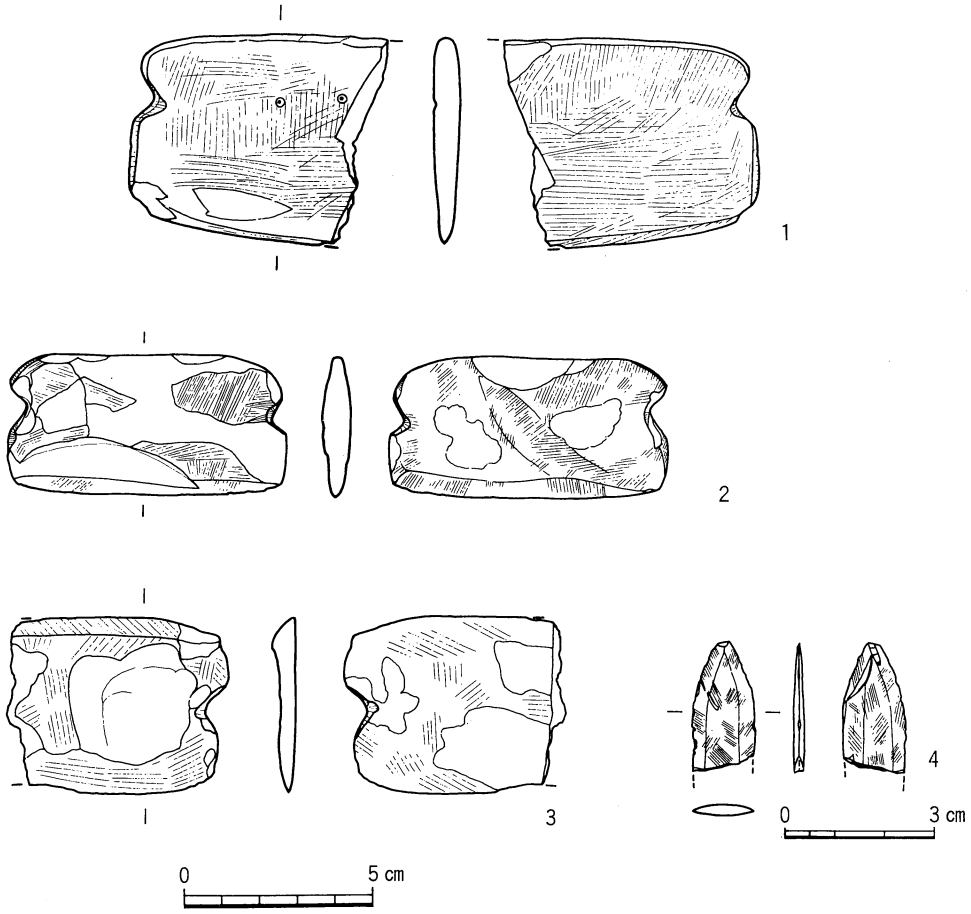
89は胴部から頸部にかけて屈曲したプロポーションと大きく外湾する口縁を持ち、口唇部には鋸歯文が施される。ミガキ、ハケ目調整である。90は肩部に刻目突帯を持つ。92・93は無頸壷で櫛描波状文を持つ。甕形土器は頸部がく字形に屈曲するもの（95）、口縁部があまり外反しないもの（96）、頸部のくびれが明瞭でなく胴部があまり張らないもの（106・107）、口唇部がく字形にくぼむもの（98）などが見られる。底部は平底と若干の上げ底が見られる。高坏は坏部が屈曲後大きく外反するものが見られ（108）、屈曲部で割れたものの中には刻みが見られる（109・111）。脚部には円形の透かし孔が見られる（112）。113は、櫛描波状文上に２本の縦の粘土紐が貼り付



第39図　**B区出土弥生土器実測図（116→1／6，117・118→1／3）**

けられる。器台と考えるが装飾高坏の可能性もある。B区からは壷形土器3点が出土している。116は大型の複合口縁壷で、拡張部に櫛描波状文、頸部に刻目突帯が見られる。器面は丁寧なミガキ調整である。117・118は丸底に近い平底である。

石器には石包丁と磨製石鏃が見られた。1・2は緑色凝灰岩、3は弱い熱変成を受けた頁岩である。1の片面には穿孔を思わせる痕跡が見られる。2・3は剝離が著しい。4は緑色凝灰岩を丁寧に研磨し細身の柳葉形に仕上げている。



第40図　**遺構外出土石器実測図（1～3→1／2，4→2／3）**

弥生土器観察表(1)

図番号	出土地点	器種部位	法量（cm）			調整・手法ほか		色調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
1	ＳＡ１	壷・口縁部	(14.1)	－	－	櫛描波状文	横ナデ	橙 褐灰	褐灰 にぶい橙	1.5㎜程の砂粒
2	〃	甕・底部	－	－	－	ナデ	斜ハケ目，スス付着	浅黄橙 灰褐	にぶい橙	4㎜程の砂粒
3	〃	〃・－	－	－	－	ナデ	横ナデ，ハケ目	橙	にぶい橙 褐灰	2～4㎜の砂粒
4	〃	〃・－	－	－	－	ミガキ	ナデ	橙 にぶい褐	橙	2～5㎜の砂粒
5	〃	〃・－	－	－	－	ナデ	ナデ，指おさえ	橙	橙	5㎜程の砂粒
6	ＳＡ２	壷・ほぼ完形	13.7	(4.1)	12.9	横ナデ，縦・斜ミガキ，ケズリ	縦ミガキ，横ハケ目，ナデ	にぶい黄橙 浅黄	にぶい黄橙 にぶい黄	1～4㎜の砂粒多
7	〃	〃・〃	12.0	0.7	16.6	櫛描波状文，縦ミガキ，スス付着	ナデ，斜ミガキ，指おさえ，剝離	橙 明赤褐	橙	3㎜以下の砂粒多
8	〃	〃・完形	11.2	1.7	23.2	縦ミガキ	横ナデ，炭化物付着	浅黄橙 明黄褐	灰白	1～2㎜の砂粒，黒色で光る砂粒
9	〃	〃・底部	－	1.0	－	ケズリ後ナデ，底面ナデ	ナデ	にぶい橙 橙	にぶい橙 黄灰	0.5㎜以下の黒色で光る砂粒少 1～4㎜の砂粒
10	〃	〃・口縁部	－	－	－	櫛描波状文，横ナデ，ナデ，縦ハケ目	横ナデ，指おさえ	浅黄橙	浅黄橙	1～6㎜の砂粒
11	〃	〃・底部	－	2.8	－	縦ミガキ後一部横ナデ，底面ナデ，スス付着	ナデ，指おさえ，スス付着	淡黄 灰黄	浅黄	2～5㎜の砂粒
12	〃	〃・－	－	－	－	櫛描波状文，ナデ，ケズリ	ナデ，指おさえ	橙	橙	微細～4㎜の砂粒
13	〃	〃・口縁～底部	－	2.6	(11.2)	ナデ，黒塗り	ナデ，指おさえ，黒塗り	浅黄橙	浅黄橙	0.5～4㎜の砂粒
14	〃	〃・頸部	－	－	－	ナデ，スス付着	ナデ，横ナデ	にぶい黄橙	灰	0.5㎜以下の黒色で光る砂粒 1～3㎜の砂粒
15	〃	〃・胴～底部	－	(2.6)	－	ハケ目後ナデ，スス付着	斜ハケ目，スス付着	橙	橙	2～5㎜の砂粒
16	〃	〃・－	－	－	－	ナデ，スス付着，線刻か？	ナデ	橙 暗赤灰	橙	4㎜程の砂粒
17	〃	〃・口縁～頸部	(19.9)	－	－	ナデ，スス付着	ナデ	橙	にぶい橙	4～8㎜の砂粒
18	〃	〃・〃	－	－	－	横ナデ，ナデ	横ナデ，ナデ	橙	橙	微細～5㎜の砂粒
19	〃	〃・口縁～胴部	(25.2)	－	－	ナデ，スス付着	ナデ	橙	橙 明黄褐	5㎜程の砂粒
20	〃	〃・〃	24.9	－	－	横ナデ，縦ハケ目，スス多量付着	ナデ，斜・横ハケ目後ナデ	橙 浅黄橙	橙 にぶい黄橙	1㎜以下の黒色で光る砂粒 2～5㎜の砂粒
21	〃	〃・〃	－	－	－	横ナデ	ナデ	にぶい橙 にぶい赤褐	橙	2～8㎜の砂粒
22	〃	〃・口縁～頸部	－	－	－	横ナデ	横ナデ	橙	黄橙	3～4㎜の砂粒
23	〃	〃・口縁部	－	－	－	横ナデ	横ナデ	橙	橙	3㎜程の砂粒
24	〃	〃・〃	－	－	－	横ナデ	横ナデ	橙	橙	1.5㎜程の砂粒
25	〃	〃・〃	－	－	－	ナデ，スス多量付着	ヨコナデ，横ハケ目	にぶい黄橙	浅黄	3～4㎜の砂粒
26	〃	甕・ほぼ完形	18.7	3.5	20.8	ナデ，ハケ目，指おさえ，スス付着	ナデ（土具の端却痕）	にぶい黄橙	明黄褐 灰黄褐	3～8㎜の小礫
27	〃	〃・半完形	(14.2)	2.4	14.5	ナデ，ケズリ，スス付着	ナデ	にぶい黄橙	橙	1～6㎜の砂粒
28	〃	〃・口縁部	－	－	－	ナデ，ハケ目，スス付着	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2㎜程の砂粒
29	〃	鉢・口縁～胴部	－	－	－	ナデ	斜ハケ目，ナデ	浅黄橙 浅黄	灰白	2～6㎜の小礫多
30	〃	杓子状土製品	－	－	－	手づくね	－	にぶい橙	にぶい橙	微細～4㎜の砂粒
31	ＳＡ３	壷・口縁～胴部	11.9	－	－	ミガキ	ミガキ，ナデ，指おさえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の砂粒少
32	〃	〃・頸～胴部	－	－	－	ミガキ，スス付着	ナデ，指おさえ	橙	にぶい褐	4㎜以下の砂粒少
33	〃	〃・口縁部	(7.5)	－	－	櫛描波状文，横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の砂粒少
34	〃	〃・〃	－	－	－	櫛描波状文，横ナデ	横ナデ	橙	橙	5㎜以下の砂粒少
35	〃	〃・〃	－	－	－	櫛描波状文，ナデ，ミガキ	横ナデ	橙	橙	3㎜以下の砂粒少
36	〃	〃・底部	－	1.4	－	ナデ（工具端部痕）	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の砂粒少
37	〃	〃・〃	－	2.1	－	ケズリ，ナデ	ナデ，スス付着	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の砂粒多
38	〃	甕・口縁～頸部	22.4	－	－	横ナデ，ナデ，スス付着	ナデ・指押さえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の砂粒少
39	〃	〃・〃	－	－	－	ナデ，スス付着	斜・横ハケ目	灰褐	浅黄橙	3㎜以下の砂粒少
40	ＳＡ３	甕・口縁部	－	－	－	ナデ，斜ハケ目，スス付着	ナデ	淡黄	淡黄	5㎜以下の砂粒少
41	ＳＡ４	甕・頸部	－	－	－	横ミガキ，スス付着	横ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜程の黒色で光る砂粒 2～4㎜の砂粒
42	〃	鉢・口縁部	－	－	－	横ナデ，スス付着	ナデ	橙	橙	1～2㎜の砂粒

※　部位については胴部のみは記載していない。

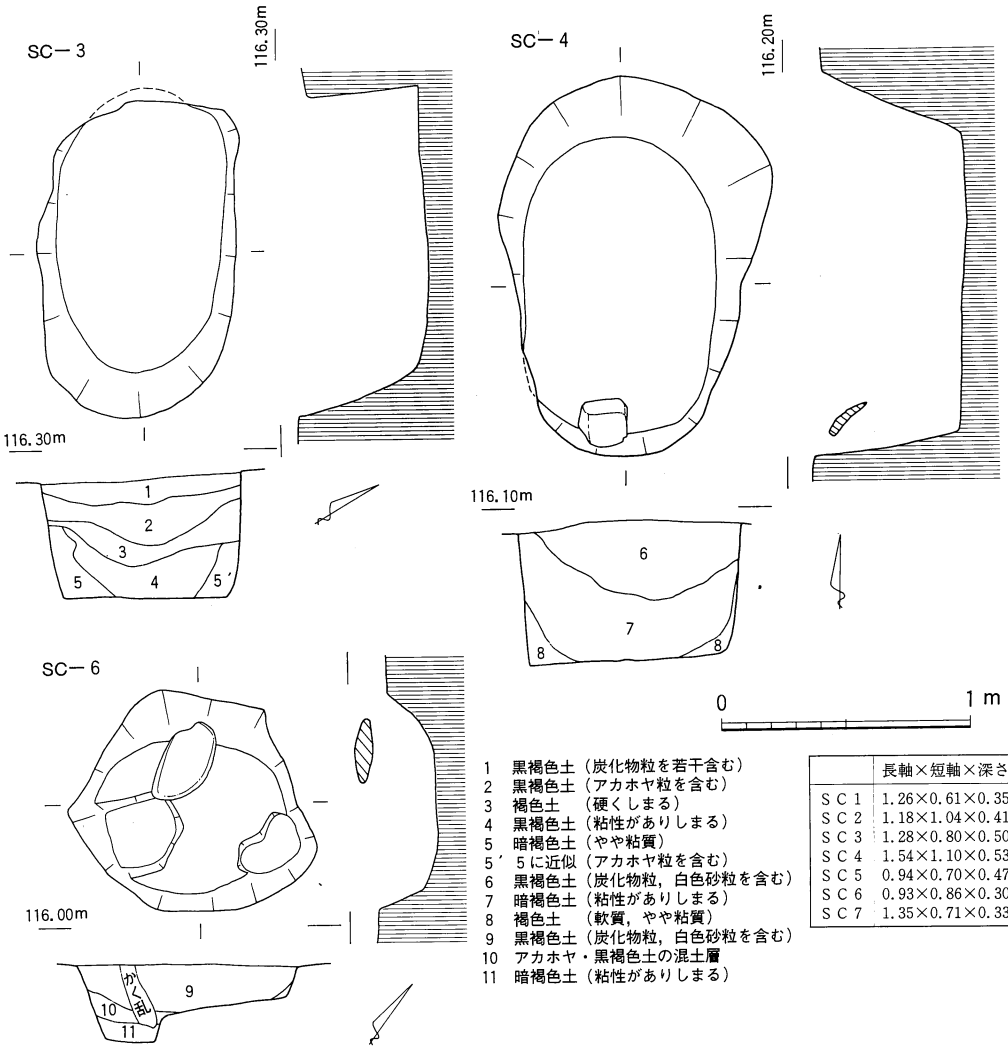
弥生土器観察表(2)

図番号	出土地点	器種部位	法量（cm）			調整・手法ほか		色調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
43	ＳＡ４	鉢・口縁部	(20.2)	－	－	ナデ，ススト付着	横ナデ	橙	橙 にぶい褐	1～2㎜の砂粒
44	ＳＡ８	壷・口縁～頸部	17.9	－	－	櫛描波状文，横ナデ，ナデ	横ナデ	明赤褐 浅黄橙	黒	1㎜程の黒色で光る砂粒 0.5～3㎜の砂粒
45	〃	〃・ －	－	－	－	縦ミガキ，ススト付着	縦ミガキ，ススト付着	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	1㎜程の黒色で光る砂粒 2～5㎜の砂粒
46	〃	〃・胴～底部	－	1.4	－	縦ミガキ	縦ミガキ	橙	橙	0.5～3㎜の砂粒
47	〃	〃・ 〃	－	1.6	－	縦ミガキ	ナデ	橙	橙 褐 灰	1～2㎜の砂粒
48	〃	〃・ほぼ完形	(7.2)	1.7	7.8	櫛描波状文，ナデ	ナデ，ススト付着	黄橙 にぶい黄橙	にぶい 黄 橙	0.5～4㎜の砂粒
49	〃	甕・口縁～胴部	(25.2)	－	－	横ナデ，ナデ，ススト多量付着	ナデ，斜ハケ目，指おさえ	にぶい 黄 橙	橙	3㎜以下の砂粒少
50	〃	〃・口縁部	(24.0)	－	－	横ナデ，ナデ，ススト付着	横ナデ，ナデ	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	1～3㎜の砂粒
51	〃	〃・ 〃	(20.5)	－	－	横ナデ，ナデ，ススト付着	横ナデ	橙 にぶい黄橙	浅黄橙 橙	0.5～2㎜の砂粒
52	〃	〃・ 〃	－	－	－	横ナデ，ナデ，ススト付着	横ナデ	橙	にぶい橙	1～3㎜の砂粒
53	〃	〃・口縁～胴部	－	－	－	横ナデ，横斜ハケ目 指おさえ，ススト付着	横ハケ目，ナデ，指おさえ	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	2～5㎜の砂粒
54	〃	〃・ 〃	－	－	－	横ナデ，縦斜ミガキ，ケズリ ススト多量付着	横ナデ，縦ミガキ ススト付着	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	1～6㎜の砂粒多
55	〃	〃・ －	－	－	－	ナデ，ススト多量付着	ナデ，ススト付着	にぶい黄 橙	にぶい橙	5㎜以下の砂粒少
56	〃	〃・頸～胴部	－	－	－	ナデ，ススト付着	ナデ・ススト付着	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい橙	2～6㎜の砂粒
57	〃	〃・胴～底部	－	2.2	－	斜ミガキ，ナデ，ススト付着	ナデ	橙 にぶい黄橙	浅黄橙	1～3㎜の砂粒多
58	〃	〃・底 部	－	2.4	－	縦ミガキ，ススト付着	ナデ	にぶい 橙	にぶい 黄 橙	1～4㎜の砂粒多
59	〃	〃・ 〃	－	(2.7)	－	ナデ	ナデ	にぶい 黄 橙	橙	0.5～2㎜の砂粒
60	〃	〃・口縁～胴部	－	－	－	ナデ，ススト付着，輪積痕	ナデ，ススト付着	にぶい 黄 橙	にぶい 黄 橙	0.5～1㎜の黒色で光る砂粒 0.5～3㎜の砂粒
61	ＳＡ６	壷・頸～胴部	－	－	－	縦ハケ目，縦ミガキ，ススト付着	斜ハケ目，ナデ，指おさえ	浅黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙 灰黄褐	1～7㎜の砂粒
62	〃	〃・口縁部	(5.2)	－	－	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	0.5～2㎜の砂粒
63	〃	〃・底 部	－	5.7	－	ナデ，ススト付着	ナデ，指おさえ，爪痕，赤色顔料付着か？	浅黄橙	浅黄橙	0.5㎜以下の黒色で光る砂粒 1.5～4㎜の砂粒
64	〃	〃・ 〃	－	－	－	縦ミガキ	ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	灰 黄	1㎜以下の黒色で光る砂粒 1～4㎜の砂粒
65	〃	甕・完 形	17.5	3.8	26.0	ナデ，ススト付着	ナデ，縦斜ハケ目，ススト付着	浅黄橙	浅黄橙	1～5㎜の砂粒
66	〃	〃・頸～底部	－	1.7	－	ナデ（工具端部痕），ススト付着	ナデ（工具端部痕）	浅黄橙 灰白	橙 灰 黄	3～9㎜の小礫多
67	〃	〃・ －	－	－	－	斜・縦ハケ目，ススト付着	ナデ，ススト付着	にぶい 黄 橙	灰 黄	1㎜以下の黒色で光る砂粒 1～4㎜の砂粒
68	〃	〃・胴～底部	－	(3.0)	－	ナデ，ススト付着	斜ハケ目，ケズリ，ススト付着	にぶい橙 暗灰黄	黒	1㎜程の黒色で光る砂粒 2～4㎜の砂粒
69	〃	〃・ －	－	－	－	ミガキ，ハケ目	斜ハケ目	にぶい 黄 橙	橙	2～6㎜の砂粒多
70	〃	〃・底 部	－	3.2	－	ナデ，指おさえ，ススト付着	斜ハケ目，ナデ，ススト付着	にぶい 黄 橙	淡 黄	0.5㎜以下の黒色で光る砂粒 2～6㎜の砂粒
71	〃	〃・ほぼ完形	(14.9)	(5.8)	14.2	ナデ，縦ハケ目，指おさえ，ススト付着	斜ハケ目，ナデ ススト付着，指おさえ	淡 黄 浅 黄	淡 黄	1㎜程の黒色で光る砂粒 2～6㎜の砂粒
72	〃	高坏・脚部	－	(15.6)	－	ミガキ，ナデ	ナデ，ミガキ	淡 黄	淡 黄	0.5～3㎜の砂粒
73	〃	鉢・口縁～底部	10.5	3.3	8.3	ナデ，ケズリ，指おさえ	斜ハケ目，指おさえ	浅黄橙	浅黄橙	1～3㎜の黒色で光る砂粒，砂粒
74	〃	〃・ほぼ完形	4.0	1.6	3.6	ナデ	ナデ	暗灰黄	にぶい 黄	1～3㎜の砂粒
75	〃	〃・口縁～胴部	－	－	－	ナデ，櫛描文，ススト付着	横ナデ，ナデ	灰 白	浅黄橙	3～5㎜の小礫
76	〃	〃・底 部	－	1.3	－	ナデ	ナデ	にぶい 橙	橙	0.5～3㎜の砂粒
77	〃	一・突 帯	－	－	－	ナデ，刻み	－	にぶい 橙	橙	1～4㎜の砂粒
78	ＳＡ７	高坏・脚部	－	－	－	ナデ	ナデ	灰 白	褐 白	1～1.5㎜の砂粒
79	ＳＡ９	壷・胴～底部	－	2.4	－	ナデ，ススト付着	ナデ，ススト付着	浅黄橙 にぶい褐	浅黄橙 褐	2～8㎜の黒色で光る砂粒，砂粒
80	ＳＡ９	甕・ほぼ完形	22.1	4.2	30.2	横ナデ，縦ハケ目，ススト付着	横ナデ，ハケ目，指おさえ	淡 黄	淡 黄	1～3㎜の黒色で光る砂粒 2～5㎜の砂粒
81	〃	〃・口縁～胴部	(18.2)	－	－	ナデ，ケズリ，ススト付着	横ナデ，指おさえ 斜ハケ目，ススト付着	にぶい 褐	にぶい 橙	2㎜以下の砂粒少
82	〃	〃・口縁～底部	(13.9)	3.4	17.8	ナデ，ケズリ	ナデ，指おさえ，縦斜ハケ目	橙 浅黄橙	浅黄橙 灰黄褐	2～5㎜の砂粒多
83	〃	〃・頸～胴部	－	－	－	斜・縦ハケ目，ススト付着	ナデ，斜ハケ目，ススト付着	浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄褐	2～5㎜の砂粒
84	〃	〃・口縁～胴部	－	－	－	横ナデ，縦・斜ハケ目，ススト付着	斜ハケ目，ススト付着	灰黄褐	褐 灰	2㎜以下の砂粒少

※ 60は土師器

弥生土器観察表(3)

図番号	出土地点	器種部位	法量（cm）			調整・手法ほか		色調		胎土の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
85	ＳＡ９	甕・底部	—	3.5	—	ナデ，スス付着	ナデ，スス付着	淡黄	灰	1㎜以下の黒色で光る砂粒 2～5㎜の砂粒
86	〃	高坏・坏部	—	—	—	ナデ	ナデ	淡黄	浅黄橙	1～2㎜の黒色で光る砂粒 2㎜以下の砂粒少
87	〃	脚部	—	(7.6)	—	横ハケ目	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の砂粒少
88	〃	鉢・口縁～底部	(22.1)	3.8	9.4	横ナデ，縦・横ミガキ，スス付着	縦ミガキ，スス付着	淡黄	淡黄	1㎜程の黒色で光る砂粒 2～3㎜の砂粒
89	b－3 c－3	壷・口縁～頸部	(19.0)	—	—	口唇部に鋸歯文，ミガキ	斜ハケ目，指おさえ	浅黄橙	淡黄	0.5～2㎜の砂粒
90	c－3	〃・頸～肩部	—	—	—	ナデ，ハケ目，刻み目突帯	ナデ，指おさえ	淡黄	淡黄	3㎜以下の黒色で光る砂粒，砂粒
91	c－3	〃・口縁部	(12.1)	—	—	ナデ	ナデ	橙 浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	3～5㎜の小礫
92	b…3	〃・〃	—	—	—	横ナデ，櫛描波状文	ナデ	にぶい橙	橙	2㎜程の砂粒
93		〃・〃	—	—	—	横ナデ，櫛描波状文	横ナデ	淡黄	灰黄	1～3㎜の砂粒
94		〃・胴～底部	—	2.2	—	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙	0.5～4㎜の砂粒
95	c－1	甕・口縁～胴部	(21.2)	—	—	横ナデ，縦・斜ハケ目，スス付着	横ナデ，斜ハケ目	にぶい橙 浅黄橙	にぶい黄橙	0.5～2㎜の砂粒
96	c－3	〃・口縁～頸部	(22.2)	—	—	横ナデ，スス付着	横ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	3～5㎜の小礫
97	c－3	〃・口縁部	(21.5)	—	—	横ナデ，縦ハケ目	斜ハケ目，ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	0.5～2㎜の砂粒少
98		〃・口縁～底部	(20.0)	3.7	—	ナデ，ケズリ	横・斜ハケ目，ナデ スス付着	浅黄橙	淡黄 灰白	1～2㎜の黒色で光る砂粒 3～5㎜の小礫
99	c－3	〃・ほぼ完形	26.4	5.6	32.5	横ナデ，斜ハケ目，スス付着	横・斜ハケ目，指おさえ	にぶい黄橙 暗灰黄	浅黄橙 褐灰	1.5㎜程の黒色で光る砂粒 2～4㎜の砂粒
100	c－3 d－3	〃・〃	14.5	3.1	19.3	横ナデ，ナデ，指おさえ，スス付着	横ナデ，ナデ 斜ハケ目	淡黄	淡黄	1～3㎜の黒色で光る砂粒，砂粒
101	c－1	〃・〃	(14.4)	4.0	22.3	ナデ，指おさえ，ケズリ，スス付着	横ナデ，指おさえ，ナデ，スス付着	浅黄橙	浅黄橙 淡黄	1～3㎜の黒色で光る砂粒 2～6㎜の砂粒
102	c－3	〃・胴～底部	—	(4.5)	—	ケズリ後ていねいなナデ，スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	1～2㎜の黒色で光る砂粒 2～4㎜の砂粒
103	c－3	〃・〃	—	4.9	—	ケズリ，ナデ	剝離，不明	明黄褐 褐灰	橙 灰褐	1～2㎜の黒色で光る砂粒 2～6㎜の小礫
104	c－3	〃・〃	—	4.1	—	ナデ	ナデ	にぶい橙 橙	灰褐 にぶい褐	1～2㎜の黒色で光る砂粒 3～5㎜の小礫
105	c－3	〃・口縁～胴部	(16.4)	—	—	ナデ，斜ハケ目，スス付着	斜ハケ目，指おさえ	淡黄	褐灰 灰白	1～2㎜の黒色で光る砂粒 0.5～5㎜の砂粒
106	c－3	〃・〃	(13.4)	—	—	ナデ，斜・縦ハケ目，スス付着	斜ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～4㎜の砂粒
107		〃・口縁部	—	—	—	横ナデ，ナデ	ナデ，斜ハケ目	灰黄褐	灰黄褐	3㎜以下の砂粒多
108	c－1	高坏・坏部	(26.7)	—	—	横ナデ，縦ハケ目，縦ミガキ	縦ミガキ	淡黄	淡黄	1㎜程の黒色で光る砂粒 2～3㎜の砂粒
109		〃・〃	—	—	—	ナデ	ナデ，接続面に刻み	浅黄橙	淡黄	1～2㎜の黒色で光る砂粒少 1～3㎜の砂粒多
110		〃・〃	—	—	—	ナデ，横ナデ，縦ミガキ	ナデ	淡黄	灰黄	1～3㎜の黒色で光る砂粒，砂粒
111	e－3	〃・坏部	—	—	—	ナデ	ナデ，接続面に刻み	淡黄	淡黄	2㎜以下の黒色で光る砂粒 2～3㎜の砂粒
112		〃・脚部	—	(17.1)	—	縦ミガキ，穿孔1	ヨコナデ	淡黄	淡黄	0.5㎜程の黒色で光る砂粒 1～2㎜の砂粒少
113		器台	—	—	—	横ナデ，櫛描波状文上に縦の突帯2，縦ミガキ	ヨコナデ，縦ミガキ	淡黄	淡黄	1㎜以下の黒色で光る砂粒少 1～4㎜の砂粒
114		鉢・口縁～底部	—	—	—	手づくね	—	浅黄橙	橙	6㎜以下の砂粒多
115	b－4	杓子状土製品	—	—	—	手づくね	—	橙	橙	1㎜以下の黒色で光る砂粒 2～6㎜の砂粒
116	B	壷・口縁～底部	(17.7)	6.8	—	横ナデ，櫛描波状文，刻み目突帯，横・斜・縦ミガキ	横ナデ，指おさえ，横ミガキ，ヘラ状工具痕	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	2㎜程の黒色で光る砂粒 2～7㎜の砂粒
117	〃	〃・〃	(9.7)	2.4	17.3	ナデ・縦ミガキ・スス付着	横ナデ，スス付着	橙 赤黒	橙 赤黒	2～3㎜の黒色で光る砂粒 2～5㎜の砂粒多
118	〃	〃・頸～底部	—	4.3	—	ナデ，スス付着	横ナデ，ヘラ状工具痕	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	0.5～3㎜の黒色で光る砂粒，砂粒



1　黒褐色土（炭化物粒を若干含む）
2　黒褐色土（アカホヤ粒を含む）
3　褐色土　（硬くしまる）
4　黒褐色土（粘性がありしまる）
5　暗褐色土（やや粘質）
5′　５に近似（アカホヤ粒を含む）
6　黒褐色土（炭化物粒，白色砂粒を含む）
7　暗褐色土（粘性がありしまる）
8　褐色土　（軟質，やや粘質）
9　黒褐色土（炭化物粒，白色砂粒を含む）
10　アカホヤ・黒褐色土の混土層
11　暗褐色土（粘性がありしまる）

	長軸×短軸×深さ	平面形
ＳＣ１	1.26×0.61×0.35	隋 円 形
ＳＣ２	1.18×1.04×0.41	隋 円 形
ＳＣ３	1.28×0.80×0.50	隅丸方形
ＳＣ４	1.54×1.10×0.53	隋 円 形
ＳＣ５	0.94×0.70×0.47	〃
ＳＣ６	0.93×0.86×0.30	不整隋円形
ＳＣ７	1.35×0.71×0.33	隅丸方形

第41図　**土坑実測図(2)（１／30）**

土坑（第41図）

アカホヤ上面で７基の土坑を検出した。平面形は隅丸方形・楕円形で袋状になるものは見られない。ＳＣ４・ＳＣ６には25cm大の偏平な河原石が埋土上層に置かれていた。いずれの土坑からも遺物の出土は見られず、時期・性格ともに不明である。

石器（第42～47図）

石器は遺構内外から数多く出土しているが、弥生時代の竪穴住居址に縄文時代の石器が流れ込んで出土し、また、包含層中にレベル差なく混入しており明確な時期を決定する要素に乏しい。

尖頭状石器

第Ⅳ層から礫群に伴って出土している。やや縦長の二等辺三角形状を呈する。チャート製。

石錐

6はＳＡ１から、7は礫群中からの出土で主要剥離面を残す。チャート製。8は第Ⅱ層からの出土で頁岩製。9はＢ区の表土中から出土している。チャート製。

石匙

ＳＡ２埋土から出土している。やや湾曲した刃部は細かい加工が見られ、一部摂理面・主要剥離面を残す。流紋岩製。

スクレイパー

12は自然面を有する長方形剥片の一側面に加工を施す。流紋岩製。13は自然面を有する厚手の剥片の側面に加工を施す。頁岩製。14は打面を有する半月形の剥片に若干の加工を施す。安山岩製。15は自然面を有する剥片の一部に加工を施す。頁岩製。24・25は片面に自然面を残す剥片の周囲を粗く打ち欠いたものである。硬質の砂岩製。26・27も同じく円形のスクレイパーであるが、大型で周囲の加工も大まかな仕上げである。砂岩製。12～15・24・25は礫群中からの、26・27は第Ⅱ層からの出土である。

使用痕を有する剥片

石材には流紋岩⑯、頁岩（17・20～22）、安山岩（18・19）が用いられ、全てに主要剥離面が見られる。16・17・20・21には打面が残り、16・18には自然面が残る。使用部位では、剥片の一側面のもの（16～18）と、両側面あるいは二カ所のもの（19～22）がある。16はＳＡ６埋土から、17は第Ⅱ層から、他は礫群中からの出土である。

石斧

28は長方形の剥片の周囲を粗く成形したものである。砂岩製。29は欠損品であるが、長方形の剥片を両側面から打ち欠き、グリップ状に成形している。砂岩製。共に第Ⅱ層からの出土である。30はＢ区から出土した磨製石斧である。丁寧に全体を研磨しているが、上端部には敲打の痕が見られ、また刃部には刃こぼれが見られる。

礫器

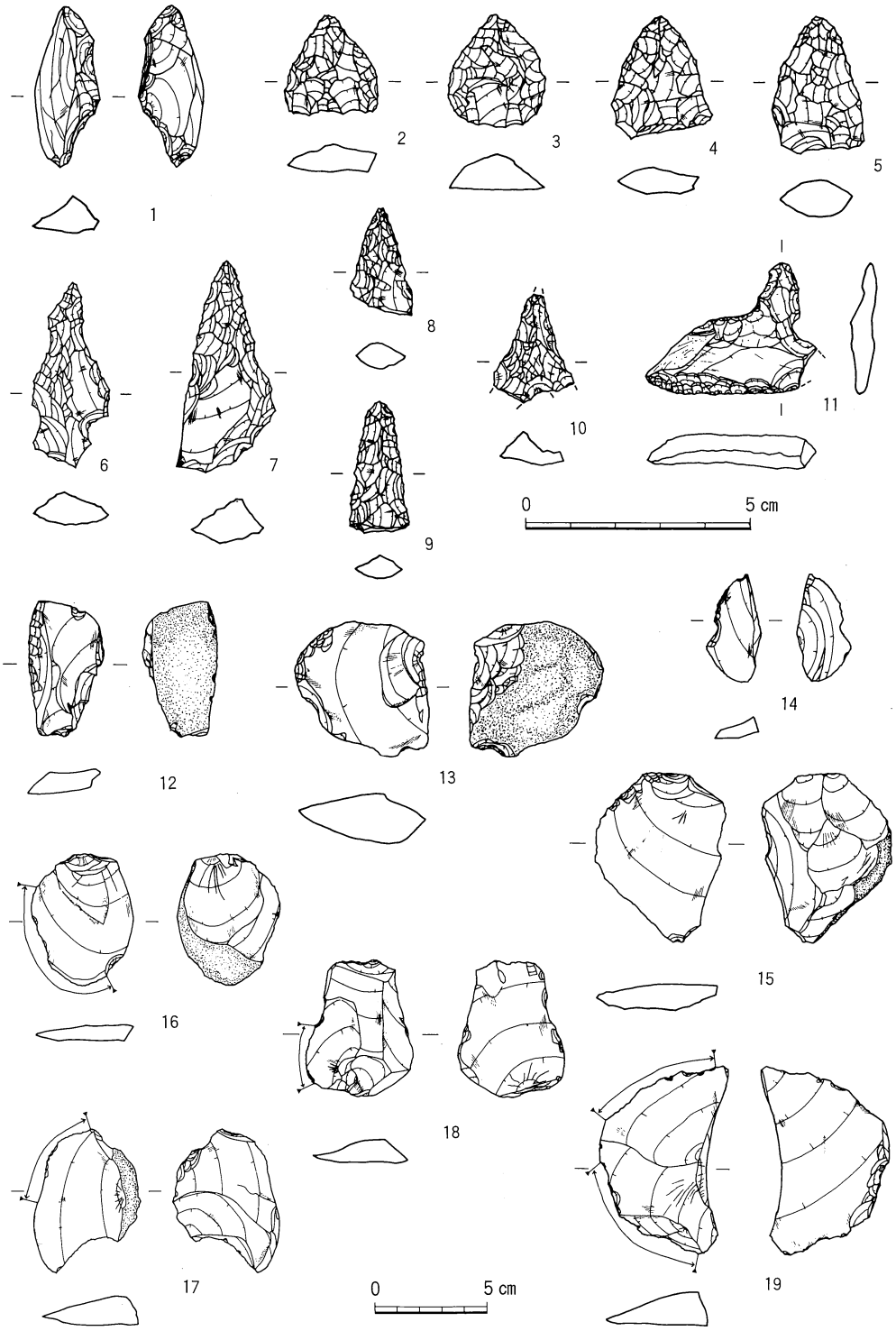
人頭大の砂岩を割って得られた剥片の、自然面を残しながら全周あるいは一部を粗く打ち欠き成形している（34～37）。全て第Ⅱ層からの出土である。

石核

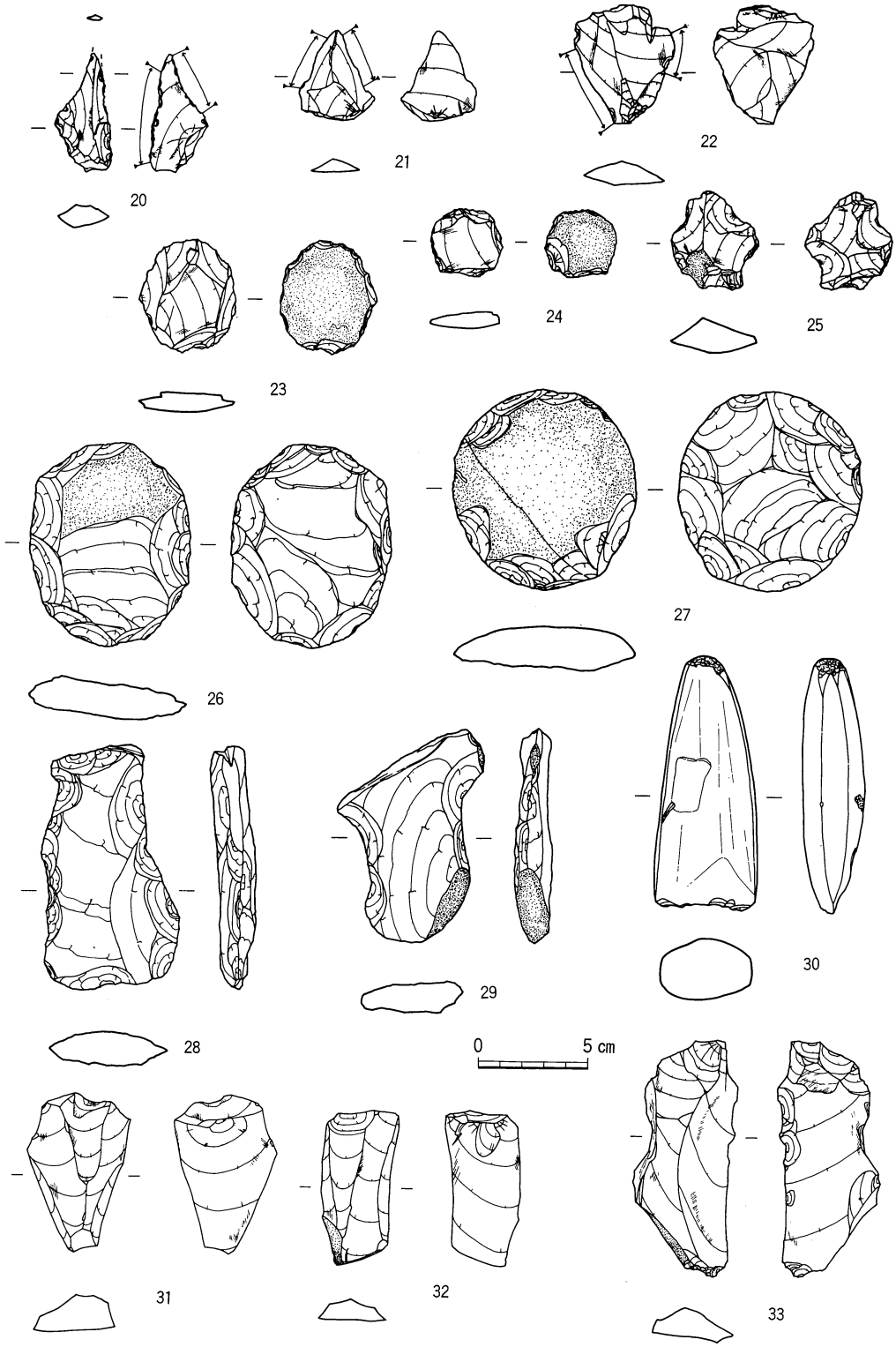
38は数回の打撃で打面を形成し、そこから剥片を取っている。39は打面を転移させながら剥片を取っている。38・39は流紋岩である。

石錘

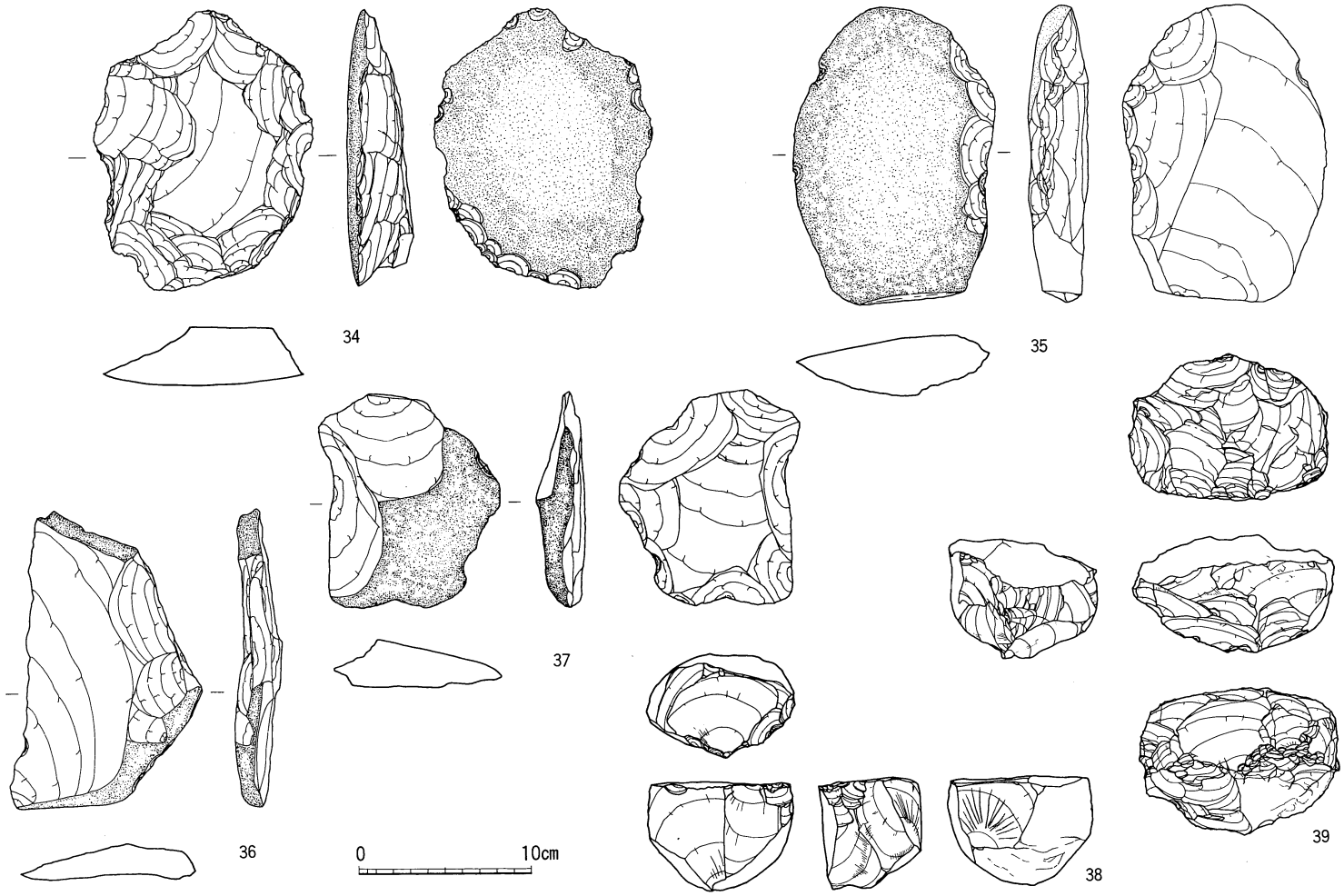
石錘は８点出土した。全て砂岩で長軸を打ち欠いている。40は礫群中から、47はＢ区から、他



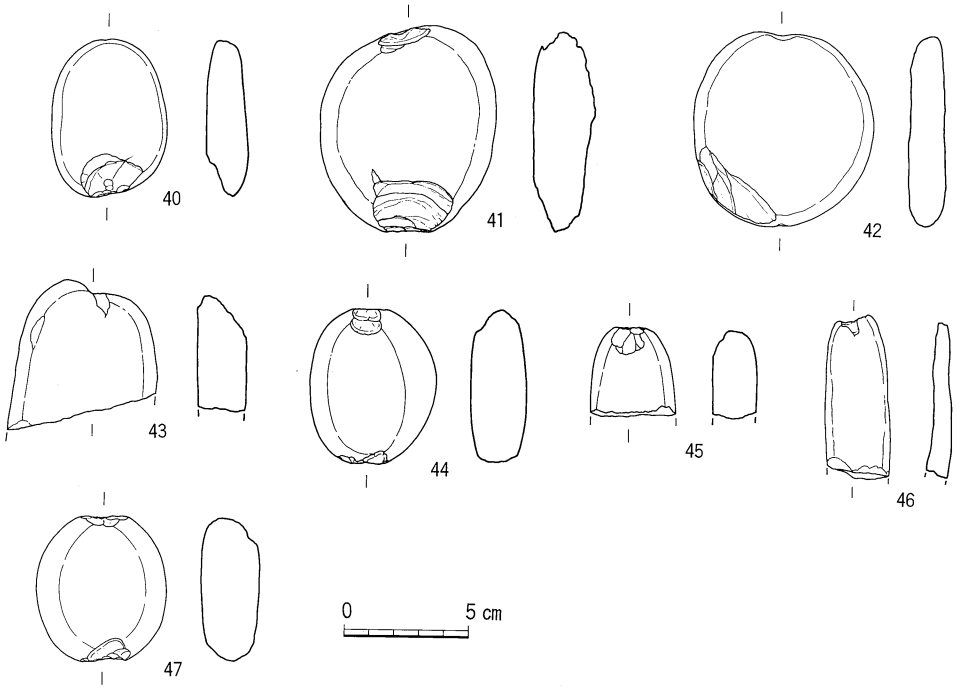
第42図　**石器実測図(1)（1～11→2／3，12～19→1／3）**



第43図　**石器実測図(2)（1／3）**



第44図　**石器実測図(3)（1／4）**



第45図　**石器実測図(4)（1／3）**

は第Ⅱ層から出土している。42は風化のため打ち欠きの痕がはっきりしない。46の石材は砂岩であるが弱い熱変成を受けている。

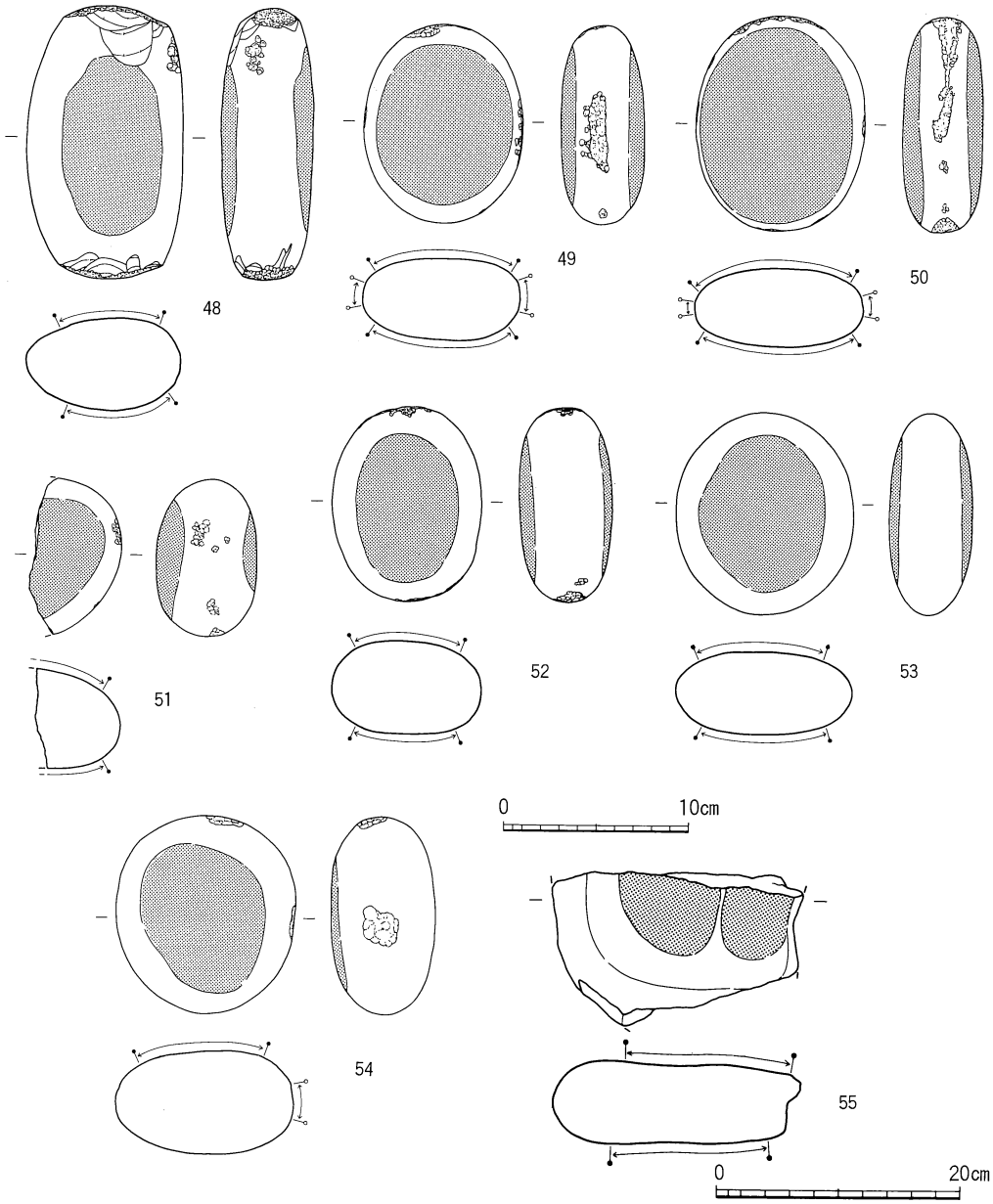
磨石・石皿

磨石は尾鈴山酸性岩と砂岩の二種類が見られた。前者は50～54である。48～52・54は側面に敲打痕を持つ。48～50は礫群中から、51～53は第Ⅱ層から、54はＢ区からの出土である。55の石皿は砂岩で、両面に使用痕が見られる。第Ⅱ層から出土している。

石鏃

石鏃は最も多く出土した石器で、第Ⅱ層、住居址埋土、礫群中から66点出土している。黒燿石８点（そのうち姫島産は１点）、安山岩２点、頁岩２点、砂岩１点で他はチャート製である。このうちチャート製石鏃には特異なものが１点見られた。早期の礫群中からの出土で、二等辺三角形の基部を抉った形状であるが、石鏃作成に通常見られる打ち欠きや研磨等の技法は見られず、刃部にあたる両側面だけを磨っている。このため刃部は鋭利に尖らず、石鏃とすることにも若干の疑問は残る。

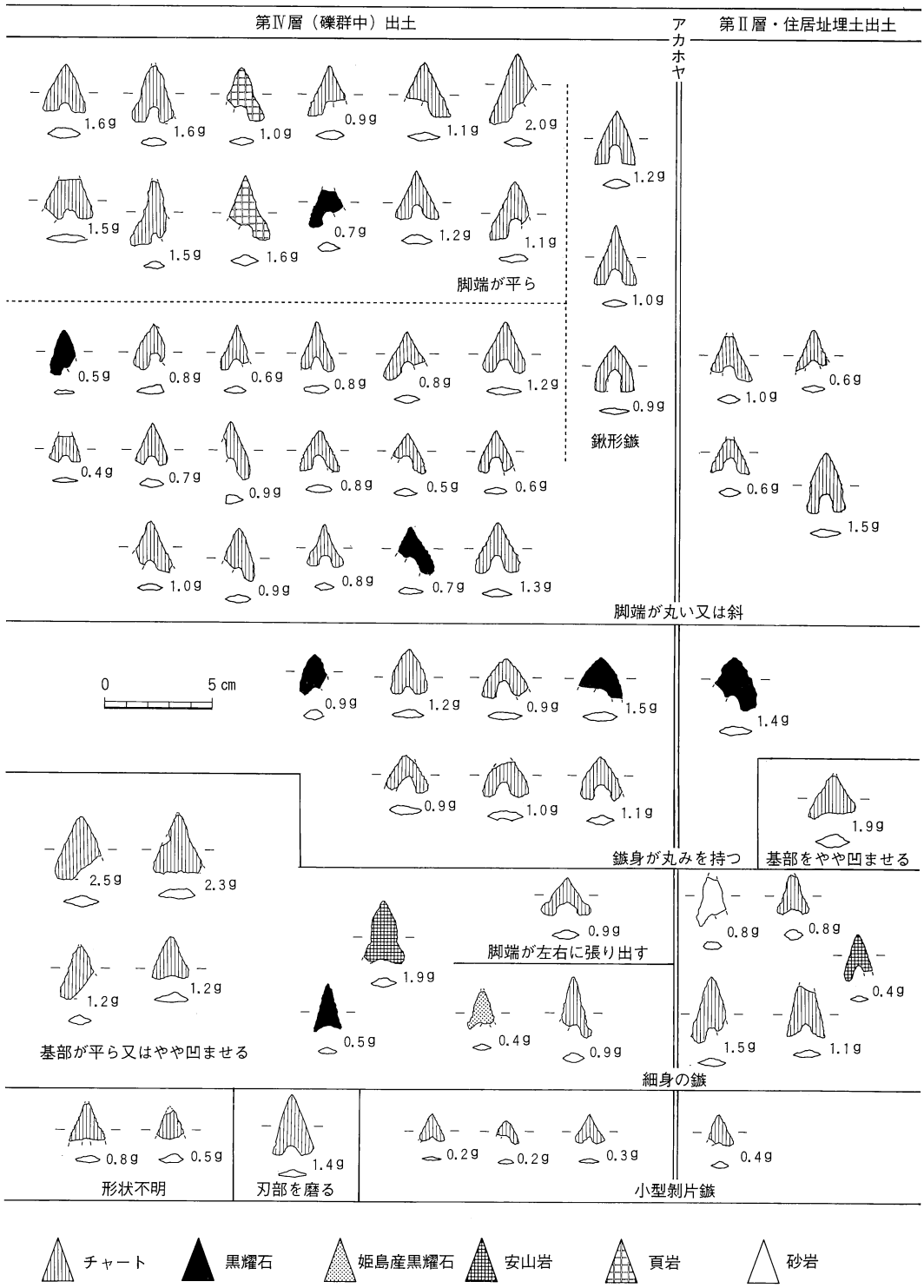
石鏃についてはその属性のうち形態（特に先端部）、大きさ、重量が特に重要な意味を持つと考えられる。しかし、矢柄を装着した全体のバランスについては不明であるため、いま一つ原像に迫りえない。ここでは形態・大きさ・石材を示す分類図を作成した（第47図）。この分類基準は極めて主観的・感覚的なものである。



第46図　**石器実測図(5)（48～54→１／４，55→１／６）**

その他の石器

10は第Ⅱ層からの出土で、全体に細かい加工を施しト字形に仕上げる。チャート製。23は一部自然面を残しながら、周囲を粗く打ち欠いている。ＳＡ９埋土から出土している。ホルンフェルス製。31・32は一定方向から剝片を取っている。31は流紋岩、32は頁岩である。33は泥質ホルンフェルスで先端部に若干の加工を施す。



第47図　**石鏃分類図（数値は重量）（1／3）**

第Ⅳ章　まとめ

内野々遺跡は、小規模な沖積地に臨む低丘陵の縁に立地し、縄文時代から古墳時代まで断続的に営まれた集落である。縄文時代については、住居址の検出はみなかったものの、礫群・集石遺構の検出、大量な土器の出土はそこに人々の生活があったことを推し量るにあまりあるものである。今回の調査は、この地域の埋もれた歴史の一隅を垣間見るとともに、県内他地域と県北、さらには瀬戸内地方をも含めた広範囲な人やものの交流を想起させるものであった。以下、縄文時代・弥生時代の遺構と遺物について簡略ではあるがまとめを述べる。

縄文時代について

第Ⅳ層より縄文早期の礫群と集石遺構23基が検出された。この夥しい量の礫群は平坦面に見られ1,000㎡以上にも及ぶ。使用されている礫は砂岩・頁岩・チャート類が主で、付近の耳川、あるいは田代川で採集したものであろう。礫群は傾斜地であるＢ区には見られず、生活面と考えられる平坦地に広がっており、単に廃棄礫という認識では説明がつけにくい。このことは高鍋町大戸ノ口第２遺跡においても指摘されている[1]。集石遺構は礫群同レベル及び下層に検出された。集石遺構の用途については、屋外炉あるいは民族例に見られる石蒸料理などが推定されており、いずれも調理施設としての認識がなされている[2]。田野町天神河内第１遺跡では集石遺構の礫に残存していた脂肪酸分析の結果、アカハラ・モズ・キジなどの野鳥やイノシシ・シカなどの動物類に由来する脂肪酸が確認されている[3]。現段階では集石遺構を調理施設として捉えておくことは妥当であろう。内野々遺跡で検出された集石遺構には、第Ⅲ章で概観したようにいくつかの形態が存在した。ここで注目されるのは、礫群よりも下位で検出されたＳＩ15～19が全て掘り込みを持ち配石が見られたということである。礫群同レベルで検出されたものには、掘り込みは見られても明確な配石が伴っていない。このことは、時期の降下に伴う簡略化傾向として捉えられ、また、この簡略化は調理機能の土器への依存度の高まりと無関係ではないだろう。しかし、集石遺構は継続して使用され、また、本遺跡では検出されていないが後期の集石遺構も各地で報告されている[4]ことを考えるならば、調理施設としての集石遺構の使用に日常・非日常という使い分けを想定することも可能であろう。

出土した縄文土器は、早期のものが最も多く前平式、下剝峰式、早水台式などが見られた。押型文土器は外反しはじめた口縁部に横位と縦位の施文が混在するもの、粗雑化した縦位の押型文が施されるものなど田村式に移行する時期と考えられる。また、押型文土器や無文土器の中に繊維の混入が確認されたことは注目される。

県内で出土の希薄だった前期・中期の土器も見られた。轟Ｃ・Ｄ式土器は西・中九州を中心に分布し前期末に比定される。船元Ⅱ式土器の出土は、瀬戸内地方との直接的あるいは間接的な交流を示すものである。船元式土器、あるいはその影響を受け在地化したキャリパー形の土器は天

神河内第１遺跡、大戸ノ口第２遺跡、北方町笠下遺跡[5]などに見られる。

後・晩期のものは少量ではあるが、西平式土器、三万田式土器の出土が見られた。組織痕を有する土器も見られる。突帯文土器には刻みが見られず、刻目突帯文土器出現の前段階であろうと思われる。孔列文土器の出土も注目される。

石器には石鏃、石匙、石錘、石錐、磨石、石皿などが見られた。石鏃には姫島産黒耀石が見られた。磨石には尾鈴山酸性岩類が多く用いられている。この石材は天神河内第１遺跡、須木村大年谷遺跡、高崎町海蔵寺遺跡、南郷町崩野遺跡、串間市下弓田遺跡など広く県内に分布することが確認されつつある[6]。

弥生時代について

弥生時代の住居址は10軒検出された。ＳＡ１、ＳＡ３、ＳＡ８は張り出し部を持つ。ＳＡ１は櫛描波状文を施す複合口縁壷が見られた。ＳＡ３には櫛描波状文を持つ無頸壷や、丸底気味の平底となる壷底部、胴上部が最大径となり口縁部が外反しながら延びる甕がみられる。ＳＡ８は検出住居址中最大のものである。櫛描波状文を施す複合口縁壷が見られ、壷形土器の底部は丸底に近づきながらも平底を呈す。甕形土器は頸部から口縁部にかけて滑らかに外反しながら延びるものが多く、胴上部に最大径を持つ。底部は平底である。これらは全て後期終末と考えられる。なお、ＳＡ８は４軒の切り合いを見せるが、その切り合い関係はＳＡ５→ＳＡ４→ＳＡ８、ＳＡ10→ＳＡ８となる。ＳＡ５・ＳＡ10からは図化できる遺物は出土していないが付近に見られた遺物から、また、ＳＡ４については出土した甕の様相から、ＳＡ８と大きく時期を異にするとは考えにくく、後期後半から終末の間で捉えておきたい。ＳＡ６・ＳＡ９は壷形土器の底部に平底を残し、甕形土器には上げ底と平底が見られる。頸部には明瞭な稜は見られず、胴上部に最大径を持つ。両者ともに後期終末と考える。ＳＡ６からは異なる３タイプの石包丁が出土しており注目される[7]。

ＳＡ２は床上に核になる砂岩と、そこから剝ぎ取られた剝片（５～10㎝大、３～５㎜厚）がかたまって見られた。何らかの石器作成に関するものと思われるが、そのような薄手の砂岩剝片を用いた石器は出土しておらず，その用途は未だ不明である。６の脚付壷は丁寧に磨かれており、その器形は脚を除けば小型丸底壷といっても差し支えない。８はタマネギ形の胴部を持つ長頸壷で、乳房状の底部を呈す。宮崎学園都市前原南遺跡[8]においても古墳時代初頭とされた住居址から同様の底部を持つ長頸壷が出土している。10の櫛描波状文を施す複合口縁壷や26・27の若干上げ底の残る甕形土器など後期終末的要素を残しながらも、６・８の存在を考慮するならばＳＡ２は古墳時代初頭に位置づけるのが妥当であろう。

ＳＡ７はやや膨らみを持つ高坏脚部が出土しているが、１点のみの出土であり遺構の残りも良好とは言えない。判断を下すことは危険であるが、後期終末から古墳時代初頭の幅の中で捉えておきたい。

検出された住居址からは、縄文以降の内野々遺跡がごく限られた時期のみ営まれた集落として見えてくるが、89の壷形土器は屈曲する頸部と大きく外湾する口縁部から、検出住居址よりも遡る時期と考えられる。ＳＡ８に流れ込んで出土した60の甕形土器は古墳時代前期のものと思われ、また、遺跡範囲内で須恵器が表採されていることなどから、周囲に当該時期の遺構が存在した可能性もある。

おわりに

近年、地域開発事業は活発に行われている。その影で姿を消してゆく遺跡も少なくない。内野々遺跡を調査する契機となった林業試験場建設は、林産業を中心とするこの地域にとっては歓迎されることである。一方では、夏の酷暑の中汗を流しながら発掘調査に参加・協力下さった地元の方々がいる。このことは、地域開発事業と埋蔵文化財保護、言い換えれば新しい歴史を作っていこうとする行為と自分たちの歴史を守ろうとする行為である。その間にいる我々調査員は何をすべきなのか。貴重な情報を永い年月にわたり保存し続けた遺跡に接し、現場や遺物整理の段階でその全てを汲み取ることができたであろうか。少なくとも知りえた情報の全てを社会に還元してゆくことが、我々の担うべき役割である気がしてならない。こうした自戒を抱きつつ、今後明らかになるであろう様々な情報を公表してゆきたい。

註

(1) 『大戸ノ口第２遺跡』　高鍋町教育委員会　1991

(2) 高鍋町水谷原遺跡において、調査担当者は調理施設としての集石遺構以外に焼礫供給源としての用途を想定している。　『水谷原遺跡』　宮崎県教育委員会　1988

(3) 『天神河内第１遺跡』　宮崎県教育委員会　1991

(4) 例えば
『丸野第２遺跡』　田野町教育委員会　1990
『崩野遺跡』Ⅰ・Ⅱ　南郷町教育委員会　1990・1991

(5) 『笠下遺跡』　北方町教育委員会　1991

(6) 宍戸章氏の御教示による。

(7) 都農町新別府下原遺跡のＡ－１区１号住居から異なる２種の石包丁が出土し弥生時代後期終末に比定されている。　『新別府下原遺跡』　都農町教育委員会　1990

(8) 『前原南遺跡』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第４集　宮崎県教育委員会　1988
そのほか、日向市百町原地区遺跡、都農町新別府下原遺跡、宮崎市源藤遺跡にも類似した底部をもつものが見られ、弥生時代後期終末に比定されている。
『百町原地区遺跡』　日向市教育委員会　1989
『源藤遺跡』　宮崎市教育委員会　1987

図版1

遺跡全景

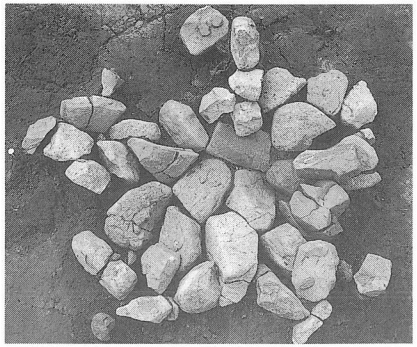
基本層序

礫群検出状況

基本層序（中央は SI－23断面）

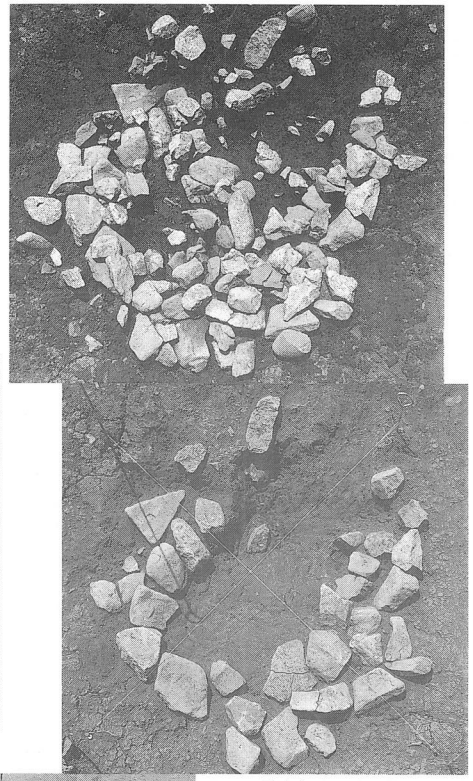
同上

（上）SI－2　（下）同礫除去後

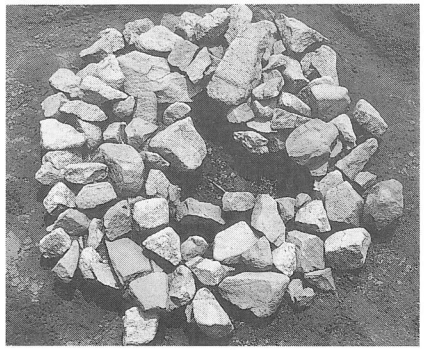


SI－7

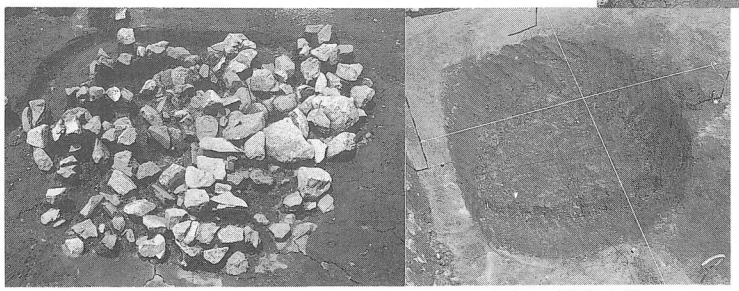
手前から SI－10，SI－11



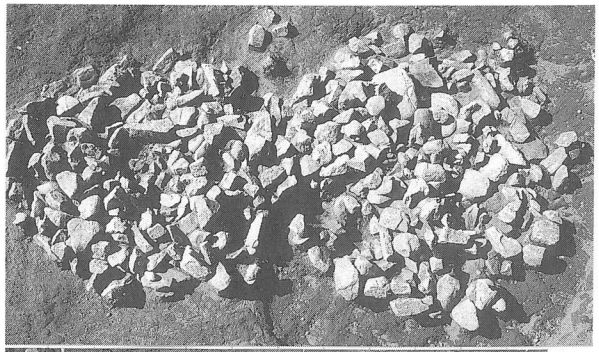
（上）SI－19
（下）同　配石

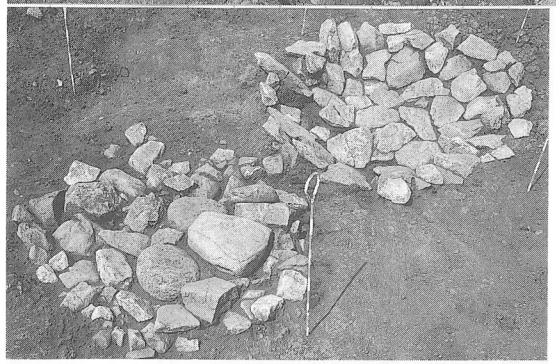


SI－1

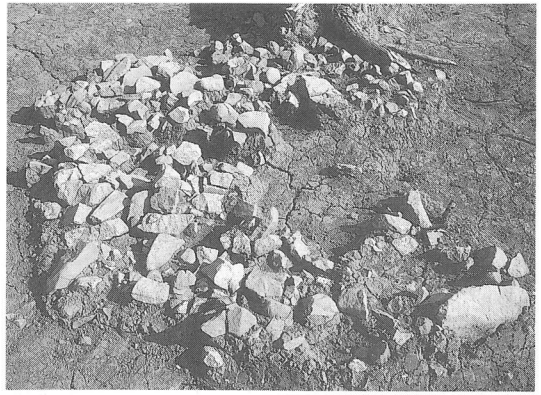


SI－9　　同左　礫除去後

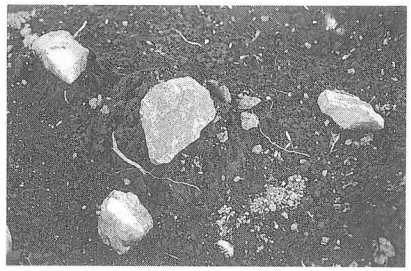




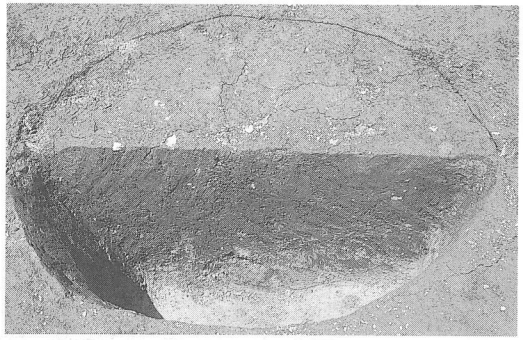
（上）左から SI－15，SI－16
（下）配石　SI－16，SI－15



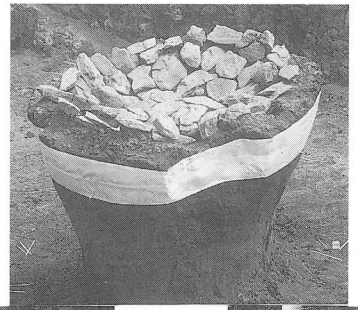
SI－22

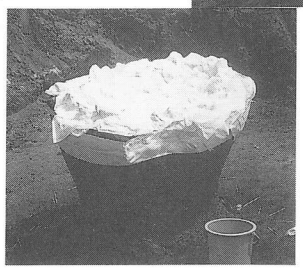


スクレイパー出土状況

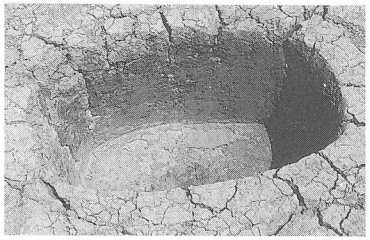


SC－13　断面





SI－15
配石切取
作業

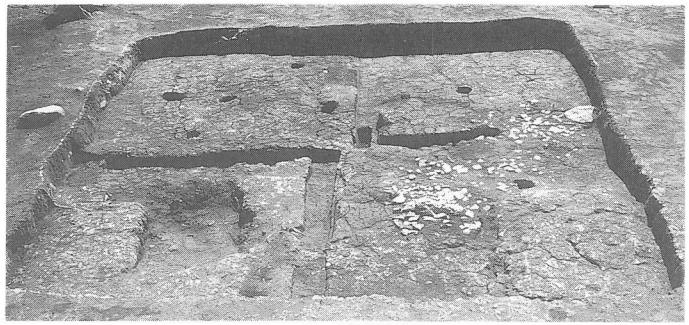


SC－11

図版4

住居址完掘状況（SA－９のみ未掘）

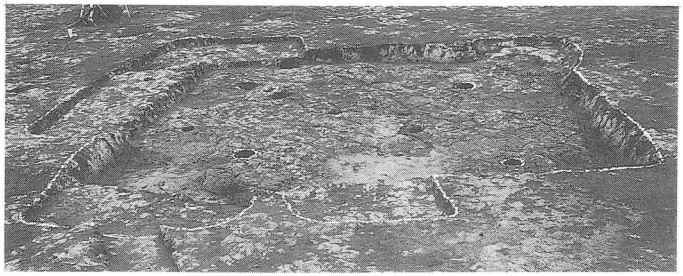
住居址　検出状況



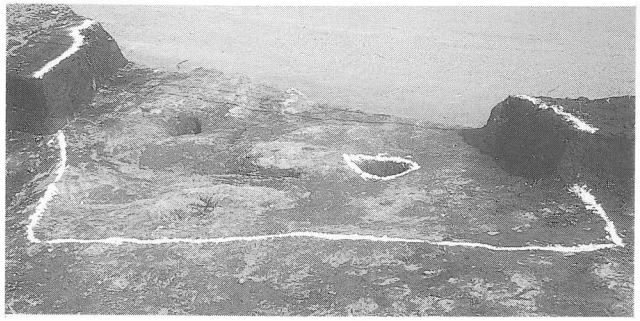
SA－２　完掘状況

SA－２　砂岩剝片検出状況

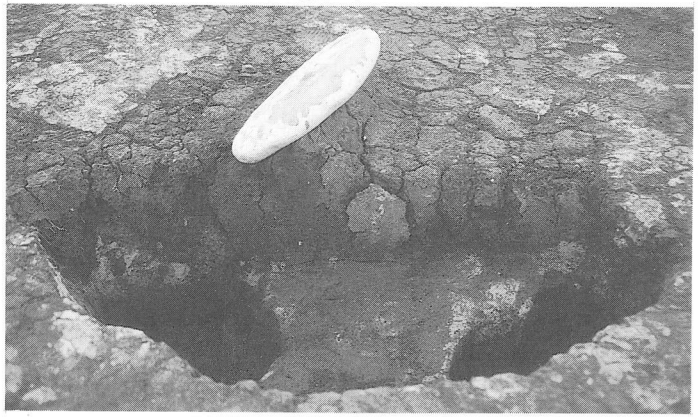
図版5



SA－3



SA－7

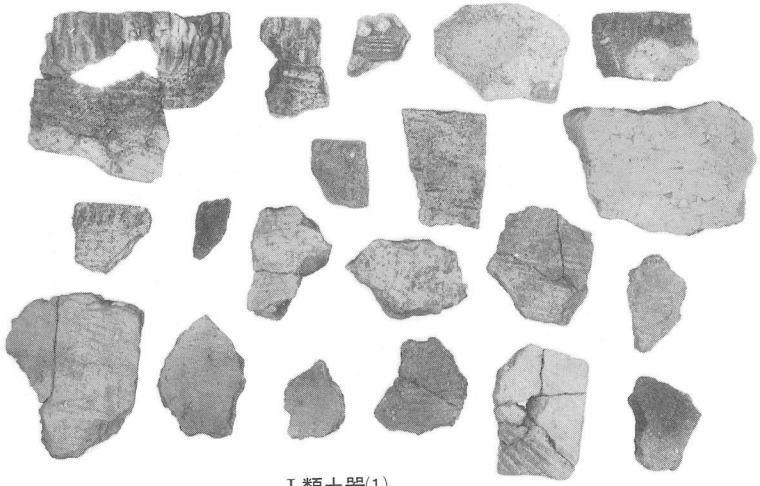


SC－6

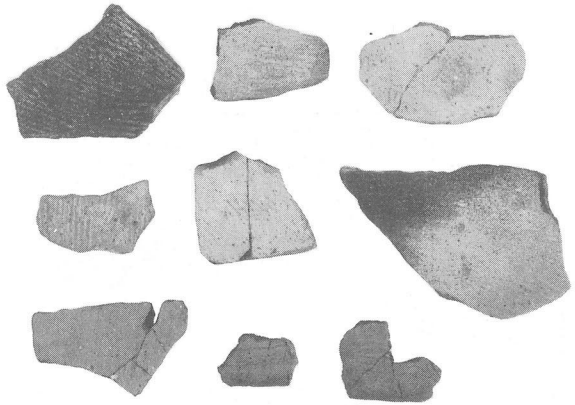
SA－9　検出状況

SA－9　完掘状況

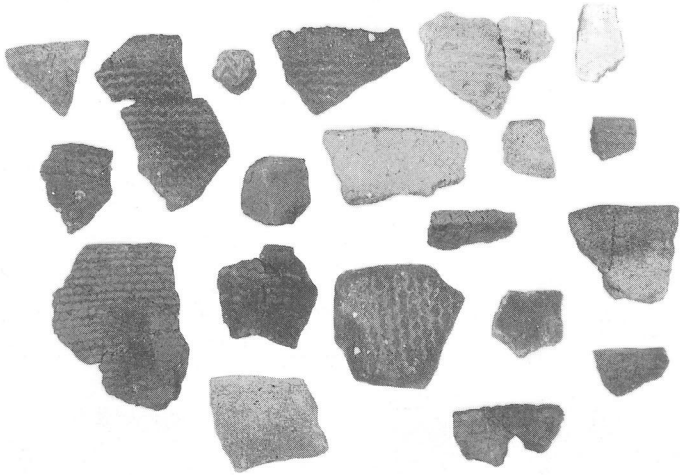
SC－3　断面



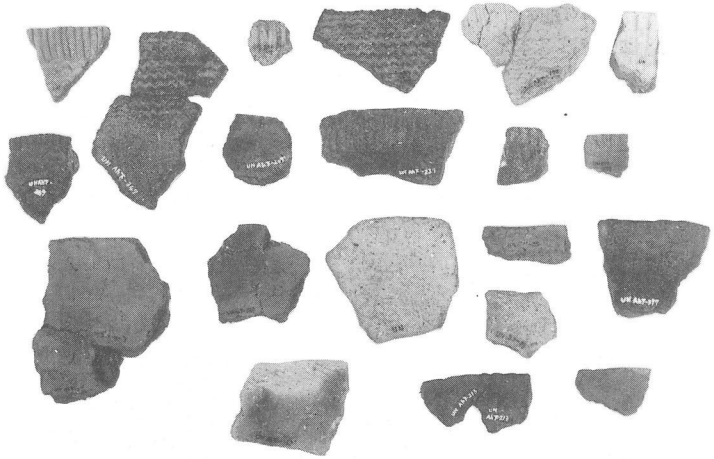
Ⅰ類土器(1)



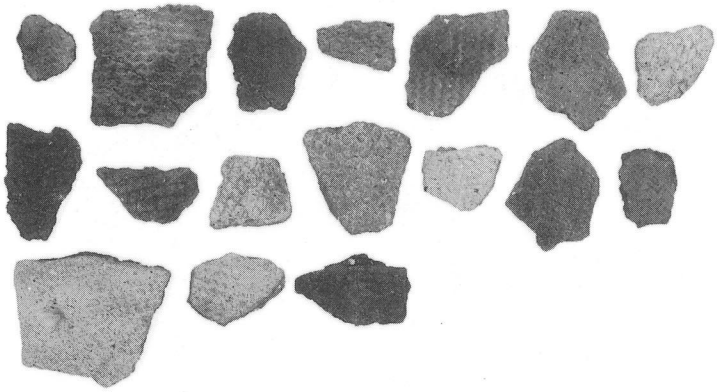
Ⅰ類土器(2)



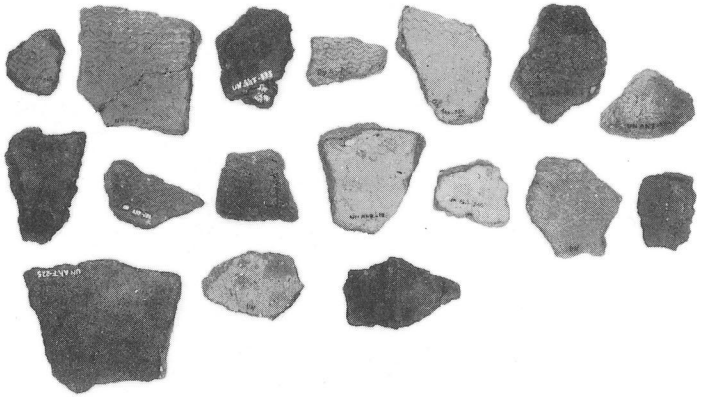
Ⅱ類土器(1)



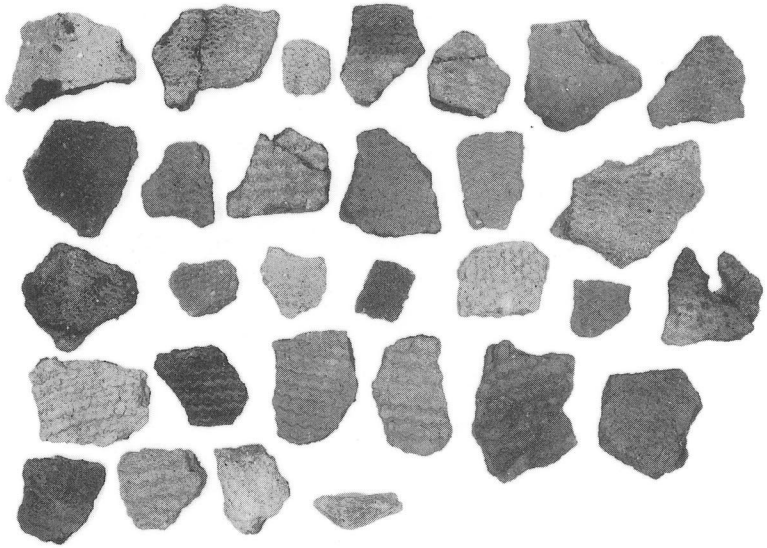
同左　内面



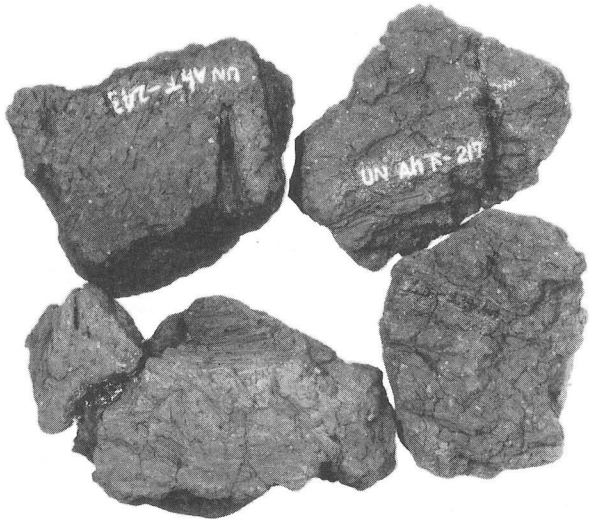
Ⅱ類土器(2)



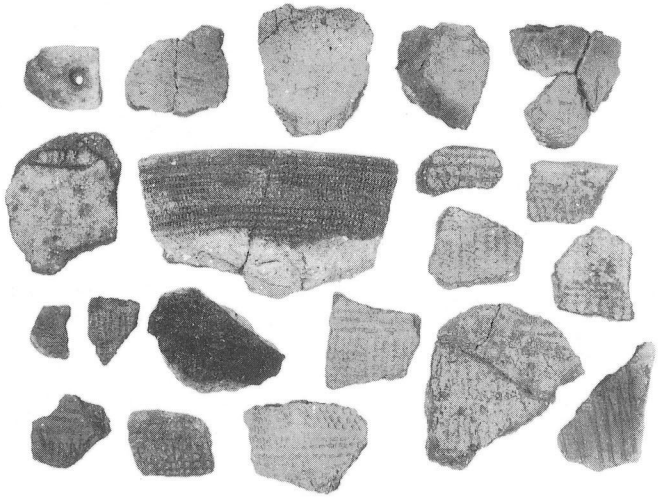
同左　内面



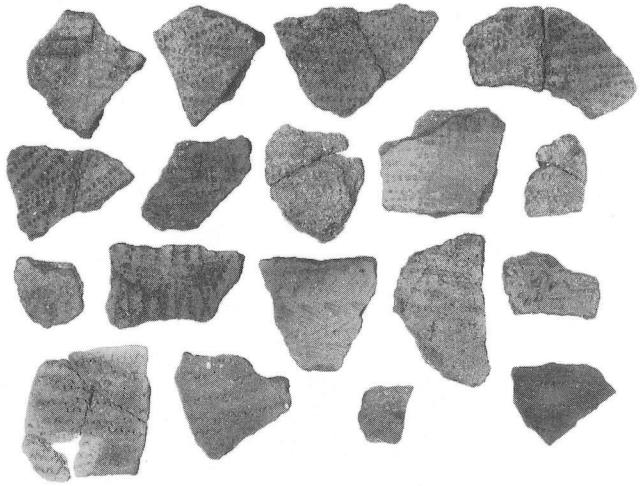
Ⅱ類土器(3)



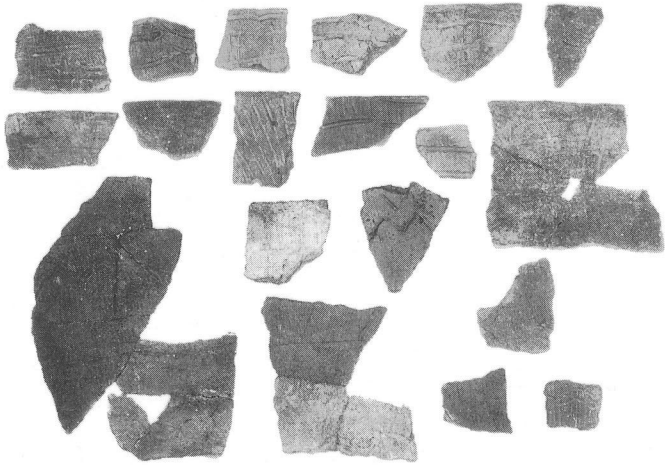
繊維混入土器



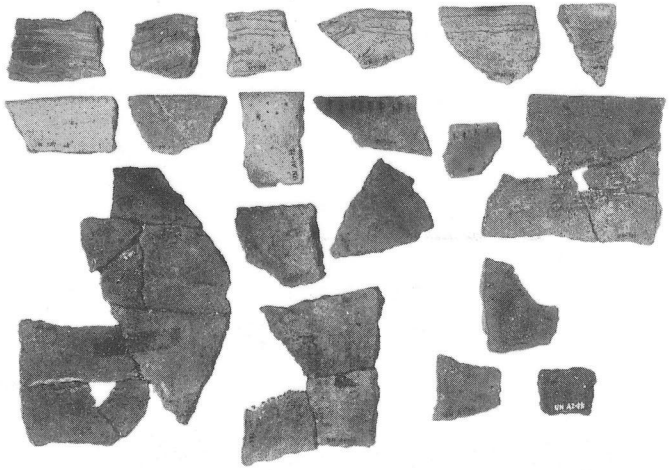
Ⅲ類土器・Ⅳ類土器(1)



Ⅳ類土器(2)

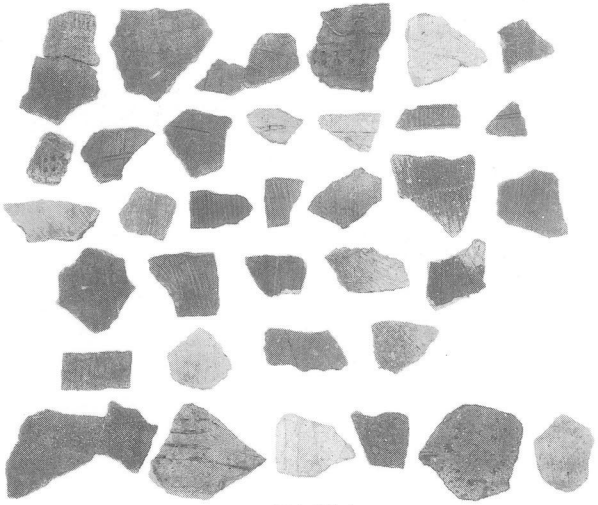


Ⅴ類土器(1)

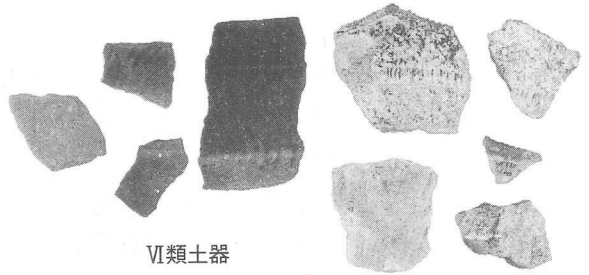


同左　内面

図版9

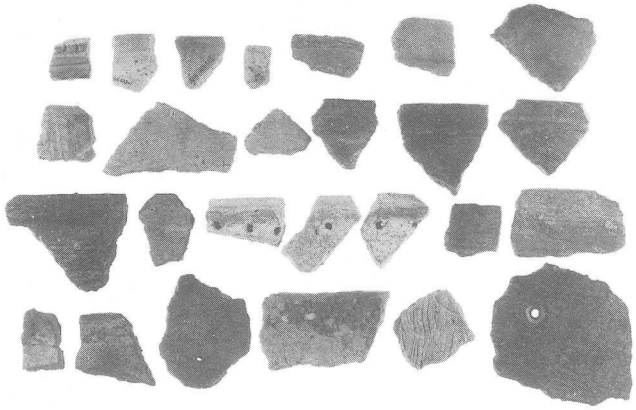


Ⅴ類土器(2)

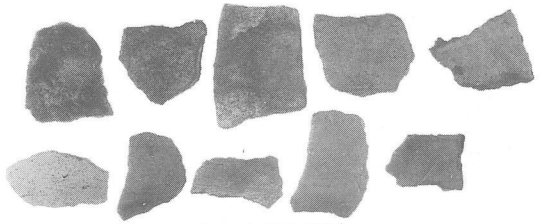


Ⅵ類土器

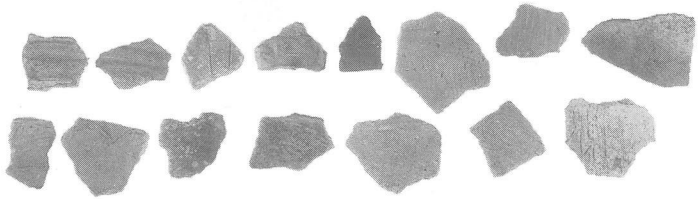
同上　内面



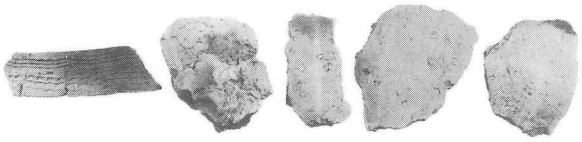
後・晩期土器(1)



後・晩期土器(2)

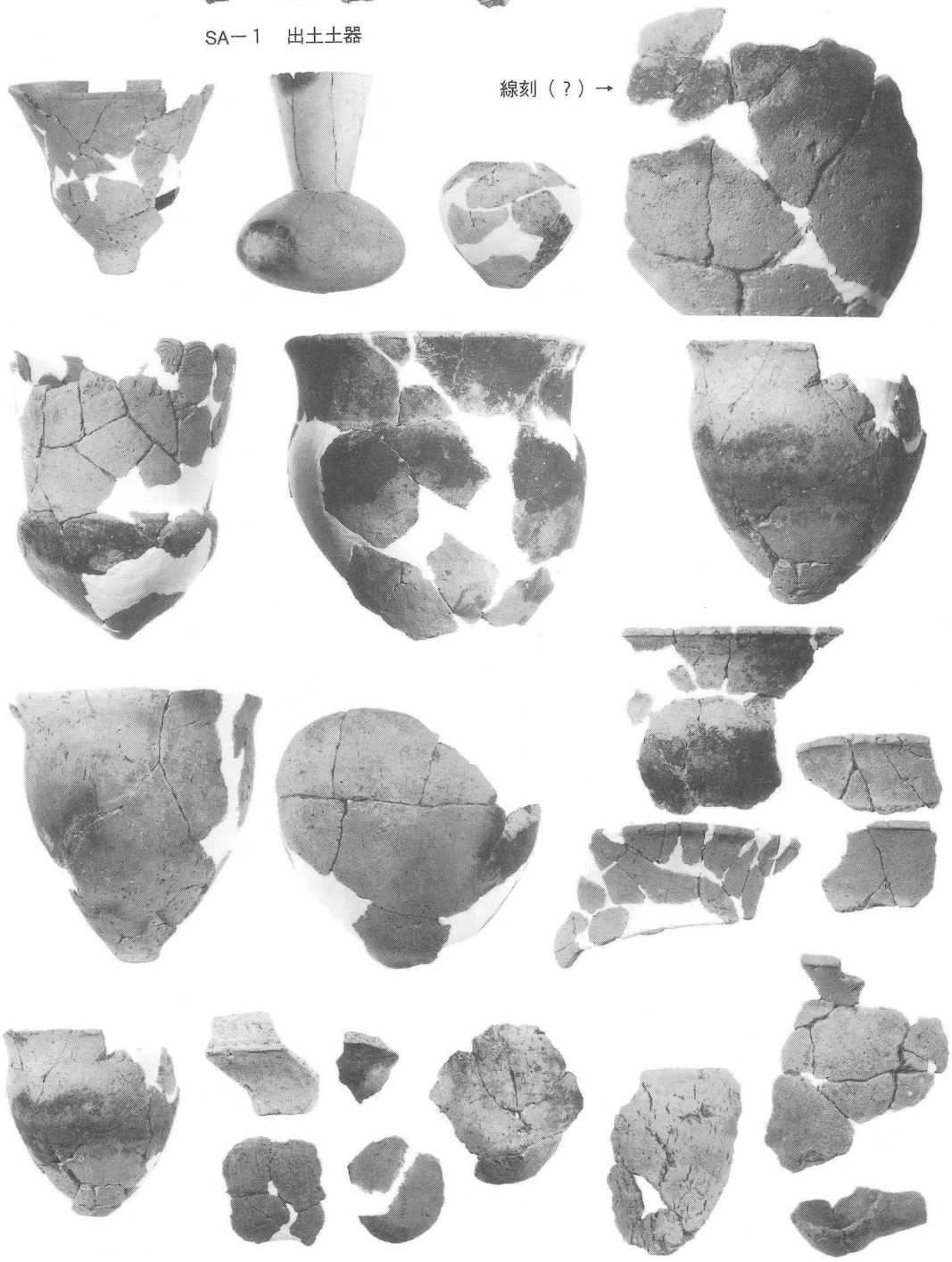


時期不明土器

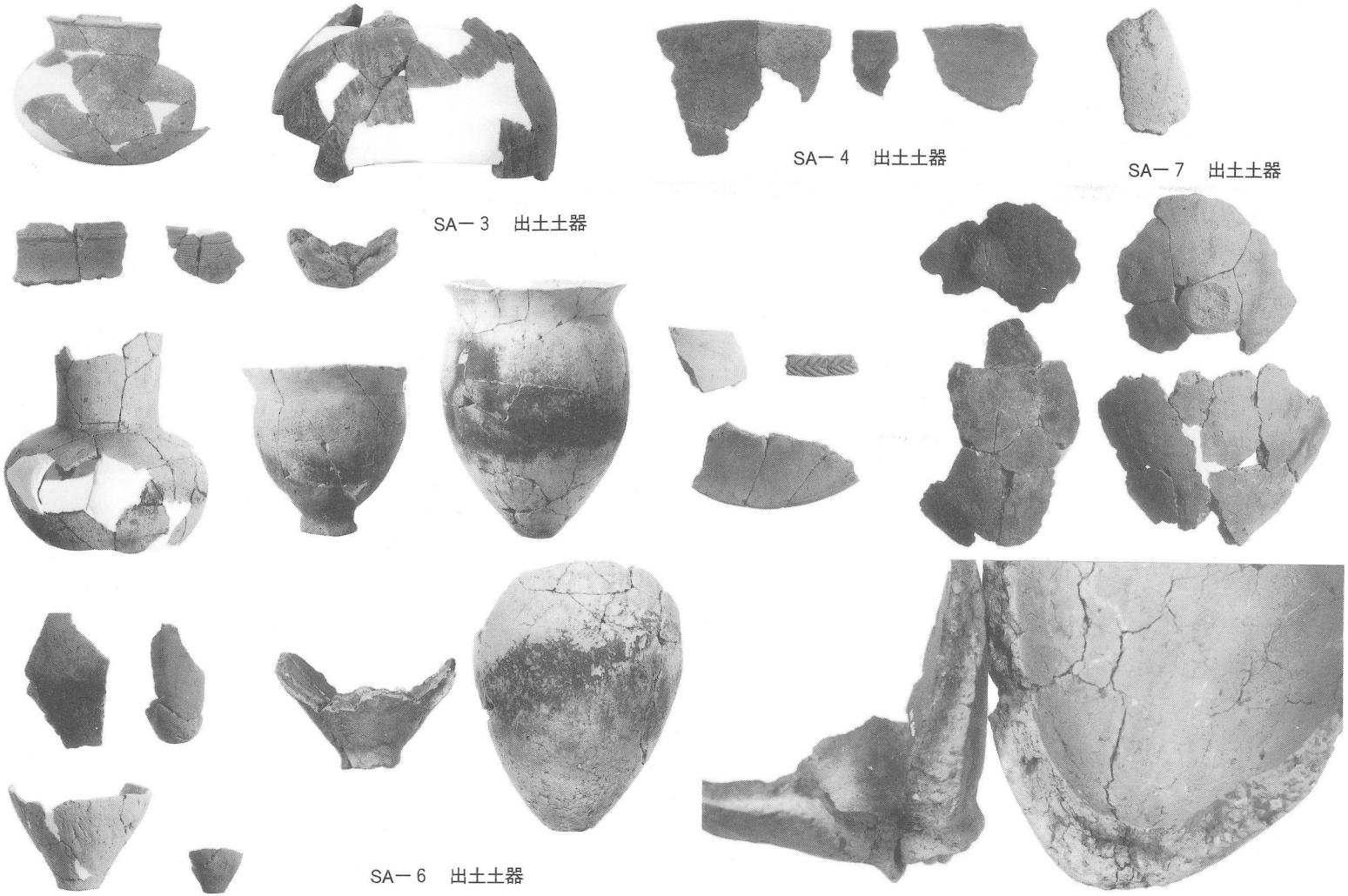


SA－1　出土土器

線刻（？）→



SA－2　出土土器



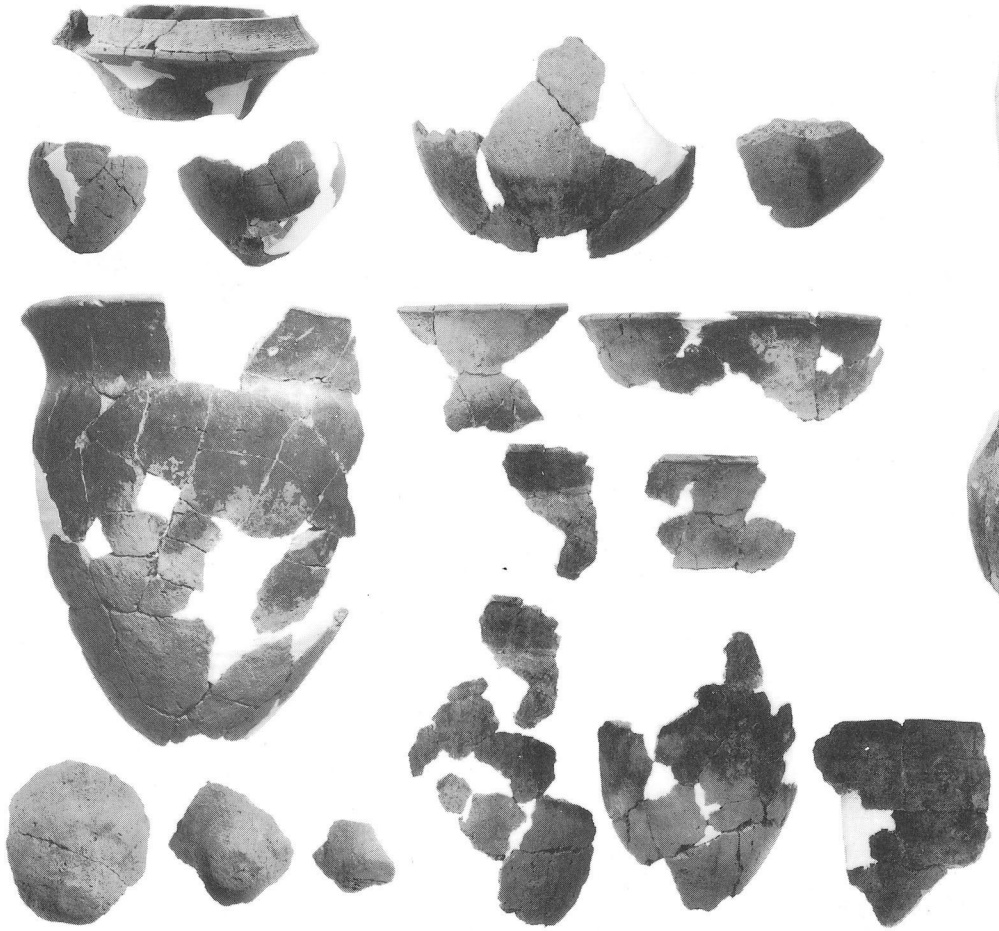
SA－3　出土土器

SA－4　出土土器

SA－7　出土土器

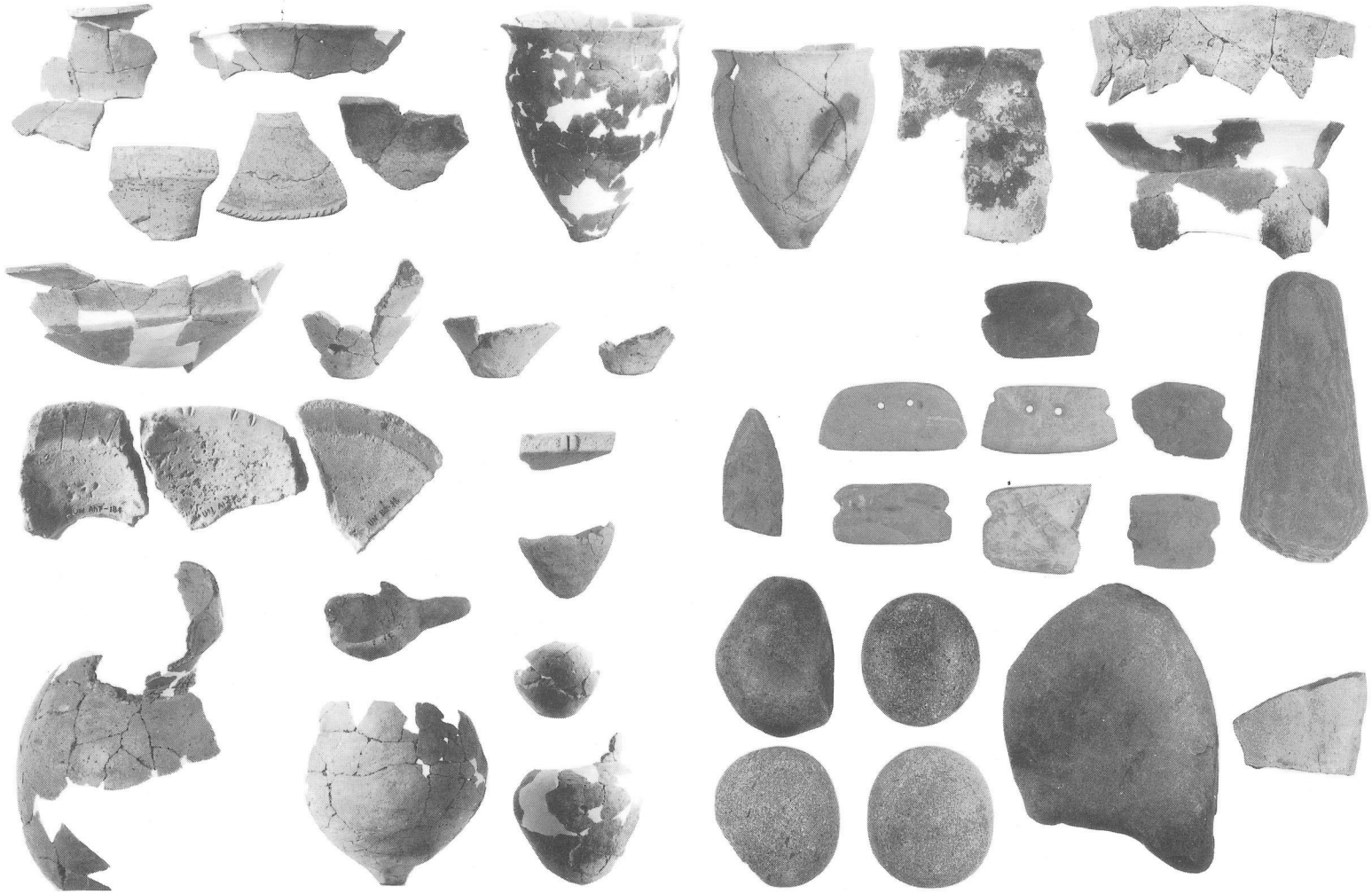
SA－6　出土土器

SA－6　甕型土器底部断面



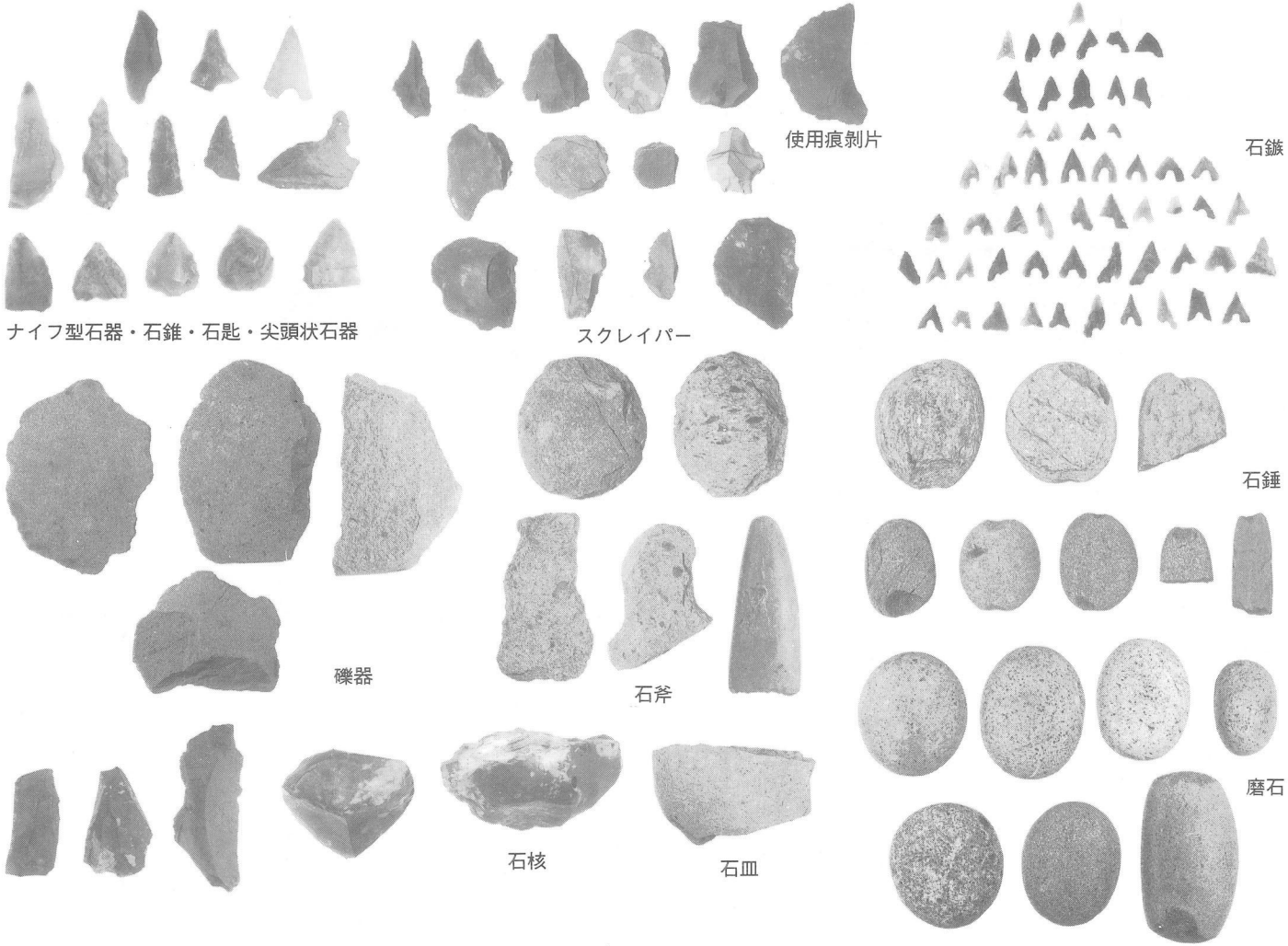
SA－8　出土土器

SA－9　出土土器



遺構外及びＢ区出土土器

住居址出土及び弥生時代石器



遺構外出土土器

付論

内野々遺跡出土炭化物の識別

松谷暁子（東京大学総合研究資料館）

住居址床面から出土した長頸壷底部に付着していた炭化物の識別を依頼された。筆者がこれまで行ってきた研究の一部に、実体顕微鏡下で外形から判断できる種子が残っていない場合に、走査型電子顕微鏡での観察によって植物の種類を識別しようと試みてきた。未解決の試料も残っているが、類例が増えるのを待って判断できた場合もある。最近経験した例では、古墳時代の土器の中に入っていた炭化物からイネ籾やキビ穎の破片に類似した細胞構造が検出された（松谷1991ａ）こともあり、内野々遺跡から出土した炭化物からも何等かの植物構造が検出されないかどうか、走査型電子顕微鏡による観察を試みた。

実体顕微鏡での観察では、外形から推察できる粒状物の存在は明瞭ではない。しかし、粉状ではなく、植物らしき存在が残っているように感じられる。そこで、少量を残してＡ・Ｂ・Ｃの三試料に分割し、アルミニウムの試料台に接着し、白金蒸着後、走査型電子顕微鏡（東京大学総合研究資料館所蔵の日立Ｓ－700型）での観察を行った。

その結果、三試料とも所々に多数の平行線状の構造が認められた（写真１ａ－１ｃ，２ａ，３ａ－３ｂ，４ａ－４ｂ）。その下層に多角形の細胞が認められる場合もある（写真３ａ－３ｂ，４ｂ）。

このような構造は炭化玄米粒、とくに塊状で出土したものを分離した場合に推察される構造（写真５－６ａ）の中に類似のものが認められるように思われる。塊から分離した場合には様々な面で分離し、従って露出する内部の構造も様々である。比較のために示した写真は、古墳時代の神奈川県海老名本郷遺跡から出土した炭化イネ粒である。この遺跡から出土した炭化塊の中には籾の付着した粒も多く認められるが、籾の付いていない粒も多く認められる（松谷1991ｂ）。その中の一部に、粒表面の下層に多数の平行線からなる細胞（横細胞に相当すると考えられる）が観察されるが、さらにその下には多角形の細胞が認められ、内野々遺跡の炭化物で観察される細胞の形態と類似しているように思われる。内野々遺跡の炭化物の存在した時代は、弥生後期終末～古墳時代初頭とのことなので、イネの存在は十分に可能で、従ってイネ粒の可能性は考えうる。ただし、外形からわかるような粒状物が残っていないので、玄米だとしても、ある程度細かく砕かれた状態と考えられる。

土器内面に付着した炭化物で、外形から炭化米かと思われた炭化物が、イネではなくマメ科の子葉ではないかという報告（佐藤1983）がある。半分に割れた出土マメにも平行線の列んだ細胞が観察されるが、平行線の間隔やその下層の細胞の形態が異なるように思われる。しかし、イネやマメ以外の植物種子にも類似の構造が存在する可能性も否定できないので、イネとの断定は差し控えておきたい。将来の類例を待つことが必要であろう。

《文献》

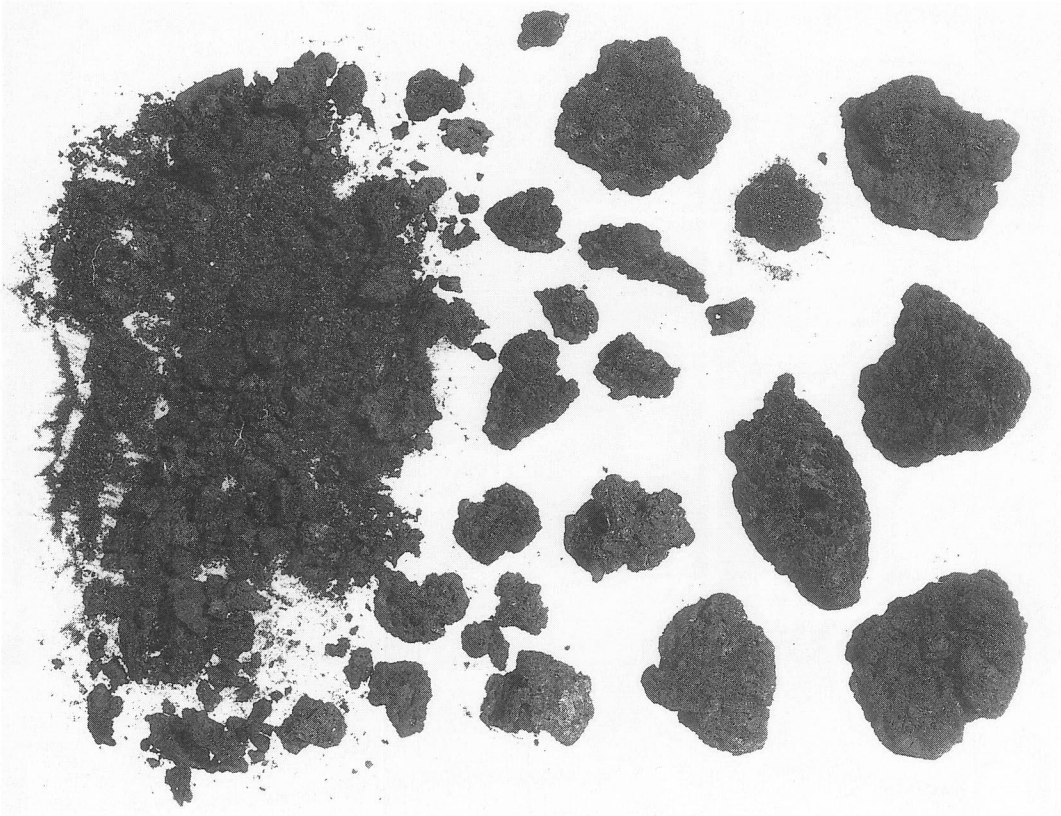
松谷暁子　1991ａ　「武田遺跡群出土の植物遺残の識別」『武田Ⅳ－1990年度武田遺跡群発掘調査の成果』（財）勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告５集　109－113ｐ

松谷暁子　1991ｂ　「海老名本郷遺跡出土炭化植物遺残の識別」『海老名本郷遺跡Ⅷ』本郷遺跡調査団　288－293ｐ　図版102－107

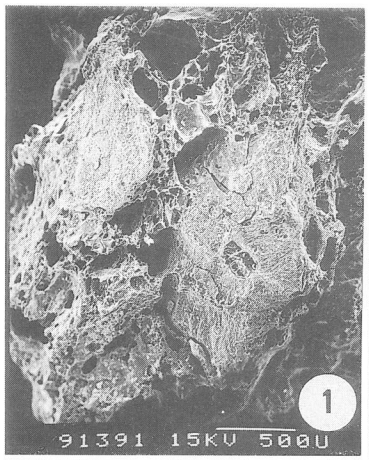
佐藤敏也　1983　「西岩田遺跡出土土器内面に付着する炭化物分析結果」『西岩田－近畿自動車道天理－吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』304－305ｐ

《写真説明》

1　内野々遺跡出土炭化物塊の一部Ａ
1ａ　写真１右下部分の拡大
1ｂ　写真１ａ右上部分の拡大
1ｃ　写真１ａ左下部分の拡大
2　内野々遺跡出土炭化物の別破片Ｂ
2ａ　写真２中央部の拡大
3　内野々遺跡出土炭化物の別破片
3ａ　写真３右下およびその右部分（写真３には写っていない）の拡大
3ｂ　写真３ａ中央部の拡大
4　内野々遺跡出土炭化物の別破片Ｃ
4ａ　写真４中央部の拡大
4ｂ　写真４ａ中央部の拡大
5　本郷遺跡出土炭化米Ａ
5ａ　写真５拡大
5ｂ　写真５ａ右中央部の拡大
5ｃ　写真５ａ左上部の拡大
6　本郷遺跡出土炭化米Ｂ
6ａ　写真６中央部の拡大



SA－２　出土長頸壺内炭化物（実大）


1
91391 15KV 500U

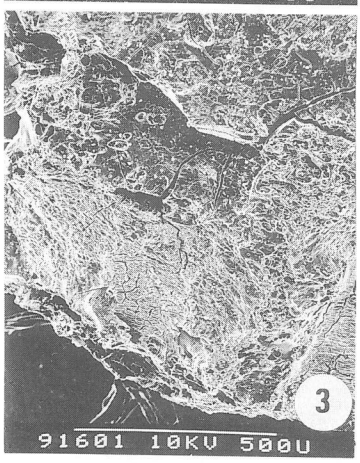
1a
91394 15KV 500U

1b
91395 15KV 50U

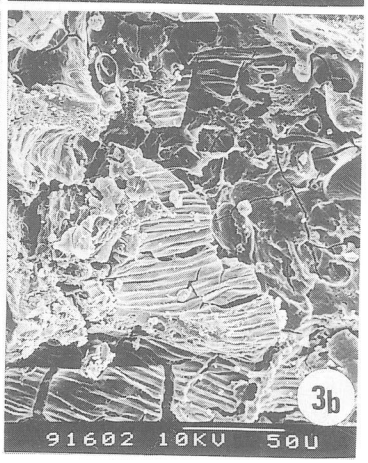
1c
91396 15KV 50U

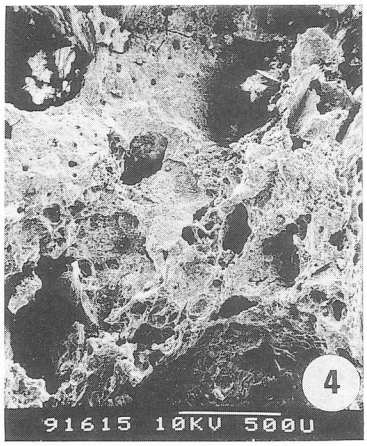
2
91606 10KV 500U

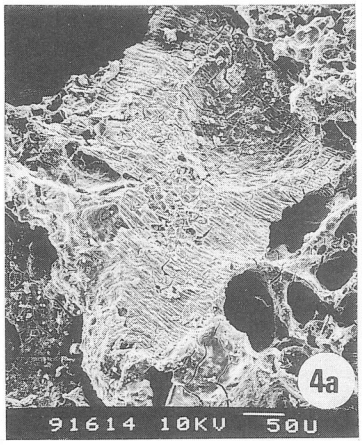
2a
91607 10KV 50U

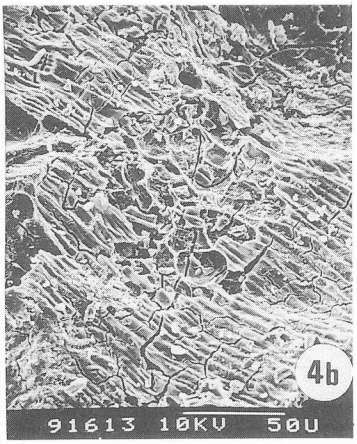

3
91601 10KV 500U

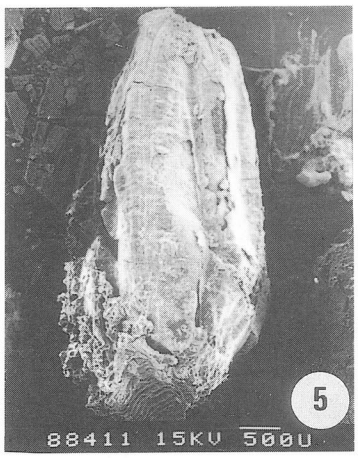
3a
91603 10KV 50U


3b
91602 10KV 50U

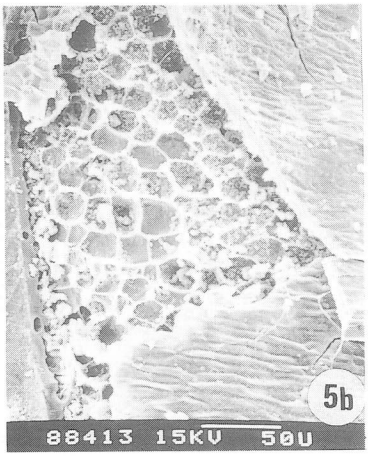

4
91615 10KV 500U

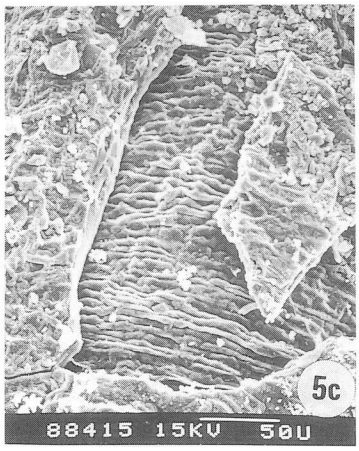

4a
91614 10KV 50U

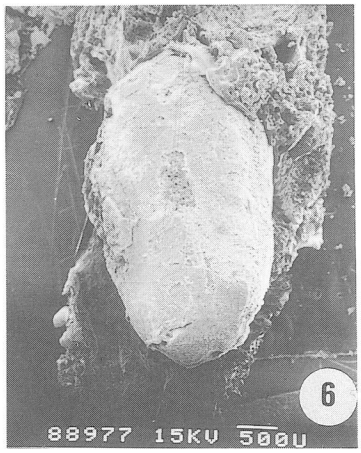

4b
91613 10KV 50U

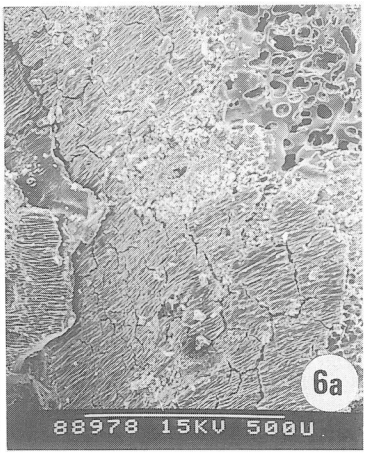

5
88411 15KV 500U

5a
88412 15KV 500U


5b
88413 15KV 50U


5c
88415 15KV 50U


6
88977 15KV 500U


6a
88978 15KV 500U

内野々遺跡

林業試験場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992. 3

編集
発行　宮崎県教育委員会
〒880 宮崎市橘通東1丁目9－10

印刷　㈲ 富士写真印刷
〒880－02 宮崎郡佐土原町大字下那珂
字浮橋7418－2